

島根県柿木村

# 大井谷の棚田

大井谷の棚田歴史研究部会研究調査報告書

2002年3月

柿木村教育委員会

島根県柿木村

# 大井谷の棚田

大井谷の棚田歴史研究部会研究調査報告書

柿木村教育委員会



大井谷全景



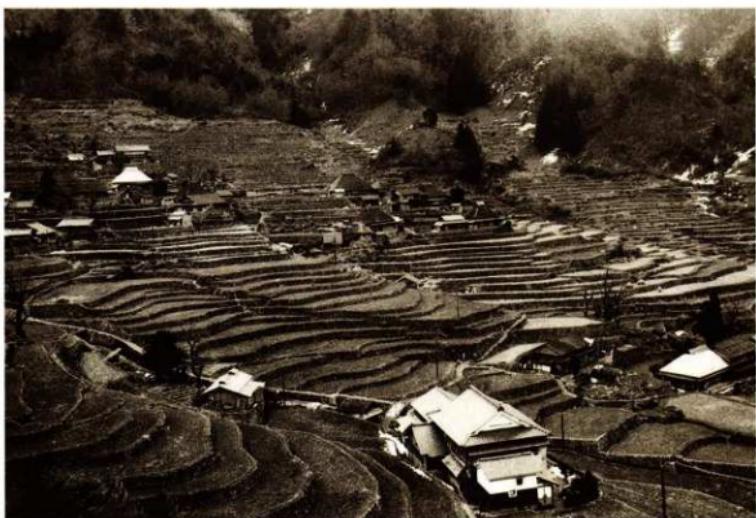
田植え前の棚田



収穫時期の棚田



棚田の雪景色



昭和30年代の棚田



等高線の間隔は10m

大井谷の地籍図  
(広島大学中央図書館所蔵)

# 目 次

緒 言	1
第1章 棚田の現況	9
1はじめに	11
(1) 目的	11
(2) 方法	11
(3) 実施	11
2 調査報告	14
(1) カルテからの集計結果	14
(2) データベース化	25
(3) 石積みの実測	39
(4) 断面調査	40
(5) 利水畜道調査	45
後記	59
第2章 棚田の歴史	61
はじめに	63
1 前近代における歴史的様相	64
(1) 歴史的景観の形成	64
(2) 18世紀前半における土地所有の状況	67
2 近代における歴史的様相	69
(1) 明治期以降の棚田景観	69
(2) 耕地の所有状況と棚田の農作業	75
(3) 土地所有権の移動状況	80
3 農地改革期の地主・小作関係と農業生産力	82
(1) 農地改革直前における地主・小作関係	82
(2) 大井谷の生産力の柿木村内での位置	83
むすびにかえて	86

## 第3章 棚田の民俗 ······ 89

<b>1 大井谷の集落</b> ······	<b>91</b>
(1) 地名 ······	91
(2) 各戸の系統 ······	94
(3) 民家の屋号 ······	102
(4) 神社と寺院 ······	105
(5) 渓流と橋梁 ······	114
(6) 史跡と伝承 ······	115
<b>2 大井谷の生業</b> ······	<b>122</b>
(1) 産業の概要 ······	122
(2) 昔の稻作 ~40~50年前までの稻作~ ······	122
(3) 稲作の移り変わり ······	133
(4) 耕作面積の移り変わり ······	134
(5) 稲作に関するその他のこと ······	134
(6) 現在の稻作 ······	136
(7) 烟地の利用 ······	137
(8) 大井谷の農事曆 ······	141
<b>3 大井谷の生活</b> ······	<b>142</b>
(1) 衣生活 ······	142
(2) 食生活 ······	142
(3) 住生活 ······	145
<b>4 大井谷の社会</b> ······	<b>150</b>
(1) 翠子関係 ······	150
(2) 講 ······	150
(3) 虫祈祷等 ······	150
(4) 置き薬 ······	151
(5) 婚姻 ······	151
(6) 弁式 ······	151
<b>5 大井谷の交通</b> ······	<b>154</b>
(1) 人の移動 ······	154
(2) 物の運搬 ······	154

<b>第4章 棚田の石垣</b>	<b>155</b>
はじめに	157
<b>1 大井谷地区の石垣</b>	<b>160</b>
(1) 地形と地質	160
(2) 石垣の工法	161
(3) 石垣の編年	166
(4) 石工の技術	170
<b>2 大井谷地区の棚田</b>	<b>175</b>
(1) 棚田石垣の変遷	175
(2) 石見西部の棚田	178
おわりに～棚田の保全に向けて～	186

**緒 言**  
**研究の視座**



## はじめに

鳥取県鹿足郡柿木村に石垣で築いた棚田があると初めて知ったのは、全国の棚田保有の自治体が今後の保全活動について、行政の壁を無くし等しく論議を開始し始めた平成6年（1994）の秋だった。東京の虎ノ門会館で開催された、「全国棚田（千枚田）連絡協議会」の準備委員会で、戦後の農地確保のための構造改善事業に伴う土地整備により、ほとんどの棚田は消滅あるいは改築され、最終的に行政措置の及ばない地域が残存し、その存続を目的に環境保全と有効活用について論議が行われた。

平成5年（1993）2月に広島県佐伯郡湯来町にて、太田川の支流の水内川下流で河川改修の事業が計画された。地元の石工職人たちがこの事業に対し、当時建設省の提示するいわゆるコンクリート三面張りの工法を受け入れず、自ら旧来の石組みを施した護岸及び河床工事を提唱し、平成の石垣普請に乗り出した。更に今後の地域づくりを目指し、「中国・地域づくりフォーラム」の関連事業として、中国・地域づくり交流会を中心に建設省の後援で湯来町にて「石垣を讀める会」が誕生した。報告者はその後、当会の代表世話人として、石垣文化の伝導活動を終生のライフワークとしていった。

中国地方は石垣文化の生きた博物館である、と地域調査の中で実感することが多く、城郭や社寺や護岸等の構造物よりも、中国山地に至る中山間地域や瀬戸内海沿岸の島嶼地域の、水田や畑地の法面を彩る石垣が大半を占める。特に棚田の石垣としては、山口県佐波郡恵地町三谷地区・岡山県赤磐郡佐伯町田土地区を始めとして、広島県山県郡高賀村井仁地区・同郡加計町空谷地区・同郡豊平町鶴木地区等で、また段畑としては、山口県祝島・広島県鹿島及び大崎下島等で実地調査を開始した。

報告者の石垣の研究も、広島県山県郡加計町に建設された温井ダムの環境影響調査で、かつての温井集落の在りし姿を見るにつけ、石垣の法面にて擁護された棚田の一枚一枚の重要性を発見した。広島県の産んだ民俗学者田淵実夫氏の著作『石垣』に導かれ、地元の石工河野静吉氏の作業現場に赴き研鑽を積んだ。石工仕事は参考書では到底理解できず、とにかく先人の築いた石垣を多数見学する以外に方法はなく、現在に至るまで約四半世紀の年月が徒に流れ漸く石垣の本質が見えて来た。それが棚田の石垣への無上の研究心に発展し、平成7年（1995）に「全国棚田（千枚田）連絡協議会」の個人会員となり、高知県梼原町での「第1回全国棚田サミット」に参加し全国の参加者と語り合った。

平成11年（1999）8月に農林水産省から「日本の棚田百選」が選定され、中国地方では合計15地区が晴れて全国の注目を浴びることとなり、本格的に環境保全と有効活用の論議が交わされていった。

### <中国地方の棚田百選選定地区：15地区>

鳥取県：岩美町横尾地区・若桜町春米地区

島根県：大東町山王寺地区・横田町大原新田地区・羽須美村神谷地区・旭町都川地区

三隅町室谷地区・益出市中垣内地区・柿木村大井谷地区

岡山県：久米南町北庄地区・同町上初地区・旭町小山地区・中央町大堺和地区

広島県：筒賀村井仁地区

山口県：油谷町東後畠地区

## 1 棚田の保全への動き

全国棚田（千枚田）連絡協議会では現在に至るまで、担当地域で棚田サミットを開催し続けている。その中で報告者は棚田石垣の存在価値を再評価し、法面構造を調査検証し、補修方法を提唱している。

### ＜全国棚田サミット開催地＞

第1回（1995）：高知県椿原町

第2回（1996）：佐賀県西有田町

第3回（1997）：長野県更埴市

第4回（1998）：新潟県安塚町

第5回（1999）：三重県紀和町＝日本の棚田百選選定・棚田学会設立

第6回（2000）：福岡県浮羽町・星野村＝中山間地域等直接支払制度導入

第7回（2001）：石川県輪島市

第8回（2002）：千葉県鴨川市 第9回以降未定

柿木村は全国棚田（千枚田）連絡協議会の自治体正会員として、平成8年（1996）の第2回サミット以来登録されたが、第1回以降必ずサミットに代表者を派遣し、全国の各会員との交流に勤しんでいる。大井谷地区と報告者の交流は、島根県農林水産部から全国棚田（千枚田）連絡協議会（以降協議会）へ、棚田保全への具体的方策を検討して欲しい、と平成9年（1997）に連絡が入ったことによる。協議会では早速中国地方の個人会員の中から報告者を選出し、島根県の担当者と保全への協議を開始した。

翌年（1998）の2月に大井谷地区にて、棚田地域振興座談会として「棚田を考える会」を開催し、現地にて石垣法面の実地調査を展開し、地区集会所にて山口大学文学部教授（現九州大学大学院教授）の小川全夫氏と共に論議した。調査の所見では石垣には顕著な傷害は認められず、現状の保全を求める地区内の営農活動を奨励した。地区会長の三浦輝夫氏を始め、地区の人たちの眼の輝きが心に残った。

大井谷地区の反応は速やかで、4月には「助はんどうの会」が発足し、棚田保全の道はこうして聞かれた。平成10年（1998）に大井谷地区地域振興のための組織が結成され、「柿木村棚田地域振興計画策定委員会」が誕生し、地元と村長及び県関係機関長とアドバイザーで構成されている。また「大井谷棚田地域振興検討会」が役場産業課に置かれ、事務局機能を担当し県庁関係部局と助はんどうの会が連携して設立された。検討会の下には分科会として、「棚田歴史研究部会」・「都市交流部会」・「整備検討部会」・「農地保全部会」が置かれ、各自活動を展開している。棚田研究部会は大井谷の歴史と石垣の研究を目的に教育委員会が、都市交流部会は都市交流・情報発信を目的に企画調整課が、整備検討部会は地域整備計画を目的に建設課が、農地保全部会は農地利用営農

計画を目的に産業課が各々担当している。各部会は数回の部会を開催し、検討会において振興計画書を作成した。今回の報告書は棚田歴史研究部会の企画編集により作成された。

平成11年（1999）に協議会に所属する個人正会員を中心、「棚田ネットワーク中国」が結成された。結成時より柿木村からも会員が参加し、同13年度（2001）総会は柿木村にて開催され、大井谷地区の取り組みが報告された。また、同11年には全国の棚田研究者及び棚田爱好者等が集い、「棚田学会」が結成され柿木村からも会員が参加している。同11年6月に「棚田地域を考えるフォーラム」が開催され、早稲田大学教育学部教授の中島峰広氏を招聘し、講演会とパネルディスカッションが行われ、棚田爱好者を初め県内外から多数の参加者が集った。同10年（1998）より始まった恒例の「大井谷棚田まつり」では、同11年からの「棚田オーナー制度」による都市住民との交流も加わり、毎年益々盛んとなりつつある。新聞各紙や報道機関の取材により紹介され、それにより大井谷はブランド化して行った。

## 2 棚田の研究への動き

平成10年（1998）8月に柿木村教育委員会にて、「棚田歴史研究部会」の主催する意見交換会が開催され、報告者は大井谷地区の総合調査について提案した。11月には教育委員会にて「棚田構造調査研修」が開催され、柿木村文化財審議委員会会長の三浦一美氏を交え、報告者は石垣棚田に関する基本知識と調査方法について報告した。その際に同年2月の棚田を考える会で、調査依頼された文書調査の実施について広島大学文学部国史研究室への調査依頼が具体化した。翌年2月には広島大学文学部助教授の勝部眞人氏と大学院生を招聘し、旧役場の所蔵文書の内で大井谷地区に関わるものについて指導を受け、最終的に関係文書の調査研究を要請した。こうして総合調査の基本体制は整備された。

平成12年（2000）3月に教育委員会を会場に、全委員にて「大井谷棚田歴史研究部会」が開催された。前年度半ばに基本調査が開始されたため、調査成果報告を主体に平成12年度の調査計画案が検討され、今後の方向性が調査委員によりまとめられた。同年5月には大井谷地区で棚田歴史研究部会の現地活動報告会が開催され、併せて助はんどうの会へ現地調査の協力を要請した。実地調査の充実と執筆内容の検討の結果、同13年（2001）4月に教育委員会で、「大井谷棚田調査報告書執筆者会議」が開催され、調査報告書の内容検討と作成日程が検討された。同年9月に教育委員会にて調整会議を行い、同年12月に最終的に教育委員会にて執筆者会議が開催され、調査報告書の全容が論議され編集出版への方向性が提示された。こうして大井谷地区の棚田研究は大いなる成果を残すに至った。

緒 言 研究の視察 佐々木卓也（興工業高等専門学校・一般科講師／棚田学会・理事／棚田ネットワーク中国・副代表／石垣を讀える会・代表世説人）

第1章 棚田の現況 三浦 一美（柿木村文化財審議会会長）

第2章 棚田の歴史 勝部 真人（広島大学大学院文学研究科助教授）

第3章 棚田の民俗 永安 恵治（六日市町立六日市中学校校長／柿木村文化財審議会委員）

第4章 棚田の石垣 佐々木卓也（上記）

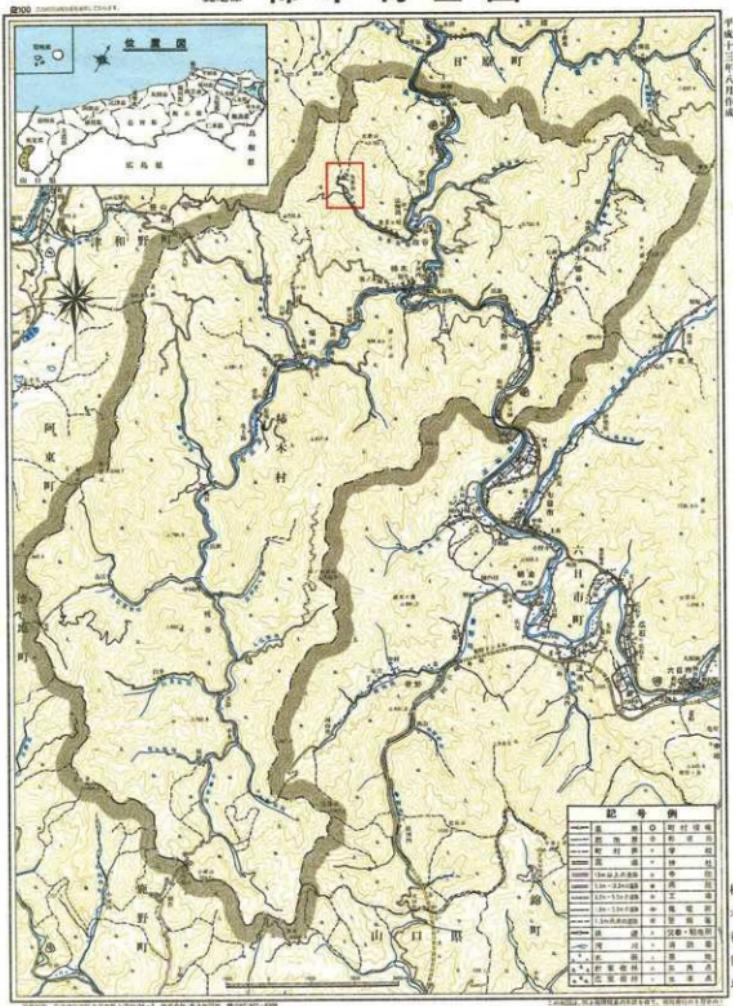
## おわりに

本報告書の全般にわたる記載内容は、歴史的史実に立脚させたものである。件名・地名・人名等の表現方法については、決して人間の基本的尊厳を犯すものではない。来るべき将来への歴史的教訓として、郷土の発展と住民の福祉に資するべく、ここに事実を正確にとらえ平等・平和の精神を未永く伝え続けたい。更に棚田の持つ文化遺産を保全し、有効活用の道を模索することにつれ、日本人の民族的精神が發揮されよう。そして先祖からの我々へのメッセージを、これからも大切に子孫たちに継承させる使命を感じ、地の愛情と農の哲学とを学び、平素の生活の一助にしてみたい。

今回の調査研究に終始協力して下さった、人井谷地区の助はんどうの会には衷心より感謝の誠を奉げ、皆様の益々のご発展を祈念申し上げたい。また、柿木村の村民の方々や周辺市町村の関係者を初め、調査研究に協力して頂いた方々には、改めて御礼の言葉を送りたい。執筆者一同及び柿木村教育委員会あげて、ここに研究報告書を上程致し、郷土の森羅万象と三界萬靈に報告させて頂きたい。

佐々木 卓也

# 柿木村全図





# 第1章 棚田の現況



## 1 はじめに

### (1) 目的

農村の原風景を残すものとして、近年急に注目され始めた棚田をもつ柿木村においても、大井谷地区の棚田保全については地元のグループ“助はんどう”を中心に推進、努力をかさね、行政も産業課をとおして援助している。

この棚田保全の一環として、村の文化財審議委員会に棚田歴史研究部会の発足を指導され、文化財審議会委員で分担し調査に当たることになった。

この第1章では、大井谷棚田の客観的な性質及び構造について調査し、現状を記録しておくこととした。(調査域の概要図として付図1参照)

### (2) 方法

調査の方法を決めるに当たっては、先発の岐阜県恵那市の報告書をはじめ、OMソーラ協会のSOLAR・CATや“石垣を讀える会”的佐々木卓也氏の助言をもとに、以下の方法をとることにした。

- ① ハードカルテをつくり、田ごとに調査する(図1-2)
- ② ①の結果をデータベース化する。
- ③ 地域的バランスを図り、石積みの実測図を探る。
- ④ 保全工事にかかる部分の、田の断面の調査をし図面化する。
- ⑤ 利水畜道の調査をして、系統図を作る。

### (3) 実施

#### 調査の実施期間の概要報告(調査の実施期間)

- |             |                  |      |
|-------------|------------------|------|
| ① カルテでの現地調査 | 平成10年11月～平成11年2月 | (2名) |
| ② データ入力     | 平成13年5月～平成13年6月  | (1名) |
| ③ 石積みの実測図   | 平成11年2月          | (2名) |
| ④ 断面調査      | 平成12年4月          | (2名) |
| ⑤ 利水畜道調査    | 平成13年2月          | (1名) |

ただし、①の調査期間のなかには、現地調査のほかに保存カルテへの転記やデータの計算等を含んだ期間としている。

また、カルテ中で築造年次については平成13年4月に佐々木卓也氏とともに3日間で調査した。

整理N.O.	522	調査年月日		調査員	
地番		地目		小字名	
所有者歴	①	②	③		
登記面積		標高(m)	389.2		

1・作付耕作状況調査(目視および聞き取り)					
(1) 作付け (表)	水稲	花・青	野菜	穀類	
	花卉		果樹	放置	年頃より
	他種	茶・煙草・麻芋・楮・桑・( )			
(裏)	作付け	有り( )	無し		
(2) 耕作の方法	人力	年頃まで	家畜( )	頃まで	機械 <sup>543</sup> 年頃より

2・床土状況調査					
(1) 耕土の厚さ	左端	17 cm	中央	19 cm	右端 24 cm
(2) 耕土の土質	左端	堅・ <del>砂</del> ・ <del>砾</del>	中央	堅・ <del>砂</del> ・ <del>砾</del>	右端 坚・ <del>砂</del> ・ <del>砾</del>
(3) 園場の版築	左端	堅・ <del>砂</del> ・ <del>砾</del>	中央	堅・ <del>砂</del> ・ <del>砾</del>	右端 坚・ <del>砂</del> ・ <del>砾</del>
(4) 園場の保水性	左端	良い・悪い	中央	良い・悪い	右端 良い・悪い
(5) 園場内障害物	有り	岩礁(ヶ)	無し		

3・石垣状況構造調査					
(1) 保存状態	石組	堅固・劣化・崩壊(- <del>砂</del> ・ <del>鉄</del> )	-改修(④・鉄)	-放置	
	a 天場	堅・ <del>砂</del> ・ <del>砾</del> ・ <del>鐵</del>	b 中積	堅・ <del>砂</del> ・ <del>砾</del> ・ <del>鐵</del>	
	c 根石	堅・ <del>砂</del> ・ <del>砾</del> ・ <del>鐵</del>	d 隅石	堅・ <del>砂</del> ・ <del>砾</del> ・ <del>鐵</del>	
	目地	植栽・漏水・ <del>土化</del> ・封鎖			
	鞋畔	堅固・劣化・漏水・植栽			
	変位	出張	15 cm.	(19.5%)	
(2) 築造年次	江戸以前		時代頃		
	江戸	初期・中期	未期	明治	初期・中期・末期
	大正	初期・末期		昭和	戦前・戦後
(3) 築造石材	火成岩・堆積岩・変成岩	⇒	地山石・川原石・搬入石		
(4) 築造方法	成型	野石積・割石積・乱層積		版築	造石
	石組	布積・谷積・混積・目地			中込
	相場	野面積・打込接・切込接			目地
	法面	天場・中積・根石・隅石			砂利

図1-1 柳田石垣の構造調査(柿木村大井谷地区)

(5) 水平構造	間口	短冊型・尾根型・谷波型 合成型 前面長A 56.57m, 後面長B 55.01 m, 平均長C 55.79 m.
	奥行	均等型・中央型・中継型 合成 左端長D 1.50 m, 中央長E 4.00 m, 右端長F 1.60 m, 平均長G 2.78 m, 面積C G = $\times$ = 174.70 m <sup>2</sup>
	比率	$G/C = 2.78 / 55.79 = 1/20.07$
	(6) 垂直構造	平坦型・船底型・馬背型 多段型 左端高H 0 m, 中央高J 0.90 m, 右端高K 1.20 m, 平均高L 0.75 m.
(6) 垂直構造	奥行	左端行M 0 m, 中央行N 0.25 m, 右端行P 0.40 m, 平均行Q 0.23 m.
	法長	左端長R 0 m, 中央長S 0.91 m, 右端長T 1.27 m, 平均法長U 0.77 m.
	比率	$Q/L = 0.23 / 0.75 = 1/3.3$
	仰角	$\theta = 17^\circ$ ( $\tan^{-1} \theta = Q/L$ )
	(7) 標高勾配	勾配 $L/G + Q = 0.75 / 2.78 + 0.23 = 1/4.01$
	(8) 略図	( $\theta = 1/4.72$ )
(5) 水平構造		(6) 垂直構造
<ul style="list-style-type: none"> <li>○左側は河川改修による改修</li> <li>○左端に渓水溝10m</li> <li>○中央に進入路(523)に異存。</li> </ul>		
4・発掘実測調査		
(1) トレンチ調査	要・不要	別添
(2) 壁面の実測	要・不要	別添

## 2 調査報告

### (1) カルテからの集計結果

#### ① 字名と地番

字名と地番と田の枚数を関連付けると以下の表のようになる、また併せて特徴も一覧できるようした。

表中 区画：整理の都合上につけたもの

岩 壁：耕土表面に障害物として突出している岩壁で目に見えるものだけ

足場石：石垣の表面に足場となる石を組み込んだものの数とその法長

法 面：石積み壁を0で、土坡を1として表す

未調査：荒れ地や、現在道路用地になっているため調査できなかったもの

図1-2 大井谷地区の畠田分布状況

区画	字名	地番	田の枚数		特徴 (IIIの枚数で表す)					特記
			田数	合計	岩壁	自然石	足場石と法長	法面	未調査	
1	猿ヶ谷	676	3	3	2	0	0	0	0	
	猿ヶ谷尻	678	1	5	0	0	0	1	0	ドハは残土埋立
		681		4	1	1	2 max2.89	0	0	
	河原	684	2	3	0	1	0	0	0	
		684-統1	1		0	1	1 max1.90	0	0	
2	アシ谷	1594-2	1	1	0	0	1 max2.57	0	0	
	河原田	679	1	5	0	0	0	0	0	荒れ地で計不1
		685	4		3	4	0	0	0	
	タチメ花木	730	3	3	1	2	0	0	0	
	門田(1)	738	4		2	2	0	0	0	
3		739	3	10	2	3	0	0	0	
		740	2		2	2	0	0	0	
		1861	1		0	0	0	0	0	
	堂ノ元	860	1		0	0	0	0	0	
		861	1	5	0	0	0	0	0	
4	861-1	3			0	1	0	0	0	
	内匠屋敷家廻	862	1	1	0	0	0	0	0	
	助石衝門田	704-統3	2	5	0	0	0	0	0	
		705-1	3		0	0	0	0	2	道路で計不2
	高	699	3	3	-	-	-	-	3	タ 3
	向芝	700-1	3	3	-	-	-	-	3	タ 3
	橋ノ詰	690	2		0	1	0	0	0	
		690-統1	1	4	1	1	0	0	0	
		690-統3	1		0	0	0	0	0	
	鍛冶屋敷	752	5		2	2	0	0	0	
		753	5		3	5	0	0	0	
		753-統1	1		0	0	0	0	0	
		753-1	1		0	0	0	0	0	

## 第1章 横田の現況

区画	字名	地番	田数	合計	岩礁	自然石	足場石と法長	法面	未調査	特記
4	鍛冶屋敷	753-2	1	29	0	0	0	0	0	
		758	2		1	1	0	0	0	
		759-1	8		1	5	0	0	0	
		759-2	5		2	1	0	0	0	
		759-3	1		1	1	0	0	0	
	桜ヶ藪	858-2	1	1	0	0	0	0	0	
5	中ノ切	1087-1	6		3	4	0	0	0	
		1088-1	4		3	1	0	0	0	
		1089-1	4	17	2	2	0	0	0	
		1091	2		0	0	0	0	1	小段を2つ持つ
		1091-1	1		1	0	0	0	0	
	八十田	856-1	1		1	1	0	0	0	
		867-1	3		-	-	-	-	3	道路構造物用地
		867-2	2	17	0	0	0	0	0	
		870	6		1	3	0	0	0	
		870-統1	5		2	1	0	1	0	
	畔ノ前	853	2	4	0	0	1 max2.50	0	1	道路構造物用地
		855	2		0	0	0	0	0	
6	谷尻	872-1	3	6	0	0	0	1	0	
		873-2	3		0	0	0	0	0	
	杉ヶ谷家廻り	776-4	2	2	0	0	0	0	0	
		769	3	6	0	0	0	0	0	暗渠持つもの1
		770	3		0	2	1 max2.35	0	0	足場石20以上
		777-1	1		-	-	-	--	1	荒地で未調査1
		778	3		1	0	0	0	1	タ 1
		779	4		0	1	0	0	1	タ 1
		780	6		0	1	0	2	0	
		781	12	59	1	1	0	8	1	タ 1
7	向田(1)	782	7		0	2	0	0	0	
		783	5		0	0	0	1	4	町割し5⇒1に
		784	2		-	-	-	-	2	荒地で未調査
		786	14		-	-	-	11	14	タ
		787	5		-	-	-	-	5	タ
		1072-1	2		0	0	0	0	0	
		1079-1	3		0	0	0	0	0	
		1080-1	8		0	0	3 max2.35	1	2	暗渠持つもの1
		1081-1	4		0	0	0	0	0	
		1082-1	3		3	2	0	0	0	
		1083	4		1	0	0	0	0	
		1084	4	69	0	2	0	0	0	
		1085	2		1	0	0	0	0	
		1086-1	17		2	4	1 max2.45	1	0	昇降石段付き1
		1093-1	2		0	0	0	0	0	
		1094-1	1		0	0	0	0	0	

区画	字名	地番	田数	合計	岩礁	自然石	足場石と法長	法面	未調査	特記
7	向田(1)	1095	2		0	1	0	0	0	
		1096	5		0	1	0	0	0	H10年獻穀H1
		1097	12		0	0	0	0	0	
7	門田(2)	977-1	8	11	0	0	0	2	7	町倒しで1枚に
		979-1	3		0	0	1 max2.17	0	0	タ
8	見上ヶ	1101	3		0	0	1 max1.80	0	0	
		1102	2		0	0	0	0	0	
		1103	3		0	2	1 max1.90	0	0	
		1105	4	23	0	2	0	0	0	
		1106	2		0	2	0	0	0	
		1107	7		0	1	0	0	0	
		1118	1		0	0	0	0	0	
		1965	1		—	—	—	—	1	荒地で未調査
8	向峠	1078-1	1	1	0	0	0	0	0	
	高久保	1098-1	1	2	0	0	0	0	0	
		1099-2	1		0	0	0	0	0	
9	原ノ田	843	2		0	1	0	0	0	
		877-1	4		0	0	0	0	1	道路用地1
		878	5		0	0	0	0	0	
		879	6		1	2	0	0	0	
		880	7		0	4	0	0	0	
		882	2		0	0	0	0	0	
		882-1	1	53	0	0	0	0	0	
		883	7		2	2	0	0	0	
		884	7		0	0	0	0	0	
		886	4		0	0	0	0	0	
		886-統1	2		0	0	0	0	0	
		889	3		1	2	1 max1.95	0	0	巨岩(8.0m×4.8m)
		890	3		0	1	0	0	1	
9	湯垣道ノ下	893-2	1	1	—	—	—	—	1	道路用地
		897	2	2	0	0	0	0	1	うち1枚は倉庫
		897	2	2	0	0	0	0	1	
10	抗ヶ坪	839-1	3	3	0	1	0	0	0	
		847	9	11	0	0	0	0	8	
		876-1	2		0	0	0	0	1	
		845	7	12	—	—	—	—	7	荒地で立入不可
		846	5		—	—	—	—	5	タ
		811-1	3		—	—	—	—	3	タ
		812-1	3	11	—	—	—	—	3	タ
		813	3		—	—	—	—	3	タ
		819	2		0	0	0	2	0	
		844	5	5	0	1	0	0	0	
10	與五郎田	840-1	2		0	0	0	1	0	
		841	3	9	0	2	0	0	0	
		842	4		0	0	0	0	0	

## 第1章 棚田の現況

区画	字名	地番	田数	合計	岩礁	自然石	足場石と法長	法面	木調査	特記
10	七十田	820	10	10	0	0	0	3	2	うち2枚は倉庫
11	寺田	822	1		0	0	0	1	0	
		824-1	3	10	0	2	0	0	0	
		824-2	6		0	2	0	0	2	暗渠持つ1
	寺ノ上	825-2	7		0	0	0	1	0	
		826	6	19	0	1	0	0	0	
		827	6		3	0	1 max2.40	0	0	
12	大迫嶺	1035	4	7	0	1	0	0	0	
		1036	3		0	0	1 max2.80	0	0	足場石20以上
	大迫	1037	2	8	—	—	—	—	2	
		1038	6		0	0	0	0	0	荒地で立入不可
	大迫下	1040	3		0	0	1 max2.50	0	0	
		1050	2	7	0	0	0	0	0	
		1051	2		0	0	0	0	0	
	向田(2)	1056	1		0	0	0	0	0	
		1062	5		0	0	0	0	0	
		1064	1	14	0	0	0	0	0	
		1066	3		1	2	1 max1.73	0	0	
		1067-1	3		0	0	0	0	0	
		1067-2	1		0	0	0	0	0	
13	大谷	980-1	6		2	1	1 max2.53	0	0	980-2, 980-3含む
		981-1	5	12	2	0	0	0	0	
		1057	1		0	0	0	0	0	
	岡ノ田	969	7		0	0	0	1	6	町倒して6枚を吸収
		970-2	2		1	0	0	0	0	
		971	5	21	1	2	0	0	0	
		972	6		1	1	0	0	0	
		972-1	1		0	0	0	0	0	
	久保尾敷	983	6		1	3	0	0	0	
		984-1	8		0	1	1 max2.50	0	0	
		984-2	2	18	0	0	0	0	0	
		986	1		0	0	0	0	0	
		1916	1		0	1	0	0	0	
14	門田(3)	985-1	1		0	0	0	0	0	
		985-4	1	3	0	1	0	0	0	
		988	1		0	0	0	0	0	
	久保	955	6		3	2	0	0	0	
		956	5	11	0	0	0	0	0	
15	口屋敷	959	1		0	0	0	0	0	
		968	1	2	—	—	—	0	1	
	屋敷田	1914	1		0	0	1 max3.45	0	0	
		991	1	1	0	1	0	0	0	村道開設で造り改め
	岡ノ上家廻	999-1	1		0	0	0	0	0	

区画	字名	地番	田数	合計	岩礁	自然石	足場石と法長	法面	木調査	特記
15	岡ノ上家廻	947	3		2	0	0	0	0	
		947-1	1	12	0	0	0	0	0	
		948	1		0	1	0	0	0	
		949	5		0	0	0	0	0	
		950	1		0	1	0	0	0	
	岡ノ上	941-1	1		0	0	0	0	0	
		941-2	1	3	0	0	0	0	0	
		942-3	1		0	1	0	0	0	
	門田(4)	900	1		0	0	0	0	0	
		900-1	2	5	0	1	0	0	0	
		900-2	2		0	2	0	0	0	
16	垣添	907	8	12	6	6	0	0	0	
	垣添	908	4		2	2	0	0	0	巨岩(6.0m×7.0m)
	本田	909-1	2		0	0	0	0	0	
		909-2	3		1	3	0	0	0	
		910	3		0	1	0	0	0	
		913	2		0	1	0	0	0	
		914	7		1	3	0	0	0	
		915	4	43	1	1	1 max1.60	0	0	
		916	4		2	2	0	0	0	
		918	4		0	2	1 max2.65	0	0	
		919	7		3	2	0	1	0	
		920	4		1	2	1 max2.60	0	0	
	大碌	921-1	2		0	2	1 max2.32	0	0	
	大碌	922	3	3	0	1	0	0	0	



写真1-1 向田(2)



写真1-2 門田(1)



写真1-3 門田(2)

以上を集計してみると

- 字名は57あり、同名の門田は4ヵ所で点在しました向田は2ヵ所あるが村道開設時に分断されたものであろう。(図1-4)
- 地番は185筆で地権者は22名、田の数は627枚ありうち1筆の最高は17枚である。
- 障害物（岩礁）のある田の数は84枚を数える。(写真1-1)
- 石積みに自然石を組み込んだものは142枚で最高のものは $6\text{m} \times 7\text{m}$ の表面積を持つ。(写真1-2)
- 石積みの表面に、突出した足場石を配したもののは25でその法長のmaxは3.45mまたminで1.60mであった。(写真1-3)
- ドハで造られたのものは39枚が確認された、そのほとんどが後に工事残土で町倒しされたもので、杉ヶ谷の10枚くらいが元よりドハで造られたものであろう。
- 未調査の99枚は、荒れ地で計測できなかったものや道路用地になり田として実存しなかったものである。

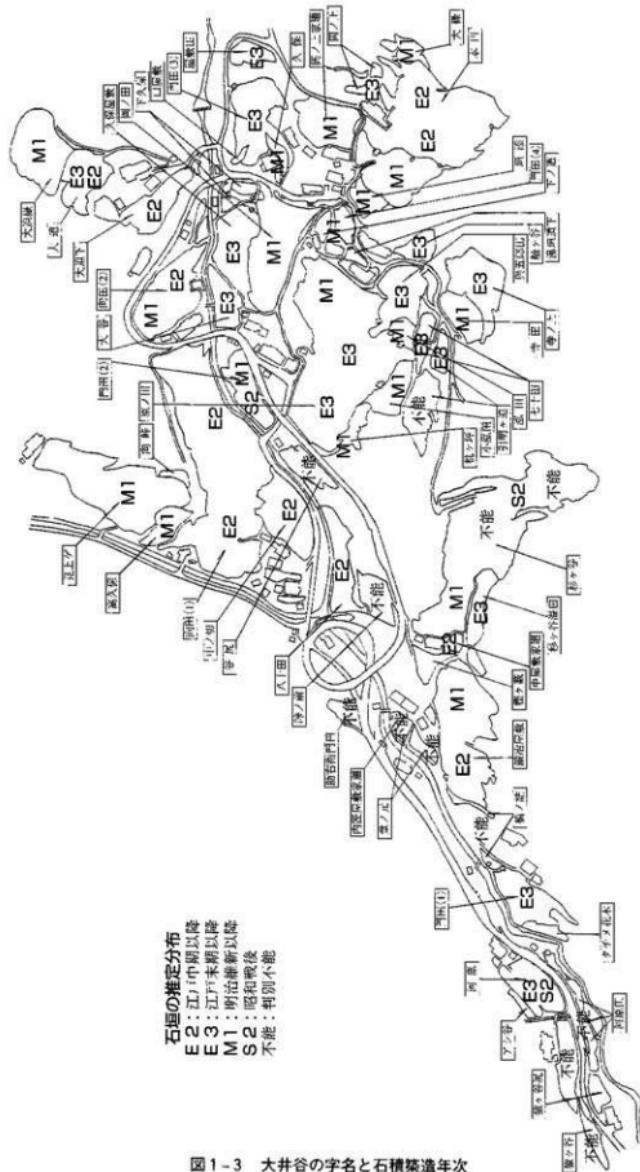
## ② 作付け状況（表1-3参照）

### （平成10年11月調査の結果）

作付けについては、水稻1、野菜2、穀類3、花卉4、果樹5、放置6に分類して調査に入ったが、現実は一部に2、3、4、5、を栽培し余地を放置した状態がかなりあり、6、全面放置及び6、と2、3、4、5、の組合せ型があり、調査カルテにも1サンプルで2、6、や2、5、6、と現況どおりの記録をしている、したがって後に

それぞれの割合を表現した図表を載せるが、割合の母数は実際の田の枚数より多くなる。

また、放置集計上不完全なデータがあり図表では不完全と表示した。



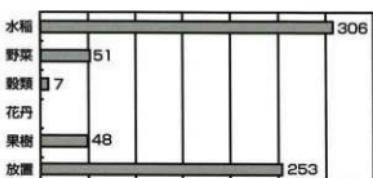


図1-4 作付けの割合

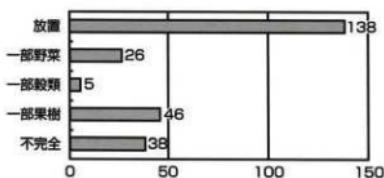


図1-5 放置の内訳

水稻 1. 田の306の46%相当で、そのうちほぼ半数がコシヒカリで、残り半数にチヨニシキ・キヌヒカリ・ハマノマイ・ヤマホウシ・ニホンパレ等の品種が作付けされ、ごくわずかにモチも栽培されている。

野菜 2. 田の51の8%相当で、大根・カブ・キャベツ・ねぎ・玉ねぎ・菜たね・いも類等いろいろな野菜が栽培されている。

穀類 3. 田の7の1%相当で、大豆・小豆等である。

花卉 4. 作付けなし。

果樹 5. 田の48の7%相当で、梅・柿・ゆず・栗等で、栗以外は出荷されない。

放置 6. 田の253の38%相当で、雑草の茂ったものや杉樹の立っているものや前述した複合のもの等で、図1-5で内訳を表した。

### ③ 床土状況

全体に特徴といえる結果は出なかつたが、土質は砂質土がほとんどでところどころに礫混土の耕土状況である。また、保水の状態はよくないのか全体にボリ製のアゼナミが敷設されている、反面漏水（写真1-4）も多く前面は漏水に背面は湧水に悩まされていてることは容易に想像できる。

耕土の厚さについては、左・中央・右の3ヵ所をピンボールを挿入し感触より測定したが、平均的に18



写真1-4 向田(1)

cm位であり半場に比べるとやや浅めと言えるだろう。

その中でも、植樹されている場所は特に薄く七十回にその特徴が見られる。

また、フケ田といえる顯著な場所はサンプル461の1カ所のみで字名にフケ田小フケ田とあっても、その傾向は出ていない。(表1-3の抜粋データベース)

#### ④ 石垣状況

- 保存状態は、全体的に劣化があり既に崩壊したものや改修されたものも少なくない。目地には種栽や土化がほとんどで劣化の要因を作っている、したがって畦畔は劣化が激しく漏水の原因となり更に劣化を促進している。  
また、石積みの法面をみると凹凸が顕著でその様相を出張り  $x$  cmとして測定した、その状態を  $x / S L$  比で計算すると 5 ~ 35% 位となる。
- 築造年次については、古く鎌倉時代くらいより順次開拓され改修も数度にわたりくり返されたと思うが、現在の様相になったのはだいたいに江戸時代の中期から幕末にかけてのもの及び明治維新ごろ以降のものがほぼ半々と推定される。

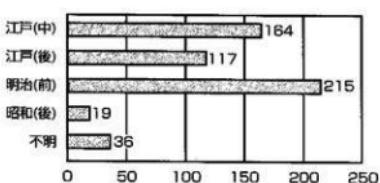


図1-6 石積築造期の割合

左図に、推定築造期の割合を表した。

それぞれの割合は

江戸中期	(E 2)	30%
江戸後期～幕末	(E 3)	21%
明治前期	(M 1)	39%
昭和戦後	(S 2)	3%
不明	(不)	7%

その分布概要は、字名図の中に上記の記号で表した。(図1-3)

#### ⑤ 築造石材と方法

石材 地山の石が使用され、そのほとんどが流紋岩である。

方法 野石積みが少し手を加えた割石を組み込んだ乱れ積みがほとんどで(落し込み積みもある)、その多くは天端を意識しないものであり、前述べたように動かし難い自然の岩礁や巨大な転石をそのまま組み込んでいる。また、その自然石に穴端を合わせたり自然石を境界や寄道に利用したものもある。

#### ⑥ 田の水平垂直構造

水平構造 間口（横幅）の前面背面の長さと奥行について調査し、その性質を以下に間口平均の長さと面積のmax-minのトップ5として表す（表1-1）、間口の長さと面積の関係を分散図表化（図1-7）してみる。

表1-1 田の水平構造

トップ5	間口 (m)		面積 (m <sup>2</sup> )	
	長い順	短い順	広い順	狭い順
1	◎117.36	3.65	◎761.83	5.72
2	101.81	5.00	727.66	△5.78
3	93.88	△5.45	※674.23	7.55
4	92.88	6.50	564.56	◇9.69
5	91.63	◇6.75	556.32	12.81

なお、上記の表中◎・△・◇印おのものは同一の田であり、※印は残土処理場として町倒しされたものである。

また、下記の間口平均長と面積の関係の分散図（図1-7）中、曲線  $y = x^2$  は正方形の例であり、したがって  $y = x^2$  曲線で左のエリアは奥行が深く右のエリアは間口が広いことになる。

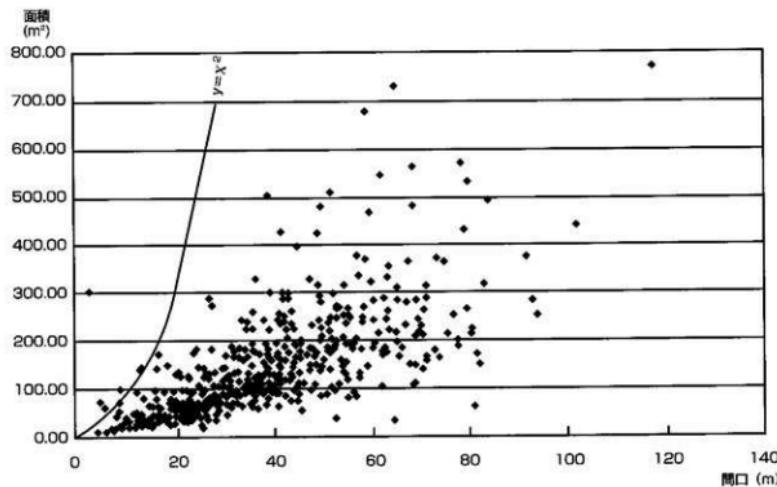


図1-7 間口平均長と面積の関係分散図

垂直構造 石垣の面（又は土坂面）の高さ（立上）と倒れ（奥行）と法長について調査した。立上げと奥行のそれぞれのmax-min順位を表す。

表1-2 田の垂直構造

	立ち上げ (m)		奥行 (m)	
	高い順	低い順	大きい順	小さい順
1	◇○4.25	※0.29	△○4.91	0
2	3.50	※0.30	◇○4.38	0
3	3.15	※0.31	2.54	0
4	△○2.88	0.31	2.48	0
5	2.73	※0.32	2.27	0

なお、上記の表中○印は上坡のものでまた△◇印は同一の田である、※印は字名“猿ヶ谷尻”である。

次に、水平構造で調べた田の奥行と垂直構造で調べた田の立上げから勾配（立上げ／奥行）を図表化してみる。（図1-8）

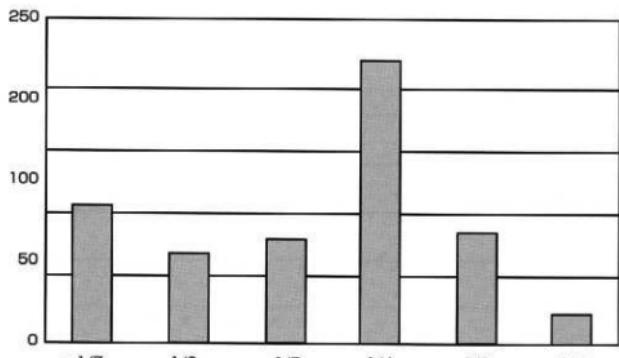


図1-8 棚田勾配図

上記の図表中、区分については1/7以上・1/7未満1/6以上・順次同様・1/2未満0までとしている。

図表から、勾配にして1/4以上1/5未満のものがほぼ半数になっていることが解る。

## (2) データベース化

カルテから、入力されたデータベース（全64項）の部分的抜粋を添付することにより、ここでは報告としたい、前項（1）で記述したもののほとんどが抽出された。（表1-3）

図1-9 棚田石垣の構造調査（柿木村大井谷地区）

整理NO.		調査年月日		調査員	
地番		地 月		小字名	
所有者層					
登記面積		標高(m)			
1. 作付耕作状況調査（目視及び聞き取り）					
(1) 作付	(表)	水稻 1 花卉 4 多種 7	野菜 2 果樹 5	穀類 3 放置 6 一年頃	
(2) 耕作の方法		作付け 機械	有り 年頃より	- 1 , - 無し 2	
2. 床土状況調査					
(1) 新土の厚さ		左端	中央	右端	
(2) 培土の土質		左端（砾混1・砂混2・粘質3）	中央	右端	
(3) 蔵場の版築		左端（堅固1・劣化2・崩壊3）	中央	右端	
(4) 蔵場の保水性		左端（良い1・悪い2）	中央	右端	
(5) 蔵場内障害物		有り1・無し2			
3. 石垣状況構造調査					
(1) 保存状態	石組	堅固・劣化・崩壊（一部・全体）・改修（一部・全体）・放置			
	1 2 3	① ② 4 - ① ② 5			
	目的	植栽・漏水・美化・封鎖			
	1 2 3 4				
	疊壁	堅固・劣化・漏水・植栽			
	1 2 3 4				
(2) 築造年次	変位	出張	cm		
(3) 築造石材	火成岩・堆積岩・変成岩→地山石・川原石・搬入石				
	1 2 3	1 2 3			
(4) 築造方法	成型 野石岩・削石積・乱層積		版築	疊石	
	1 2 3		1		
	石組 布積・谷積・乱積・口地			中込	
	1 2 3 4			2	
	相場 野面積・打込接・切込接			目地	
	1 2 3			3	
	法面 天場・中積・現石・隣石			砂利	
	1 2 3 4			4	
(5) 水平構造	間口	短冊型1	・ 尾根型2	・ 谷沢型3	
	前面長A	後面長B	平均長C	(m)	
	均等型1	・ 中大型2	・ 中細型3		
	左端長D	中央長E	右端長F	平均長G	面積C G (m²)
(6) 垂直構造	立上	平坦型1	・ 斜面型2	・ 馬背型3	
	左端高H	中央高I	右端高K	平均高L	(m)
	奥行M	中央行N	右端行P	平均行Q	(m)
	法長	左端長R	中央長S	右端長T	平均法長U (m)
	比率	Q/L =	/	= 1 /	
	仰角	=			
(7) 棚田勾配	勾配	L/G + Q -	/	- = 1 /	

表1-3 抜粋データベース（図1-9参照）

監測點 番号	地名	地番	施設 <sup>2</sup>	地盤	地目	小字名	監測網 番号	付番 (m)	斜面		斜面		高さ (m)	高さ 平均	高さ 平均U	高さ 平均O(m)	高さ 平均U 比率	O/L =		
									左傾	右傾	水平	石材	土質							
52	759	1	田 鹿池施設	1009	1	18	28	14	2	E2	1-1	1	3	4.8	2772.40	1.89	0.40	1.96	0.386+4/13.7	
53	759	1	田 鹿池施設	1009	1	20	17	15	2	E2	1-1	1	3	2.5	251.94	1.67	0.56	0.41	0.89+16/7	
54	759	1	田 鹿池施設	1009	1	20	18	15	2	E2	1-1	1	3	5.8	281.97	1.77	0.56	0.41	0.89+16/7	
55	759	1	田 鹿池施設	1009	1	14	25	23	2	M1	1-1	1	1.54	14.02	1.09	0.30	0.13	0.31/0.68/16/6		
56	759	1	田 鹿池施設	1009	1	12	22	30	2	M1	1-1	1	3	2.70	10.21	1.72	0.66	2.07	0.60/7.6/2/8	
57	759	1	田 鹿池施設	1009	1	12	21	18	2	M1	1-1	1	2	4.68	124.41	1.22	0.39	1.28	0.82/25/1/3	
58	759	3	田 鹿池施設	1009	1	21	18	15	2	M1	1-1	1	3	2.73	56.97	1.14	0.43	1.44	0.81/36/7/3	
59	759	2	田 鹿池施設	410	1	19	21	18	2	M1	1-1	1	3	6.69	104.16	1.36	0.28	0.96	0.26/85/7/9	
60	759	2	田 鹿池施設	410	1	15	12	9	2	M1	1-1	1	3	7.44	127.05	0.82	0.40	1.47	0.81/49/7/9	
61	753	2	田 鹿池施設	209	1	16	13	13	2	M1	1-1	1	3	3.35	40.64	1.37	0.41	1.92	0.87+14.6	
62	753	1	田 鹿池施設	103	1	15	17	13	2	M1	1-1	1	3	3.15	58.59	1.22	1.24	0.31/22/19.4	1.00/0	
63	753	1	田 鹿池施設	2	1	12	14	12	2	M1	1-1	1	3	3.15	58.59	1.22	1.24	0.31/22/19.4	1.00/0	
64	860	1	田 墓ノ元	22	1	15	16	18	2	不	1-1	1	3	3.35	63.14	1.61	0.37	1.67	0.37/1.51/14.4	
65	861	1	田 墓ノ元	120	5.6	12	21	20	2	不	1-1	1	3	3.35	61.60	1.65	0.20	0.88	0.95/174.7	
66	861	1	田 墓ノ元	120	5.6	19	22	19	3	不	1-1	1	3	3.26	179.15	2.02	0.45	2.10	0.32/86/74.7	
67	861	1	田 墓ノ元	120	5.6	12	14	21	2	不	1-1	1	3	4.18	76.78	1.05	0.10	0.10	0.01/06/10/5/0.09/5	
68	861	1	田 墓ノ元	120	5.6	20	22	21	2	不	1-1	1	3	4.08	92.32	0.78	0.16	0.79	0.80/78/14.9	
69	862	3	標 内河高瀬	116	1	15	15	18	1	不	1-1.2	3	2	7.00	138.23	1.21	0.17	1.24	0.37/77.21/17.12/14.0	
70	899	200	3																	
71	899	200	3																	
72	899	200	3																	
73	899	200	3																	
74	899	200	3																	
75	899	200	3																	
76	704	3	田 鹿池施設	600	6	10	16	16	1	不	1-1	1	1	4.80	266.76	0.57	0.50	1.21	0.50/37/11.1	
77	705	1	田 鹿池施設	500	1	15	16	15	1	不	1-1	1	2	7.20	261.45	1.54	0.34	1.94	0.37/1.75/12.9	
78	705	1	田 鹿池施設	420	6	15	15	15	1	不	1-1	1	1	5.58	58.90	0.50	0.39	1.63	0.31/1.63/15.2	
79	689	2	田 鹿池施設	216	24	1	15	14	17	2	不	1-1	1	1	9.83	126.19	1.62	0.31	1.63	0.31/1.63/15.2
80	689	2	田 鹿池施設	216	24	6	12	12	2	M1	1-1	1	1	4.80	266.76	1.54	0.34	1.94	0.37/1.75/12.9	
81	770	4	田 鹿池施設	705	1	15	14	13	2	M1	1-1	1	1	5.58	58.90	0.50	0.39	1.63	0.31/1.63/15.2	
82	770	4	田 鹿池施設	705	1	15	14	13	2	M1	1-1	1	1	5.58	58.90	0.50	0.39	1.63	0.31/1.63/15.2	
83	777	1	田 鹿池施設	424	5	12	15	13	2	M1	1-1	1	1	9.83	126.19	1.62	0.31	1.63	0.31/1.63/15.2	
84	778	1	田 鹿池施設	603	6	17	17	17	2	2.5	1-1	1	3	165.83	1.30	0.30	0.30	0.31/45/14.8		
85	778	1	田 鹿池施設	603	6	17	17	17	2	M1	1-1	1	3	5.03	107.30	1.51	0.41	1.55	0.41/50/21/13.7	
86	778	1	田 鹿池施設	705	6	15	15	15	2	M1	1-1	1	3	4.63	23.24	1.60	0.30	0.30	0.30/0.85/1.4	
87	778	1	田 鹿池施設	603	6	18	18	18	2	M1	1-1	1	3	7.36	152.05	1.53	1.74	1.74	1.00/1.69/12.4	
88	779	...		705	6	15	16	16	2	M1	1-1	1	2	4.80	237.90	1.26	1.94	1.94	0.41/89/14.5	
89	779	...		705	6	17	17	17	2	M1	1-1	1	2	4.31	96.73	2.19	2.27	2.27	0.51/92/18/3	
90	779	...		705	6	17	17	17	2	M1	1-1	1	3	3.55	27.75	1.63	1.69	1.69	0.31/1.63/15.2	
91	780	1	田 鹿池施設	527	5	15	18	23	2	2.5	1-1	1	3	2.09	27.75	1.48	1.51	1.51	0.41/41.8/3.7	
92	780	1	田 鹿池施設	527	5	15	16	16	2	M1	1-1	1	3	4.68	194.37	2.01	2.07	2.07	0.52/21/0/3	
93	780	1	田 鹿池施設	415	5.2	15	15	15	2	M1	1-1	1	3	7.36	152.05	1.53	1.74	1.74	1.00/1.69/12.4	
94	780	1	田 鹿池施設	415	5.2	15	15	15	2	M1	1-1	1	3	7.36	152.05	1.53	1.74	1.74	1.00/1.69/12.4	
95	780	1	田 鹿池施設	329	2.6	15	15	15	2	M1	1-1	1	2	4.80	152.75	1.26	2.45	2.45	0.52/35/12.3	
96	780	1	田 鹿池施設	329	2.6	15	15	15	2	M1	1-1	1	2	4.80	152.75	1.26	2.45	2.45	0.52/35/12.3	
97	780	1	田 鹿池施設	329	2.6	15	15	15	2	M1	1-1	1	2	4.80	152.75	1.26	2.45	2.45	0.52/35/12.3	
98	780	1	田 鹿池施設	521	5.6	15	16	16	2	M1	1-1	1	3	3.62	94.76	2.13	2.13	2.13	1.00/1.69/10.8	
99	780	1	田 鹿池施設	521	5.6	15	16	16	2	M1	1-1	1	3	3.14	99.9	2.07	2.07	2.07	1.00/1.69/10.8	
100	780	1	田 鹿池施設	521	5.6	15	16	16	2	M1	1-1	1	2	3.63	85.70	1.36	0.73	0.73	0.31/89/17.5	

實驗號	地點	標高	坡度(%)	樹齡	樹種	小年名	蓄積面積 (m <sup>2</sup> )	作付 (m)	耕土層 (m)	耕種 次數	石頭 石塊 (m <sup>3</sup> )	耕種 方法	水耕稻	旱稻	整地		施肥		播種					
															開口	闊面	開口	闊面	施肥量 (kg/ha)	播種量 (kg/ha)	播種量 (kg/ha)	播種量 (kg/ha)		
101	781	780	15	5	松	松子	512	5.6	19	20	23	212	5.6	19	20	20	22	3	3.23	199.91	67.72	0.96	1.16	
102	781	780	15	5	松	松子	512	5.6	19	20	23	212	5.6	19	20	20	22	3	3.18	198.26	66.02	0.91	1.11	
103	781	780	15	5	松	松子	512	5.6	19	20	23	212	5.6	19	20	20	22	3	3.23	199.91	67.72	0.96	1.16	
104	781	780	15	5	松	松子	512	5.6	17	18	20	212	5.6	17	18	20	22	2	2.15	146.51	51.10	0.97	1.07	
105	780	780	15	5	松	松子	501	6.7	17	17	15	212	5.6	17	17	15	20	2	4.53	61.60	68.64	0.25	0.86	
106	780	780	15	5	松	松子	501	5.6	15	15	15	212	5.6	15	15	15	15	2	4.56	76.10	129.06	0.29	1.32	
107	781	780	15	5	松	松子	512	5.6	18	18	20	212	5.6	18	18	20	22	1	3.58	129.96	1.36	0.43	1.41	
107.2	781	781	15	5	松	松子	512	5.6	17	10	15	212	5.6	17	10	15	15	2	0.55	0.55	0.55	0.00	0.00	
108	781	781	15	5	松	松子	512	5.6	16	15	15	212	5.6	16	15	15	15	1	4.15	109.25	0.87	0.22	0.91	
108.2	781	781	15	5	松	松子	512	6.7	5	14	10	212	5.6	16	5	14	10	1	0.61	0.61	0.61	0.00	0.00	
109	781	781	15	5	松	松子	512	5.6	19	19	20	212	5.6	19	19	20	22	1	2.3	371	141.98	1.40	0.85	1.65
110	780	780	15	5	松	松子	512	5.6	18	17	15	212	5.6	18	17	15	15	1	3	3.93	151.22	1.16	0.41	1.23
110.1	780	780	15	5	松	松子	501	6.7	15	17	17	212	5.6	15	17	17	15	1	3	2.71	47.11	12.79	0.54	0.54
110.2	780	780	15	5	松	松子	521	5.6	15	15	15	212	5.6	15	15	15	15	1	3	6.53	106.00	0.00	0.38	0.00
111	781	781	15	5	松	松子	512	6.7	19	20	20	212	5.6	19	20	20	22	1	3.50	85.30	0.84	1.05	1.34	
112	781	781	15	5	松	松子	512	5.6	10	18	19	212	5.6	10	18	19	19	1	2.3	2.85	150.63	1.30	0.39	1.39
113	781	781	15	5	松	松子	512	5.6	17	20	15	212	5.6	17	20	15	20	1	3	1.18	125.43	1.21	0.59	1.35
114	781	781	15	5	松	松子	512	6	13	15	15	212	5.6	13	15	15	15	1	2.3	1.48	101.09	0.93	0.39	1.01
115	782	782	15	5	松	松子	600	1	22	18	17	212	5.6	14	22	18	17	1	2.3	3.96	118.80	1.50	0.39	1.48
116	782	782	15	5	松	松子	600	1	20	17	19	212	5.6	14	20	17	19	1	2	4.90	129.22	1.11	0.30	1.30
117	782	782	15	5	松	松子	600	1	18	18	18	212	5.6	14	18	18	18	1	3	2.05	90.26	1.29	0.30	1.27
118	782	782	15	5	松	松子	600	1	18	20	20	212	5.6	14	18	20	20	1	3	5.87	217.74	1.54	0.48	1.60
119	782	782	15	5	松	松子	600	1	15	15	15	212	5.6	15	15	15	15	1	2.3	3.09	153.97	1.58	0.30	1.64
120	782	782	15	5	松	松子	600	1	20	25	20	212	5.6	15	20	25	20	1	2	4.57	97.02	2.13	1.17	2.43
121	782	782	15	5	松	松子	600	1	18	19	19	212	5.6	18	19	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
122	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
123	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
124	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
125	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
126	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
127	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
128	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
129	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
130	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
131	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
132	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
133	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
134	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
135	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
136	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
137	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
138	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
139	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
140	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
141	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
142	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
143	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
144	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
145	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
146	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16
147	782	782	15	5	松	松子	600	1	19	20	19	212	5.6	19	20	19	19	1	3	3.85	204.81	4.26	4.38	6.16

地番①	地番②	住居	地目	小字名	登記地番	竹林 (m)	林地 (m)	石垣 (m)	野原・石垣 面積 (m)	石垣 底面	地籍	施設	施設 面積 (m)	施設 底面						
149	874	2	田	佐ノ井	222	6	15	15	19	2	不	1	6.05	129.95	0.55	0.27	0.97	0.27	0.55	0.29
150	873	2	田	佐ノ井	222	6	15	19	19	2	不	1	7.85	109.97	1.75	0.45	1.65	0.65	1.75	1.04
151	872	2	田	佐ノ井	222	6	15	19	19	2	不	1	15.90	135.89	1.65	0.50	1.71	0.51	1.51	0.53
152	872	1	田	佐ノ井	209	6	20	20	17	2	不	1	4.50	85.56	1.65	—	—	—	—	—
153	872	1	田	佐ノ井	209	6	20	20	17	2	不	1	2.95	77.49	1.25	0.46	1.30	0.51	1.35	0.34
154	872	1	田	佐ノ井	209	6	20	20	17	2	不	1	1.95	20.73	1.05	0.21	1.00	0.21	1.05	0.20
155	872	—	田	佐ノ井	209	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
156	872	—	田	佐ノ井	209	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
157	—	—	田	佐ノ井	209	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
158	—	—	田	佐ノ井	209	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
159	—	—	田	佐ノ井	209	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
160	—	—	田	佐ノ井	209	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
161	—	—	田	佐ノ井	209	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
162	—	—	田	佐ノ井	209	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
163	—	—	田	佐ノ井	209	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
164	—	—	田	佐ノ井	209	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
165	—	—	田	佐ノ井	209	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
166	—	—	田	佐ノ井	209	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
167	—	—	田	佐ノ井	209	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
168	—	—	田	佐ノ井	209	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
169	—	—	田	佐ノ井	209	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
170	—	—	田	佐ノ井	209	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
171	—	—	田	佐ノ井	209	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
172	—	—	田	佐ノ井	209	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
173	—	—	田	佐ノ井	209	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
174	—	—	田	佐ノ井	209	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
175	—	—	田	佐ノ井	709	1	19	19	19	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
176	—	—	田	佐ノ井	709	1	17	17	17	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
177	—	—	田	佐ノ井	709	1	17	17	17	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
178	—	—	田	佐ノ井	709	1	17	17	17	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
179	—	—	田	佐ノ井	709	1	17	17	17	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
180	—	—	田	佐ノ井	624	6	19	22	19	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
181	—	—	田	佐ノ井	624	6	21	19	19	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
182	—	—	田	佐ノ井	624	6	20	18	18	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
183	—	—	田	佐ノ井	624	6	20	19	18	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
184	—	—	田	佐ノ井	624	6	18	18	18	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
185	—	—	田	佐ノ井	427	6	15	18	14	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
186	—	—	田	佐ノ井	427	6	18	17	15	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
187	—	—	田	佐ノ井	427	6	20	18	18	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
188	—	—	田	佐ノ井	427	6	20	20	18	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
189	—	—	田	佐ノ井	427	6	20	15	15	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
190	—	—	田	佐ノ井	427	6	20	15	16	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
191	—	—	田	佐ノ井	427	6	19	13	14	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
192	—	—	田	佐ノ井	427	6	20	20	20	2	不	1	—	—	—	—	—	—	—	—
193	—	—	田	佐ノ井	303	6	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
194	—	—	田	佐ノ井	303	6	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
195	—	—	田	佐ノ井	303	6	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
196	—	—	田	佐ノ井	303	6	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
197	—	—	田	佐ノ井	303	6	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
198	—	—	田	佐ノ井	303	6	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
199	—	—	田	佐ノ井	303	6	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
200	—	—	田	佐ノ井	303	6	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—



第1章 補田の現況





整理No.	地番	地目	小字名	整地面積 (m <sup>2</sup> )	作物	耕種面積 (m <sup>2</sup> )	水耕地		施肥 量(t)	施肥 方法	施肥 部位	施肥 量(t)	施肥 方法	施肥 部位	施肥 量(t)	施肥 方法	施肥 部位			
							田	圃			稻作	旱作	园艺	园艺	园艺	园艺	园艺			
4222 996	田	農業地	田	29	12	14	2	-1	0.65	0.65	0.65	0.65	0.65	0.65	0.65	0.65	0.65	0.65		
4223 999	田	農業地	田	29	1	15	16	24.4	0.5	-1	1	2	0.45	26.7	0.5	0.5	0.5	0.5		
4224 999	田	農業地	田	29	1	16	20	20	0.5	-1	1	2	0.25	26.3	1.29	0.35	1.32	0.35		
4225 882	田	本町	田	3	1	16	12	1	1	-1	1	2	0.68	18.4	1.72	0.40	1.72	1.43		
4226 731	田	寺谷	田	512	3	16	15	13	1	-3	1	2	2.08	18.4	1.72	0.70	1.34	1.07		
4228 734	田	船瀬門田	田	420	5.6	15	16	24.4	0.5	-1	1	2	0.58	26.7	0.5	0.5	0.5	0.5		
4229 887	田	八日田	田	224	224	224	224	224	0.5	-1	1	2	7.58	560.19	2.10	0.96	2.10	0.96		
4230 887	田	八日田	田	123	6	15	12	14	1.4	1	-1	1	1	9.48	140.31	0.59	0.59	0.59	0.59	
4231 887	田	八日田	田	123	6.7	15	14	23.5	1.4	1	2	3	3.49	81.4	0.11	0.11	0.11	0.11		
4232 870	田	八日田	田	602	6.7	14	13	14	2.4	1	-1	1	2	2.71	103.53	1.63	0.33	1.63	0.33	
4233 870	田	八日田	田	602	5.7	15	15	14	2.4	1	-1	1	2	3.18	107.6	0.47	0.33	1.49	0.24	
4234 870	田	八日田	田	602	8.7	15	14	14	2.4	1	-1	1	2	2.68	15.91	1.11	0.28	1.11	0.28	
4235 870	田	八日田	田	602	2	6.7	15	12	15	4.4	1	-1	1	2	3.25	96.99	1.58	0.36	1.58	0.36
4236 856	田	八日田	田	602	8.7	16	20	15	2	1	-1	1	2	3.18	107.6	1.09	0.18	1.09	0.18	
4237 856	田	八日田	田	724	6.7	15	12	0	2	1	-1	1	2	3.25	111.58	1.21	0.61	1.21	0.61	
4238 855	田	八日田	田	724	6.7	20	16	17	2.4	1	-1	1	2	3.18	107.6	1.09	0.54	1.09	0.54	
4239 855	田	八日田	田	602	5.7	15	15	15	2.4	1	-1	1	2	3.71	138.46	1.43	0.84	1.43	0.84	
4240 884	田	八日田	田	602	1	15	15	15	2.4	1	-1	1	2	3.29	145	1.43	0.29	1.43	0.29	
4241 853	田	八日田	田	602	1	15	15	15	2.4	1	-1	1	2	3.03	92.29	1.45	0.46	1.45	0.46	
4242 870	田	八日田	田	602	8.7	15	16	16	2.4	1	-1	1	2	2.48	49.84	1.41	0.28	1.41	0.28	
4243 870	田	八日田	田	602	6.7	15	11	18	2.4	1	-1	1	2	2.68	11.51	1.11	0.28	1.11	0.28	
4244 870	田	八日田	田	602	8.7	15	14	14	2.4	1	-1	1	2	3.06	94.93	1.41	0.85	1.41	0.85	
4245 870	田	八日田	田	602	2	6.7	15	12	15	4.4	1	-1	1	2	3.95	32.86	1.32	0.34	1.32	0.34
4246 870	田	八日田	田	602	2	6.7	16	12	14	2	1	-1	1	2	3.58	88.60	1.00	0.00	3.58	0.00
4247 870	田	八日田	田	602	2	6.7	12	14	2.3	1	-1	1	2	3.58	84.07	1.34	0.42	1.34	0.42	
4248 870	田	八日田	田	602	2	6.7	10	15	2.3	1	-1	1	2	6.83	34.07	1.34	0.98	1.34	0.98	
4249 870	田	八日田	田	602	2	6.7	15	12	3	1	-1	1	2	5.08	53.36	1.94	0.25	1.94	0.25	
4250 870	田	八日田	田	602	2	6.7	11	12	4.2	1	-1	1	2	7.10	46.89	2.12	0.48	2.12	0.48	
4251 870	田	八日田	田	602	2	6.7	15	12	15	4.2	1	-1	1	2	10.08	182.87	2.12	0.36	182.87	2.12
4252 870	田	中野	田	78.67	0	16	0	0	2	1	-1	1	2	7.98	79.67	0	0.00	79.67	0	
4253 870	田	中野	田	521	1	16	16	16	1	-1	1	1	5.98	92.96	0.98	0.30	1.00	0.30		
4254 870	田	中野	田	521	1	16	16	16	1	-1	1	1	5.36	92.96	1.28	0.30	92.96	1.28		
4255 870	田	中野	田	715	1	16	16	16	1	-1	1	1	5.36	92.96	1.28	0.30	92.96	1.28		
4256 870	田	中野	田	715	1	16	15	15	2	1	-1	1	2	5.35	217.46	1.58	0.34	1.58	0.34	
4257 870	田	中野	田	715	1	15	15	15	2	1	-1	1	2	5.35	262.39	1.10	0.31	1.10	0.31	
4258 870	田	中野	田	520	1	20	17	21	3	1	-1	1	2	4.10	187.82	1.25	0.38	1.25	0.38	
4259 870	田	中野	田	520	1	18	15	17	2	1	-1	1	2	6.23	201.14	0.84	0.19	0.84	0.19	
4260 870	田	中野	田	520	1	13	12	12	2	1	-1	1	2	6.58	217.92	2.15	0.24	2.15	0.24	
4261 870	田	中野	田	520	1	23	27	15	2	1	-1	1	2	4.34	54.62	0.81	0.35	0.81	0.35	
4262 870	田	中野	田	715	6	28	19	26	1	-1	1	1	2.01	5.78	0.40	0.00	0.40	0.00		
4263 870	田	中野	田	715	1	22	19	19	2	1	-1	1	2	2.48	25.61	0.77	0.15	0.77	0.15	
4264 870	田	中野	田	618	1	15	15	15	2	1	-1	1	2	4.36	100.59	0.96	0.26	1.03	0.26	
4265 870	田	中野	田	618	1	12	15	2	2	1	-1	1	2	5.48	164.19	1.15	0.21	1.15	0.21	
4266 870	田	中野	田	618	1	15	19	2	2	1	-1	1	2	1.12	317.01	17.5	0.74	17.5	0.74	
4267 870	田	中野	田	618	1	17	21	24.4	1	1	-1	1	2	1.12	281.07	17.8	0.28	17.8	0.28	
4268 870	田	中野	田	618	1	12	15	23.5	1	1	-1	1	2	1.12	280.88	16.4	0.27	16.4	0.27	
4269 870	田	中野	田	618	1	18	16	20	2	1	-1	1	2	1.12	281.18	16.2	0.27	16.2	0.27	
4270 870	田	中野	田	618	1	15	16	18	2	1	-1	1	2	1.12	421.72	14.3	0.34	14.3	0.34	
4271 870	田	中野	田	709	1	22	27	15	2	1	-1	1	2	3.45	84.25	1.72	0.42	1.72	0.42	
4272 870	田	中野	田	709	1	22	27	15	2	1	-1	1	2	4.68	61.28	1.68	0.46	1.68	0.46	
4273 870	田	中野	田	709	1	13	23	18	2	1	-1	1	2	4.68	61.28	1.68	0.46	1.68	0.46	



管理No.	地番(①)	村番	地番(②)	村番	地目	小字名	主要施設	作付 (ha)	主要耕作		耕作方法		耕作强度		耕作方法				
									耕作	(ha)	耕作	(ha)	耕作	(ha)	耕作	(ha)			
501	977	1		田	門田	727	1	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14		
502	979	1		田	門田	503	1	20	18	16	24.2	不	-	1	3	3.85	15.73		
503	979	1		田	門田	503	1	22	20	16	24.2	M1	-	1	3	3.85	15.73		
504	979	1		田	大谷	503	1	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14		
505	980	1		田	大谷	703	6	19	16	16	2	M1	-	1	1.96	15.73	0.161		
506	980	1		田	大谷	703	6	20	16	16	24.2	M1	-	1	3.70	15.73	0.257		
507	980	1		田	大谷	703	6	20	16	16	24.2	M1	-	1	9.96	15.73	0.370		
508	980	1		田	大谷	703	6	19	16	16	24.2	M1	-	1	3.00	15.73	0.250		
509	980	1		田	大谷	703	6	19	15	15	1.4	2.5	-	1	3.68	16.83	0.142		
510	980	1		田	大谷	703	6	19	15	15	1.4	2.5	-	1	3.68	16.83	0.142		
511	981	1		田	大谷	703	6	19	15	15	1.4	2.5	-	1	3.68	16.83	0.142		
512	981	1		田	大谷	315	6	16	16	16	2	E5	-	1	3	7.24	16.70	0.155	
513	981	1		田	大谷	315	6	15	13	14	2.4	E5	-	1	2	4.96	16.56	0.170	
514	981	1		田	大谷	315	6	14	15	15	2.4	E5	-	1	2	4.26	16.10	0.160	
515	981	1		田	大谷	315	6	13	15	15	2.4	E5	-	1	2	3.99	15.90	0.151	
516	981	1		田	久世農	603	1	20	16	20	2.4	E5	-	1	3	2.94	29.87	1.54	
517	985	1		田	久世農	603	1	16	22	17	2.4	E5	-	1	3	4.15	18.00	0.153	
518	985	1		田	久世農	603	1	26	21	20	2.4	E5	-	1	2	3.38	65.57	0.255	
519	985	1		田	久世農	603	1	25	28	25	2.4	E5	-	1	3	2.3	203.29	0.216	
520	1916	1		田	久世農	3	1	30	31	26	2.4	E5	-	1	3	6.63	17.50	1.55	
521	984	1		田	久世農	1210	1	20	23	26	2.4	E5	-	1	3	2.3	36.00	16.36	
522	984	1		田	久世農	1210	1	17	19	22	2.4	E5	-	1	1	2.3	17.70	0.77	
523	984	1		田	久世農	1210	1	22	21	22	2.4	E5	-	1	1	2.3	2.32	88.05	
524	984	1		田	久世農	1210	1	16	15	15	2.4	E5	-	1	1	3.84	11.80	0.113	
525	984	1		田	久世農	1210	1	23	24	26	2.4	E5	-	1	1	3.16	33.36	0.159	
526	984	1		田	久世農	1210	1	15	16	20	2.4	E5	-	1	1	11.93	22.27	0.189	
527	984	1		田	久世農	1210	1	12	13	15	2.4	E5	-	1	1	3.08	47.87	1.33	
528	985	1		田	久世農	24	1	17	16	16	2.4	E5	-	1	1	8.15	13.89	0.154	
529	985	1		田	久世農	129	1	10	12	12	2	M1	-	1	1	4.31	87.90	1.33	
530	985	1		田	久世農	409	1	14	14	15	1.4	2.5	-	1	2	1.72	32.84	1.72	
531	985	1		田	久世農	610	1	16	16	16	2	M1	-	1	2	3.60	17.22	0.150	
532	985	1		田	久世農	610	1	16	16	16	2	M1	-	1	2	3.60	17.22	0.150	
533	985	1		田	久世農	610	1	16	16	16	2	M1	-	1	2	3.60	17.22	0.150	
534	985	1		田	久世農	610	1	16	16	16	2	M1	-	1	2	3.60	17.22	0.150	
535	985	1		田	久世農	628	1	15	23	16	2	M1	-	1	2	4.40	15.69	1.08	
536	985	1		田	久世農	628	1	14	20	15	2	M1	-	1	2	5.18	18.90	0.144	
537	985	1		田	久世農	628	1	14	16	20	15	2	M1	-	1	2	5.18	18.90	0.144
538	985	1		田	久世農	628	1	17	18	14	2	M1	-	1	2	3.25	27.56	1.19	
539	985	1		田	久世農	628	1	17	18	14	2	M1	-	1	2	4.93	1.75	0.30	
540	985	1		田	久世農	809	1	20	17	14	2	M1	-	1	2	5.15	3.20	0.176	
541	985	1		田	久世農	809	1	20	17	14	2	M1	-	1	2	5.15	3.20	0.176	
542	985	1		田	久世農	809	1	20	17	14	2	M1	-	1	2	5.15	3.20	0.176	
543	985	1		田	久世農	809	1	20	17	14	2	M1	-	1	2	5.15	3.20	0.176	
544	985	1		田	久世農	809	1	20	17	14	2	M1	-	1	2	5.15	3.20	0.176	
545	985	1		田	久世農	809	1	20	17	14	2	M1	-	1	2	5.15	3.20	0.176	
546	985	1		田	久世農	809	1	20	17	14	2	M1	-	1	2	5.15	3.20	0.176	
547	985	1		田	久世農	810	1	16	15	12	2	E5	-	1	2	5.35	106.93	1.07	
548	1017	1		田	阿田	420	1	20	17	14	2	E5	-	1	2	2.3	177.33	1.00	
549	1017	1		田	阿田	420	1	16	15	12	2	E5	-	1	2	2.3	98.36	0.83	
550	1017	1		田	阿田	420	1	17	12	12	2	E5	-	1	2	4.50	24.44	0.41	
551	1016	1		田	阿田	721	1	20	13	20	2.4	E5	-	1	2	3.85	24.75	1.69	
552	1016	1		田	阿田	721	1	20	13	20	2.4	E5	-	1	2	3.85	24.75	1.69	

監督官(地番)	社番	地番2	社番2	社番3	地番3	小字名	地盤耐震性状	作付面積 (a)	周土面積 (m) 石面積 (m <sup>2</sup> )	柱物・石面 面積 (m <sup>2</sup> )	壁面 面積 (m <sup>2</sup> )	梁面 面積 (m <sup>2</sup> )	屋根面 面積 (m <sup>2</sup> )	水槽面積 (m <sup>2</sup> )	灌漑面 面積 (m <sup>2</sup> )	通路 面積 (m <sup>2</sup> )	施設面積 (m <sup>2</sup> )	施設内 面積 (m <sup>2</sup> )	施設外 面積 (m <sup>2</sup> )	周辺地		直角距離 (m)	平均直角 距離 (m)	平均直 角距離 (m)	比率 比率		
																			北	東							
552	1056	田		田		田	良好	721	1	18	12	3.0	2.40	0.54	0.54	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
553	1057	田		田		田	良好	721	1	18	12	3.0	2.40	0.54	0.54	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
554	1058	田		田		田	良好	650	1	17	19	17	2.45	0.51	0.51	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
555	1059	田		田		田	良好	650	1	17	19	17	2.45	0.51	0.51	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
556	1060	田		田		田	良好	650	1	15	18	20	2.45	0.51	0.51	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
557	1061	田		田		田	良好	650	2	11	12	15	2.45	0.51	0.51	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
558	1062	田		田		田	良好	650	2	14	15	17	2.45	0.51	0.51	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
559	1063	田		田		田	良好	650	1	15	18	20	2.45	0.51	0.51	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
560	1064	田		田		田	良好	650	1	17	21	18	2.45	0.51	0.51	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
561	1065	田		田		田	良好	650	1	15	18	20	2.45	0.51	0.51	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
562	1066	田		田		田	良好	650	1	15	18	20	2.45	0.51	0.51	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
563	1067	田		田		田	良好	650	1	15	18	20	2.45	0.51	0.51	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
564	1068	田		田		田	良好	650	1	15	18	20	2.45	0.51	0.51	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
565	1069	田		田		田	良好	650	1	15	18	20	2.45	0.51	0.51	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
566	1070	田		田		田	良好	621	1	15	18	20	2.45	0.51	0.51	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
567	1071	田		田		田	良好	621	1	15	18	20	2.45	0.51	0.51	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
568	1072	田		田		田	良好	621	1	15	18	20	2.45	0.51	0.51	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
569	1073	田		田		田	良好	509	1	10	14	10	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
570	1074	田		田		田	良好	509	3	16	14	15	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
571	1075	田		田		田	良好	509	3	16	14	15	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
572	1076	田		田		田	良好	509	3	16	14	15	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
573	1077	田		田		田	良好	509	3	16	14	15	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
574	1078	田		田		田	良好	509	3	16	14	15	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
575	1079	田		田		田	良好	509	3	16	14	15	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
576	1080	田		田		田	良好	509	6	16	18	17	15	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38
577	1081	田		田		田	良好	509	6	16	18	17	15	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38
578	1082	田		田		田	良好	509	6	14	12	10	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
579	1083	田		田		田	良好	706	6	14	12	10	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
580	1084	田		田		田	良好	706	6	14	12	10	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
581	1085	田		田		田	良好	706	6	18	19	19	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
582	1086	田		田		田	良好	703	6	18	19	19	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
583	1087	田		田		田	良好	703	6	21	19	20	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
584	1088	田		田		田	良好	703	6	21	19	20	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
585	1089	田		田		田	良好	703	6	21	19	20	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
586	1090	田		田		田	良好	215	6	16	18	16	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
587	1091	田		田		田	良好	500	26	18	19	18	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
588	1092	田		田		田	良好	500	26	18	19	18	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
589	1093	田		田		田	良好	500	26	18	19	18	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
590	1094	田		田		田	良好	500	26	18	19	18	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
591	1095	田		田		田	良好	409	1	16	19	14	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
592	1096	田		田		田	良好	409	1	16	19	14	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
593	1097	田		田		田	良好	600	1	21	20	16	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
594	1098	田		田		田	良好	600	1	21	20	15	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
595	1099	田		田		田	良好	600	1	21	20	15	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
596	1100	田		田		田	良好	600	1	21	20	15	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
597	1101	田		田		田	良好	600	1	21	20	15	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
598	1102	田		田		田	良好	600	1	21	20	15	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
599	1103	田		田		田	良好	225	6	17	18	14	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
600	1104	田		田		田	良好	701	1	21	20	17	2.0	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
601	1105	田		田		田	良好	701	1	25	17	6	2.5	0.41	0.41	1.55	1.05	0.47	0.54	0.54	1.10	0.51	0.47	1.21	0.36	0.38	
602	1106	田		田		田	良好	701	1	25	17	6															

单机号	产地	机型	排量(升)	功率(千瓦)	转速(r/min)	油箱(升)	油箱(升)	冷却剂(升)		燃油箱(升)	燃油箱(升)	进气口(升)	排气口(升)	额定转速(升)	额定转速(升)	油标尺(升)	油标尺(升)	油尺刻度(升)	油尺刻度(升)	油尺刻度(升)	油尺刻度(升)	油尺刻度(升)	油尺刻度(升)					
								水冷(升)	风冷(升)																			
602	1102	日田	瓦上灰	1	15	22	14	2.4	—	1.47	1	3	2.3	2.67	1.55	0.68	1.09	0.21	0.69	1.45	0.222	0.10	0.50	0.41	1.43	0.223		
603	1102	日田	瓦上灰	1	20	17	2.3	—	—	1	1	3	3	5.88	4.93	0.91	1.47	0.34	1.35	3.21	0.37	0.10	0.50	0.41	2.17	0.35		
604	1078	日田	瓦上灰	1	21	17	16	21	—	2	M1 M1	1 1	1	3.6	3.79	17.93	0.93	1.27	0.32	1.35	3.21	0.37	0.10	0.50	0.41	2.17	0.35	
605	1101	日田	瓦上灰	1	19	16	16	2.3	—	—	—	3	3	3.61	16.71	0.71	1.77	0.38	1.77	3.51	0.37	0.10	0.50	0.41	2.26	0.35		
606	1101	日田	瓦上灰	1	18	16	16	2.3	—	—	—	3	3	4.06	27.01	0.01	1.49	0.21	1.49	1.01	0.21	0.10	0.50	0.41	6.45	0.145		
607	1101	日田	瓦上灰	1	18	14	14	2.4	—	—	—	1	2	2.73	16.83	0.01	1.18	0.34	1.23	3.41	0.15	0.10	0.50	0.41	6.45	0.145		
608	0109	日田	瓦上灰	2	17	19	17	2.0	E2	—	—	3	2	10.33	40.05	1.38	1.39	1.44	1.35	38.1	0.15	0.10	0.50	0.41	13.5	0.265		
609	0106	日田	瓦上灰	1	22	2.7	19	2.0	E2	—	—	2	2	9.00	22.03	0.26	1.21	1.13	1.22	1.31	0.21	1.71	0.59	0.40	1.06	1.21	3.5	0.265
610	1084	日田	瓦上灰	2	20	16	16	2.0	E2	—	—	1	2	4.65	43.79	1.37	0.40	1.39	1.40	5.7	0.34	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
611	1097	日田	瓦上灰	1	28	15	15	2.0	E2	—	—	1	2	2.68	28.07	0.99	0.25	1.06	1.06	25.59	0.43	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
612	1097	日田	瓦上灰	1	18	17	14	2.0	E2	—	—	1	2	4.73	81.43	1.07	0.24	1.10	1.24	4.7	0.24	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
613	1097	日田	瓦上灰	1	20	15	16	2.0	E2	—	—	1	2	4.56	16.68	1.56	0.38	1.62	1.62	8.51	0.43	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
614	1097	日田	瓦上灰	1	18	17	14	2.0	E2	—	—	1	2	5.53	11.93	0.89	0.26	0.93	0.95	7.81	0.32	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
615	1097	日田	瓦上灰	1	18	18	18	2.0	E2	—	—	1	2	3.40	61.40	0.26	0.96	2.80	2.85	61.31	0.32	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
616	1097	日田	瓦上灰	1	25	19	19	2.0	E2	—	—	1	2	3.26	12.63	0.92	0.21	0.95	1.0	31.0	0.26	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
617	1097	日田	瓦上灰	1	25	20	20	2.0	E2	—	—	1	2	3.41	60.61	0.78	0.35	0.84	0.84	60.78	0.22	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
618	1097	日田	瓦上灰	3	20	22	22	2.4	E2	—	—	1	2	5.00	14.98	0.97	0.34	1.06	1.06	34.97	0.29	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
619	1097	日田	瓦上灰	1	27	25	13	2.4	E2	—	—	1	2	5.01	12.45	1.09	0.32	1.15	1.15	33.01	0.34	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
620	1097	日田	瓦上灰	1	19	15	16	2.0	E2	—	—	1	2	3.25	72.96	0.71	0.26	0.75	0.75	29.03	0.32	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
621	1097	日田	瓦上灰	1	17	16	20	2.4	E2	—	—	1	2	4.55	13.72	1.83	0.40	1.68	1.68	13.61	0.43	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
622	1096	日田	瓦上灰	2	11	12	13	2.4	E2	—	—	1	2	2.3	11.93	0.56	0.26	0.93	0.95	12.85	0.33	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
623	1096	日田	瓦上灰	2	12	18	9	2.4	E2	—	—	1	2	8.78	122.96	1.10	0.45	1.15	1.15	121.19	1.24	0.40	1.21	1.21	3.4	0.265		
624	1096	日田	瓦上灰	1	14	16	15	2.4	E2	—	—	1	2	3.33	47.34	0.93	0.24	0.96	0.96	47.83	0.26	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
625	1096	日田	瓦上灰	1	13	15	16	2.4	E2	—	—	1	2	4.05	61.93	1.01	0.30	1.05	1.05	60.91	0.13	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
626	1095	日田	瓦上灰	1	15	14	14	2.0	E2	—	—	1	2	4.50	76.33	0.78	0.18	0.81	0.81	76.78	0.13	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
627	1095	日田	瓦上灰	1	18	14	17	2.0	E2	—	—	1	2	3.73	90.33	1.12	0.36	1.19	1.19	36.41	0.13	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
628	1093	日田	瓦上灰	1	13	18	19	15	E2	—	—	1	2	9.46	27.31	1.49	0.41	1.54	1.54	34.41	0.13	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
629	1093	日田	瓦上灰	2	17	14	15	2.0	E2	—	—	1	2	4.45	81.14	1.27	0.20	1.29	1.29	21.27	0.35	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
630	1094	日田	瓦上灰	1	14	—	—	—	—	S2	—	3	2.5	10.46	18.11	1.59	0.27	1.61	1.61	27.71	16.59	0.17	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265	
631	1096	日田	瓦上灰	1	16	10	15	2.4	E2	—	—	1	1	10.05	97.77	3.50	0.06	3.63	3.63	98.03	0.13	0.25	1.21	1.21	3.4	0.265		
632	1097	日田	瓦上灰	1	13	25	18	18	E2	—	—	1	2	3.98	53.80	0.36	0.26	0.96	0.96	53.91	0.13	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
633	1117	日田	瓦上灰	1	26	19	18	24	E2	—	—	1	2	2.46	39.35	1.30	0.34	1.31	1.31	34.01	0.13	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
634	1117	日田	瓦上灰	1	26	16	16	22	V1	—	—	1	2	5.04	112.58	1.68	0.64	1.93	1.93	64.61	0.13	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
635	1090	日田	瓦上灰	1	12	12	12	25	S3	—	—	3	1	1.90	15.54	0.70	0.20	0.70	0.70	16.71	0.03	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
636	1084	日田	瓦上灰	1	22	25	16	25	V1	—	—	1	2	2.68	7.55	1.19	0.36	1.28	1.28	38.19	0.13	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
637	1084	日田	瓦上灰	1	16	16	18	—	S3	—	—	1	2	4.35	68.37	0.73	0.21	1.24	1.24	24.02	0.13	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		
638	1085	日田	瓦上灰	1	13	19	15	—	S2	—	—	1	5	3.08	87.10	1.07	0.30	1.08	1.08	30.01	0.07	0.26	1.21	1.21	3.4	0.265		



写真1-5

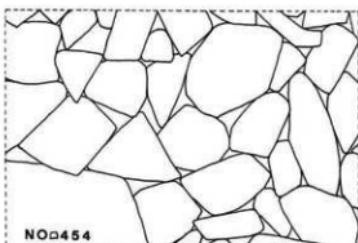


図1-10

### (3) 石積みの実測

棚田の地理的バランスを図りながら実測し図面化したもので、石垣の表面に縦横に1 m×1.5mの座標をつくり、使われている1個の石の変化点と隣の石との接点をプロットしたので原図の縮尺は1/10とし、21サンプルを採った。(後の実測図は縮小している)

また、(1)の築造期や石材と方法の参考にもなるもので、更に縮小し数例を以下に掲載するが、内1例を写真と対比しておくが一見すると異なるように見える、この原因は写真では表面のみが見え実測図では石の接点等は隙間の奥にあることが多く、その接点を図では表面に引き出したことになるからである。(写真1-5及び図1-10)

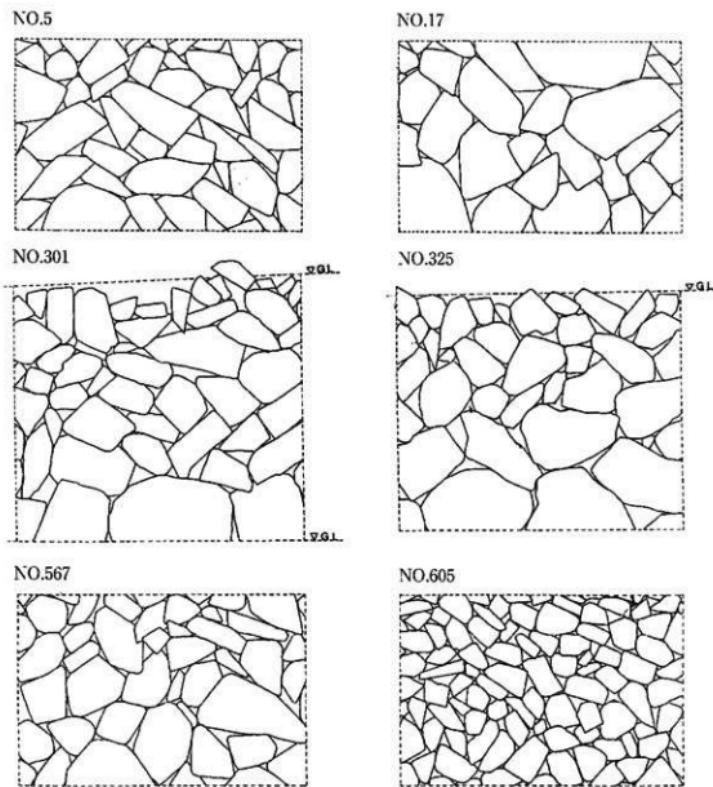


図1-11

#### (4) 断面調査

棚出保全のために計画された整備農道工事に先立ち、その工事のために埋没又は取壊しとなる右垣の横断面を掘削して、積石の裏側と埋め土の様相を調査した。

しかし、農道工事にかかる場所と既定された中の調査のため場所的に片寄ったり適切さに欠ける面もあり、この結果が大井谷の特徴とはいえないかもしれないが7ヵ所を掘削し図化したので、その数例を以下に紹介する。

調査は、石積み面を約0.5m幅で田の奥行方向に上段の出の根石まで掘削し、垂直方向へは耕土から地山線を目標とした、図は横断面とその正面を採った。

## ① サンプル196(図1-12)

谷型の小さな出の重なり合う場所の中腹に当たるところで、減反により休耕中のところである。

- 石積は根石に大きな石を使い徐々に小型の石になっている、裏込めもあり、安定した積み方であるが、天端石は使っていない。
- 地層的に見ると、耕土は15cmくらいで①層③層の混在した②層をもち平面図E、Fの高さに合わせた③④層で基盤を構成し、⑥層は疊混じりの安定した層で地山と推定される。なお、②層を基盤ともみられるが、ここでは耕土の沈漫層とした。
- 平面図に表したようにE、F石の間に集石があるが、特に古代の遺構といえるものではない。注意して発掘したが、遺物らしきものは一片も発見できなかった。

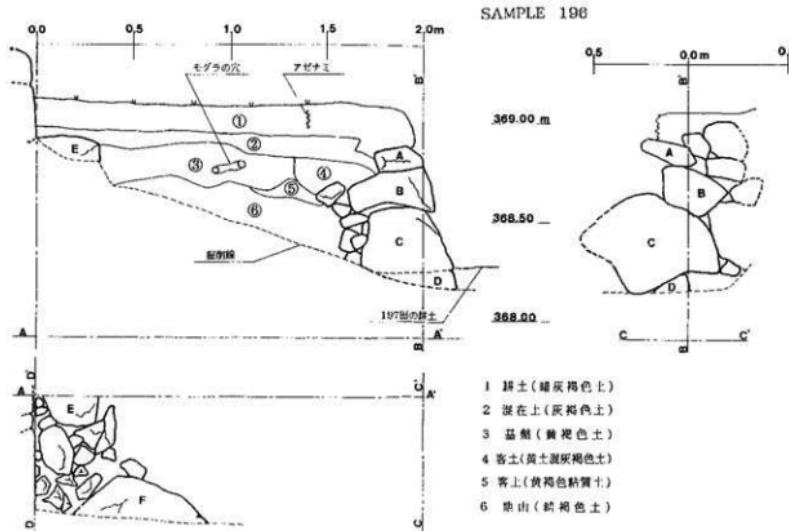


図1-12



写真1-6 抗ヶ坪

## ② サンプル198 (図1-13)

196の下側197をはさんだ場所で、石垣面の植栽が多い他は、ほぼ同じ状況である。

- ・ 石積みは根石に大きな石を使い徐々に小型の石になっている点は196と同じであるが、左の写真でみられるように裏込めは石は大きくカイ石として機能するものは見当たらない。図上では現さなかったが、石隙に土がつまっている状態と積み石A、B、C、Dの法面

が不揃いであることは、裏込め石の少ないと植栽や荷重により石が動いたのである。

- ・ 地層的にみると、耕土は20cmくらいで、②層の基盤と③④層は奥で⑥層のマサ土につき当たる様相なので図面上は客土としたが、①層が石積みの裏側まで入り込んでいることから③④層以下が地山の可能性もある、⑥層は上の田(197)の根石の下まで続いている。

SAMPLE 198

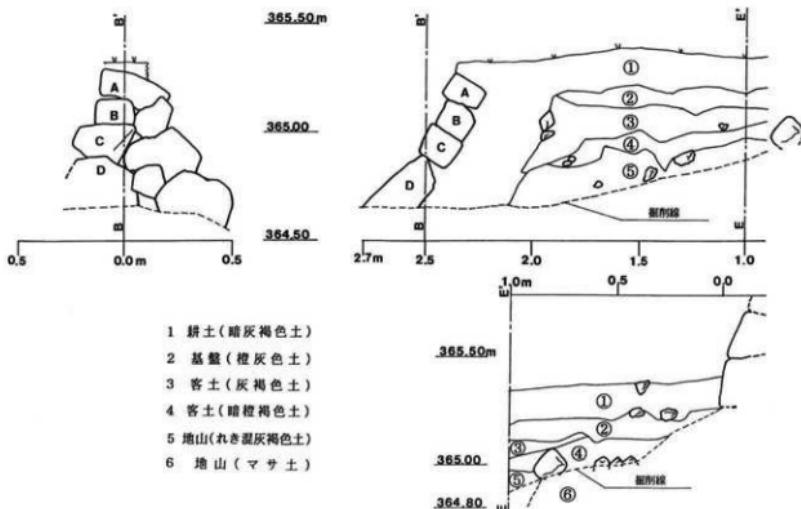


図1-13

### ③ サンプル522 (図1-14)

大井谷地区の本川に当たる右岸管埋道に接するところで、河川改修の影響を受けていると思われる場所、522はS型に近い谷型尾根型の合成田で（大井谷棚田では多数派）左端に近いところで近年は休耕されている。

- ・ 積み石は、野石と割石の混合で、控えも長くとり裏込めも多く、安定した積み方に見えるが図に示したように法面は出張りが大きい。

正面図でみると、積み石aの下面とc、dの上面やeの下面とf、gの上面どうしの接線が貫通しになっていることがわかる。

- ・ 地層的には、耕土17cm位の①層の下に②③層のように厚さ3cm位の層がある。おそらく耕土に混入していた密度の高い小石片等が沈殿したものと思われる。

したがって、④⑥層が基盤であり⑤層は客土された埋め土と思われる。

地山層は④層の掘削溝奥より急勾配にもぐり込んでいる暗橙褐色粘質土の層以下と思えるが掘削調査では追えなかった。

- ・ 耕土下より近世の磁器片が出てきたが、古代中世の遺構遺物はなかった。

SAMPLE 522

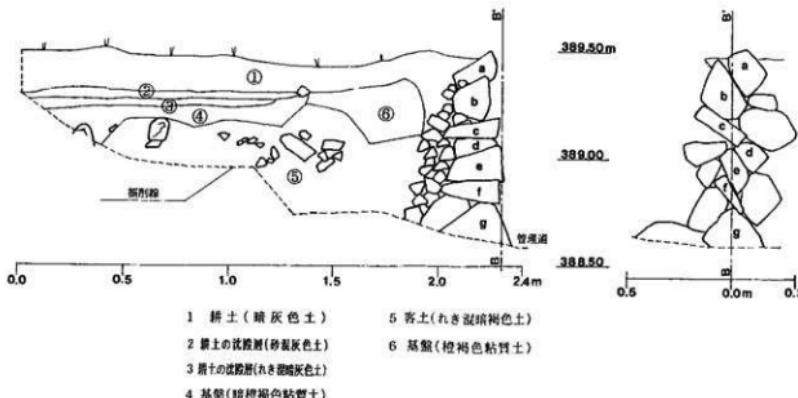


図1-14

#### ④ 考 察

以上、3例を報告するが7例を全体的にみると、

- ・ 石積みについては、サンプル196、198、386、畑等に見られるように改修を受けていないものは野石で積み上げられ、201、522、農道等のように近年改修されたところは野石と削石の混合で積まれている。

また、サンプル196、198、386は天端石を使わず、202、522、畑、農道は天端を意識した積み石になっている。

根石には農道を除いて根の深い転石を組み込み、その転石に添い付けられた根石は下の田の基盤高に置かれており、中積みには石の大小を問わず組み込まれたものが多い。

- ・ 地層的には、地山としてマサ土層があったのはサンプル198のみで、201、386、畑のように動かし難い自然石を基盤以下に含んだもの、522農道部のように疊混じり土をもつもの、196のようにどれにも属さないものがあった。

耕土下の基盤としては、サンプル農道部、畑では明確にでなかったが、その他5サンプルでは厚みや水平度の面からは不揃いではあるが構築されている。

また、当然ではあるが地山線勾配は、出の石垣高と奥行長の関係に近いことも確認できた。

- ・ 埋蔵文化財については、調査7サンプルとともに遺構遺物等はなかった。

## (5) 利水畜道調査

- ① 調査目的** この地区も、昭和30年代までは、牛を使っての耕作が盛んになされていた。そのころの牛の通った道（以下、畜道とする）や給水排水の経路及びその名残りがある。現在進行中の整備農道工事で整備されようとしている給排水路農道改修の前に昭和30年代の様子を利水畜道として記録しておくこととした。
- ② 調査方法** 48ページ以後に示すような各字ごとの調査図を作り、田ごとに日視し水系は赤で畜道は赤の欠印で書き込みをした。それを基に①主要水路及び道路の概要（図1-15）と②大井谷地区の利水畜道のフローチャート（付図2）としてまとめた。なお、調査票を作るに当たり付図1の平面図を基にしたため一枚の田として表記されていても実状は高低差の少ない複数の田の場合が多数あり、調査票やフローチャートには複数の整理番号で表すことにして、欠番は白地のままとした。また、調査地域は棚田のほぼ中心部でまとまった団地を調査し、小さな団地や荒れ地や日視で確認できないものについては未調査及び未記入とした。
- ③ 調査結果** (図1-15及び図1-16~25、別添資料付図2)
- ・ 給水は田から田への当て越しや主流となっていて、多いものは10枚以上へ1つの給水口より給水されている。また、当て越しの最終の田には排水口をもたないものがほとんどである。
  - ・ 谷川からの給水路や掛橋より供給されるものが多いなかで、湧水を利用しているものもあり、その湧水をそのまま取り入れたものもある。
  - ・ (写真1-7) : 給水路で後にコンクリート水路に現在は、Pパイプにと変遷がわかる。
  - ・ (写真1-8) : 当て越しの様子、石積劣化を防ぐためポリシートを取りついている。
  - ・ (写真1-9) : 落とし口、モルタルで補修している。
  - ・ 畜道は単独で持つものもあるが田から田への渡りで移動するものが多い。2~5枚の渡りが主流といえる。
  - ・ (写真1-10) : 共用の農道
  - ・ (写真1-11) : 移動用の畜道、現在は補強し耕作機械の移動に利用している。
  - ・ (写真1-12) : 大きな転石を利用して畜道にしている。
  - ・ 給水と畜道の関連ではそれぞれ異なるルートで造り付けられているが、よく見るとその中でも1つの団地を形成していることが解る。推測ではあるが造成当時の所有者単位で1団地を形成したものだろう。
  - ・ その単位の集合で、この大井谷の棚田が形成されているといえる。



写真1-7 錫冶屋敷



写真1-8 向田(1)



写真1-9 向紳



写真1-10 向田(1)

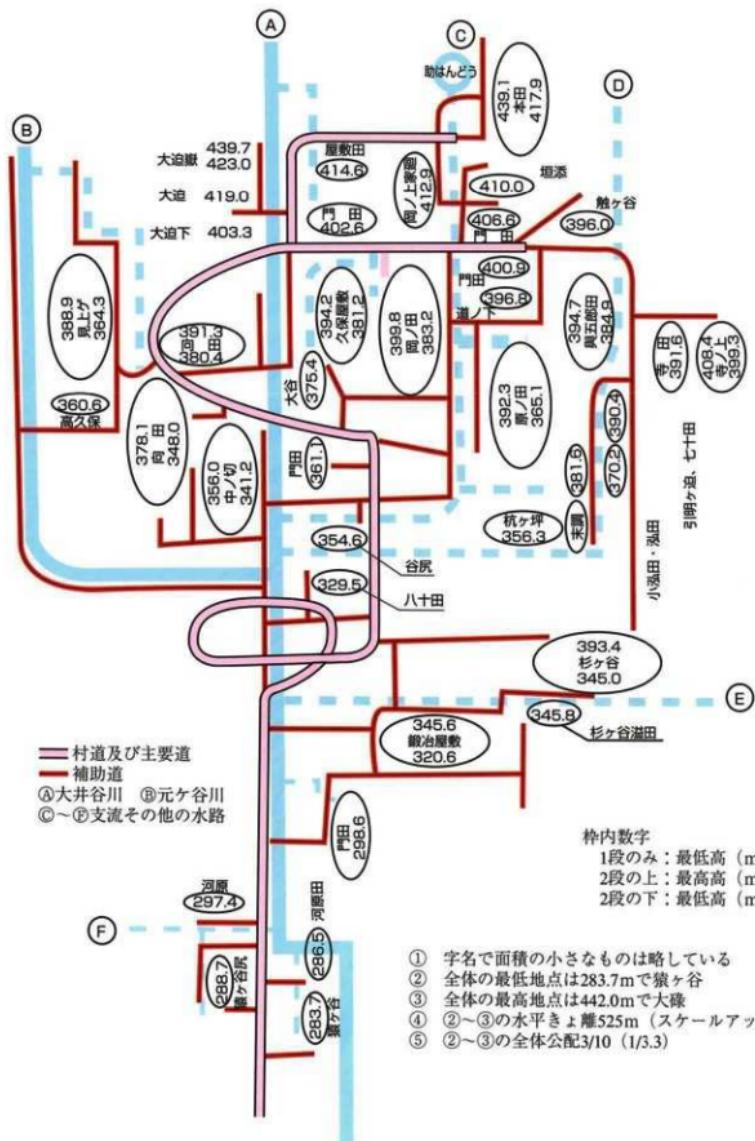


写真1-11 錫冶屋敷



写真1-12 原ノ田

図 1-15 主要水路及び道路の概要



**枠内数字**  
1段のみ：最低高 (m)  
2段の上：最高高 (m)  
2段の下：最低高 (m)

- ① 字名で面積の小さなものは略している
  - ② 全体の最低地点は283.7mで猿ヶ谷
  - ③ 全体の最高地点は442.0mで大疊
  - ④ ②～③の水平きょ離525m（スケールアップ）
  - ⑤ ②～③の全体公配3/10 (1/3.)

図1-16 利水・畜道調査図(1)

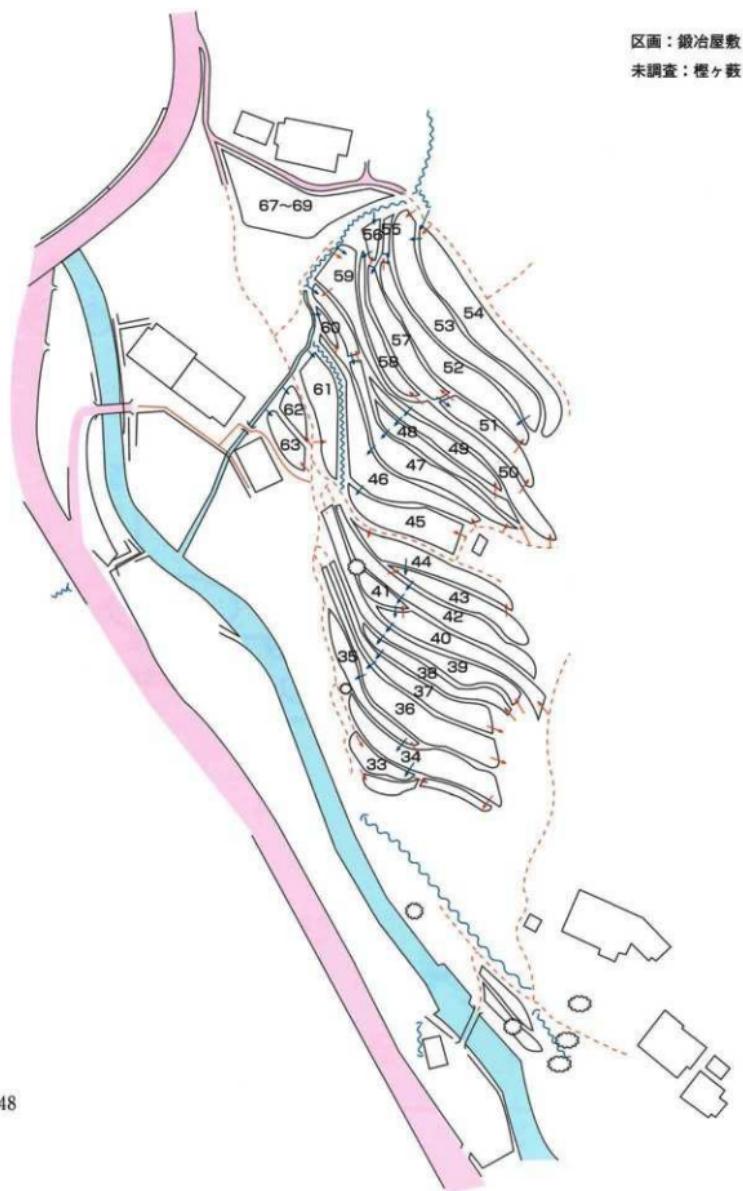


図1-17 利水・畜道調査図 (2)

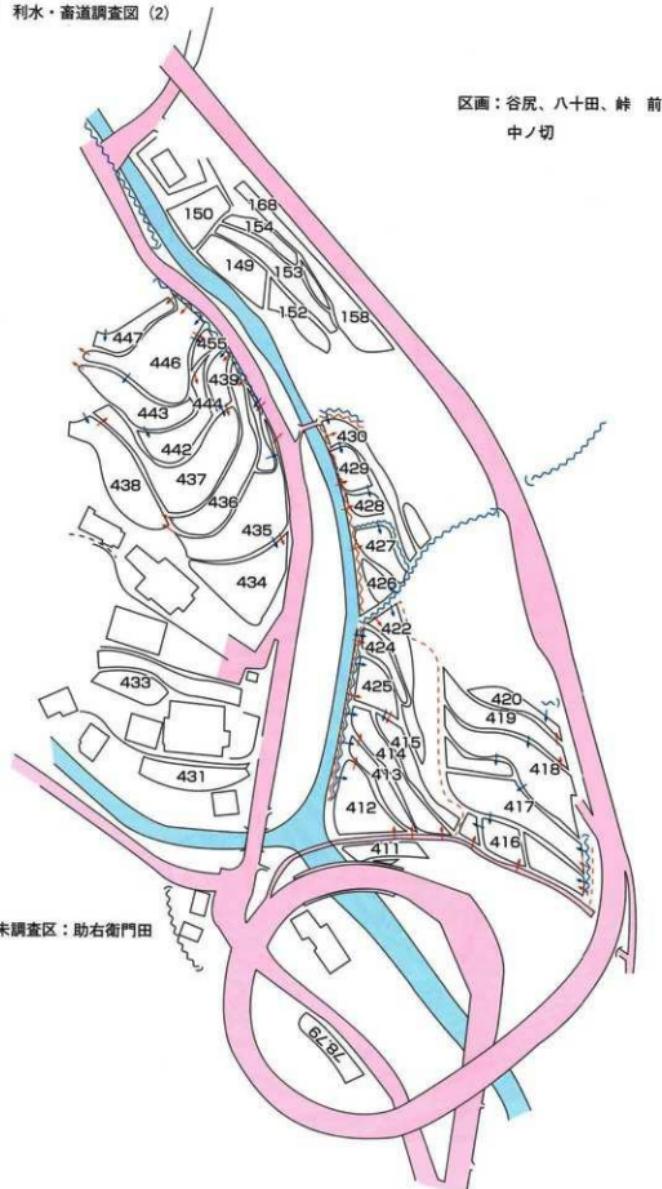


図1-18 利水・畜道調査図 (3)

区画：向田（ ）

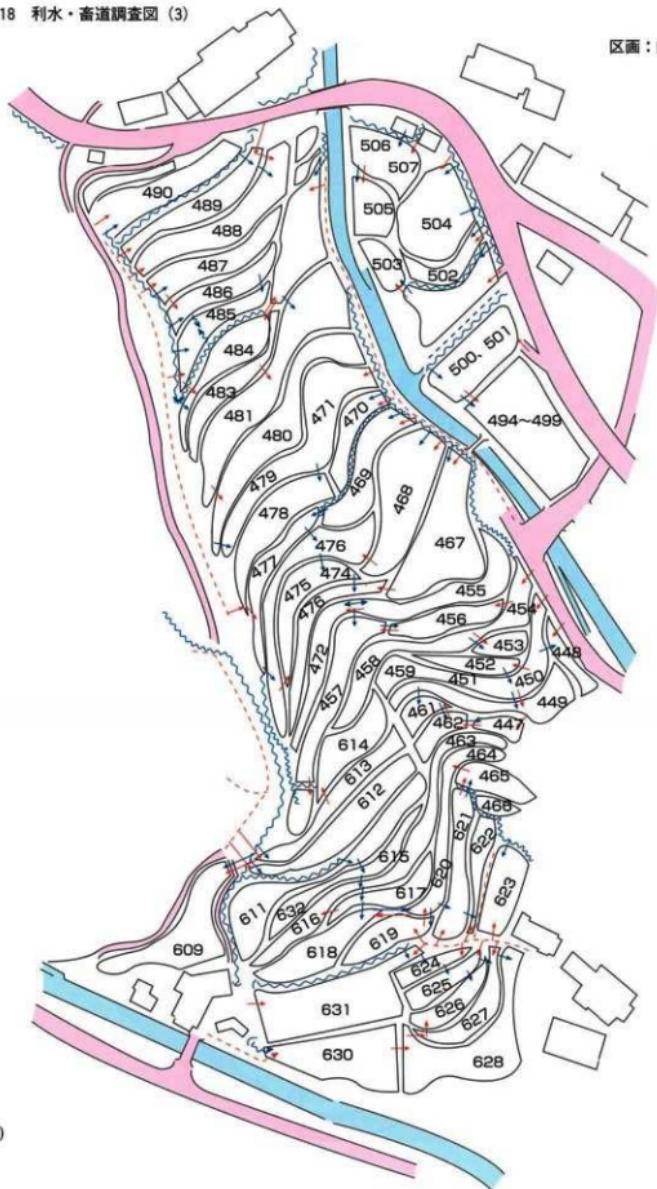


図1-19 利水・畜道調査図 (4)

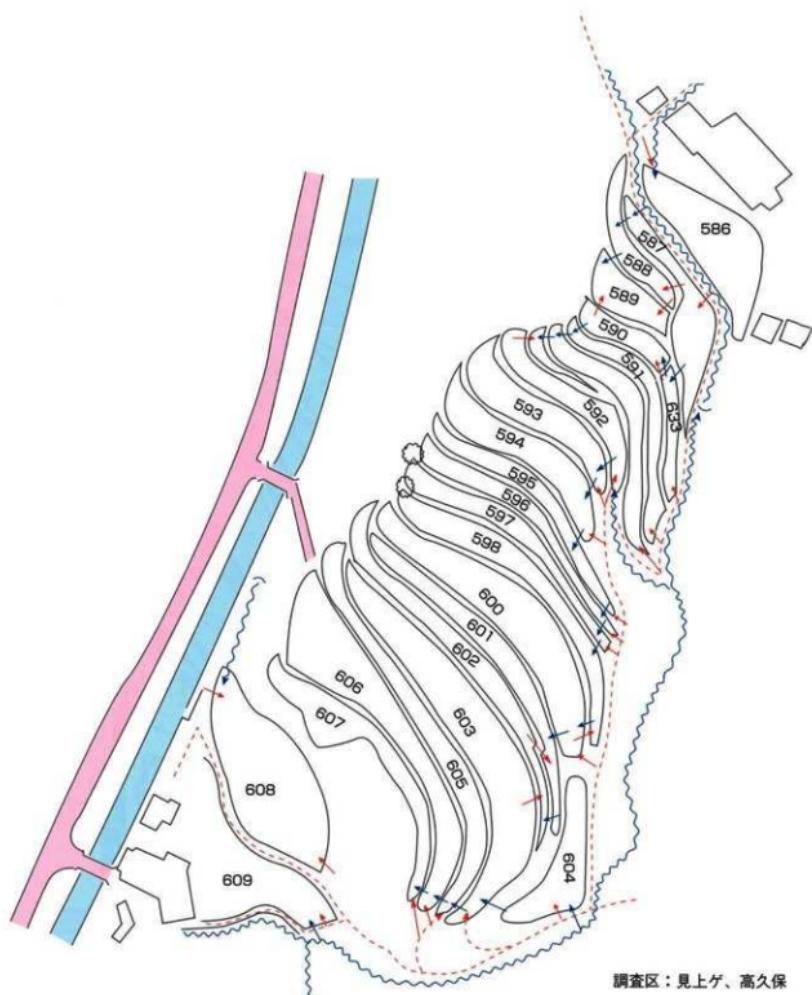


図1-20 利水・畜道調査図 (5)

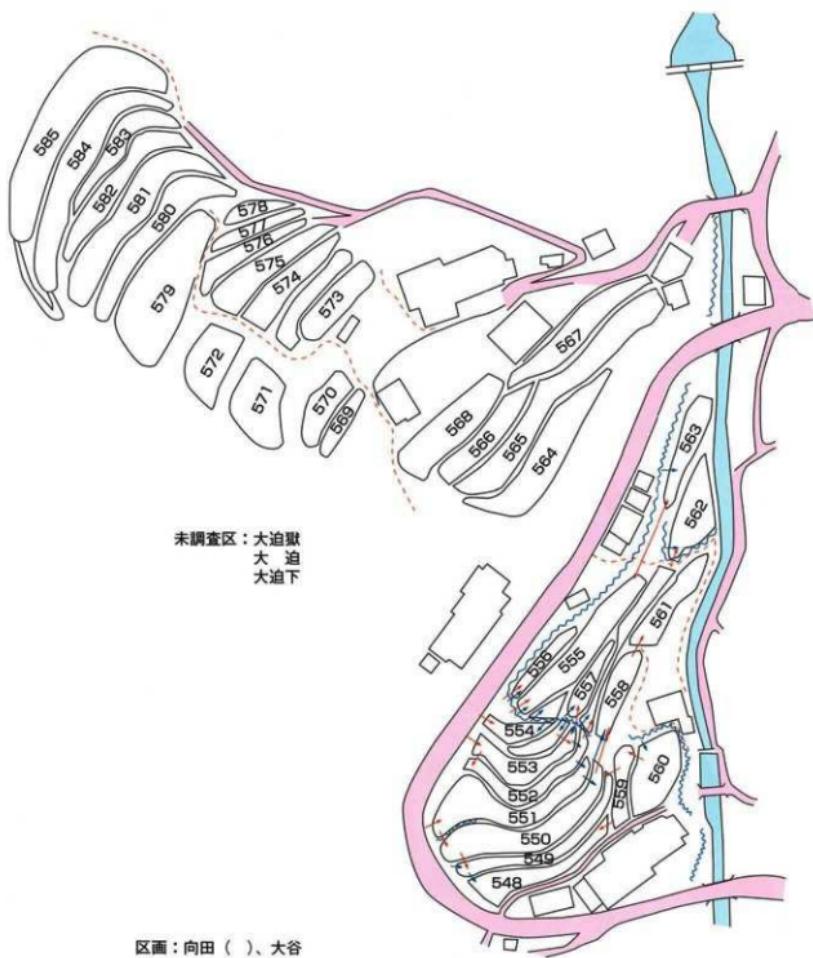


図1-21 利水・畜道調査図(6)

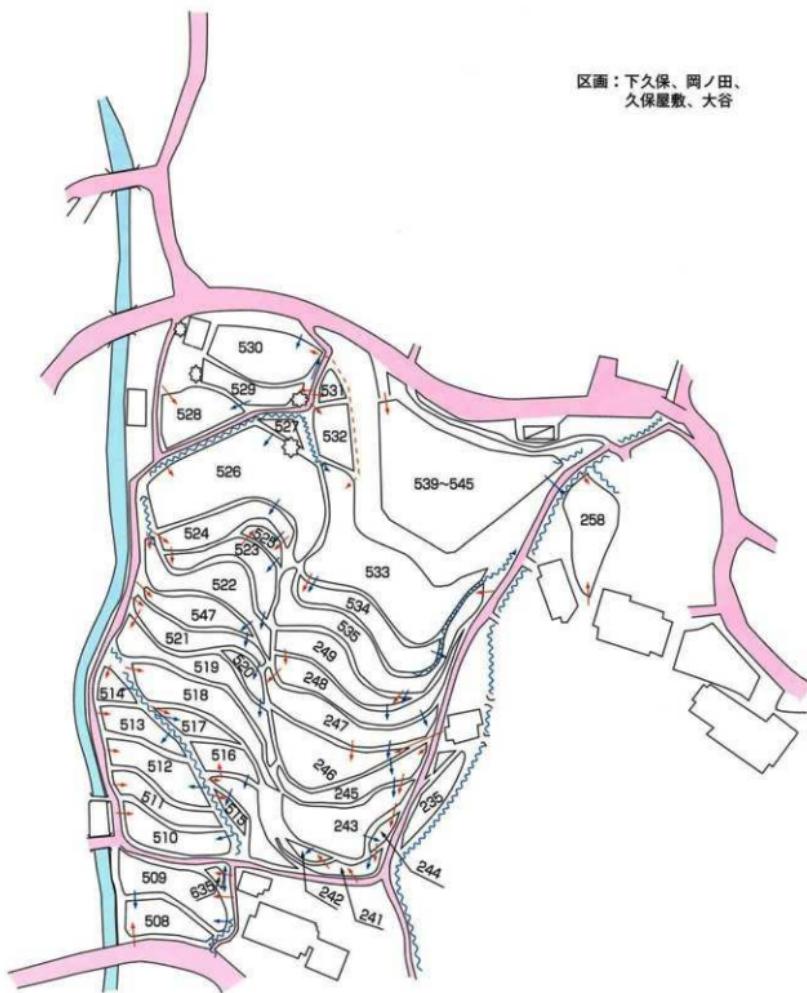


図1-22 利水・畜道調査図 (7)

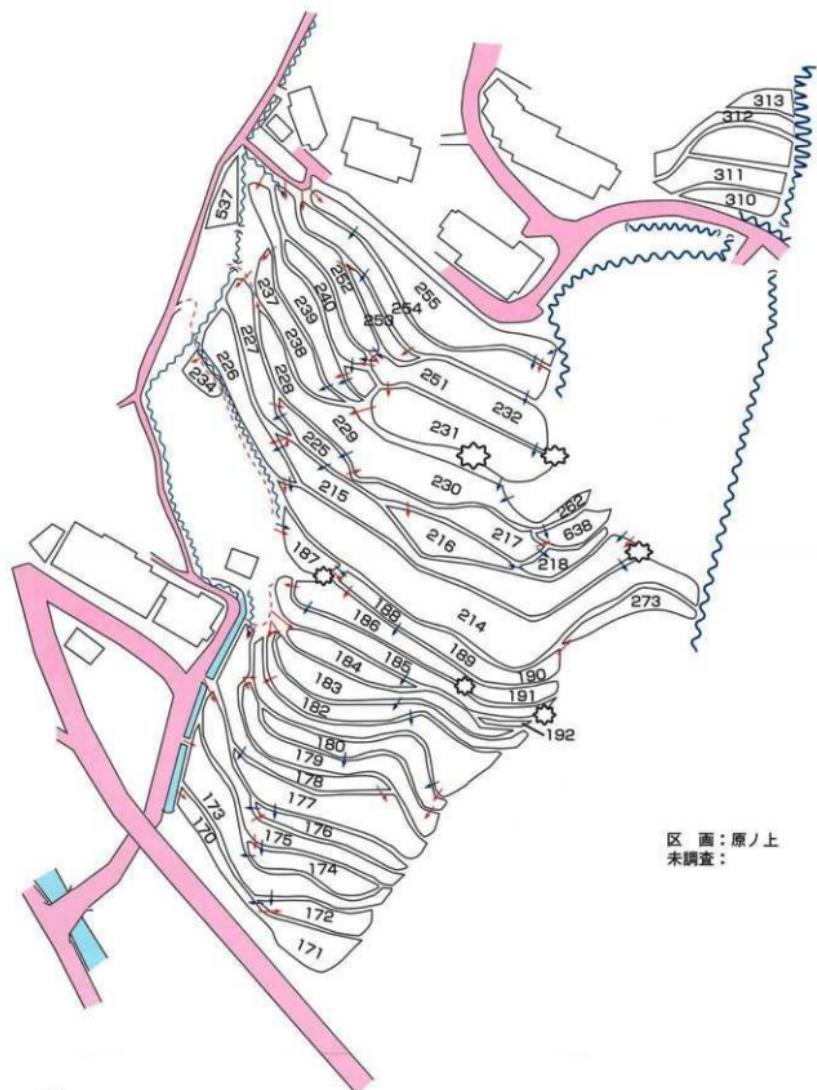


図1-23 利水・畜道調査図 (8)

区画：與五郎田、弘田

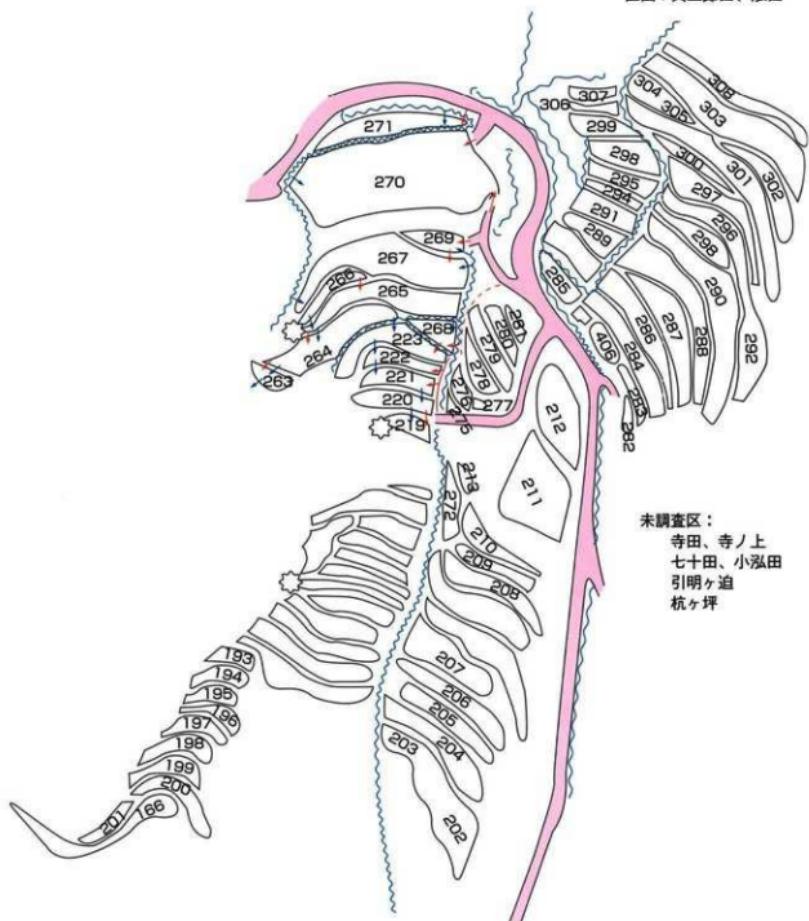


図1-24 利水・畜道調査図 (9)

区画：屋敷田、門田、口屋敷  
久保、岡ノ上、家畠

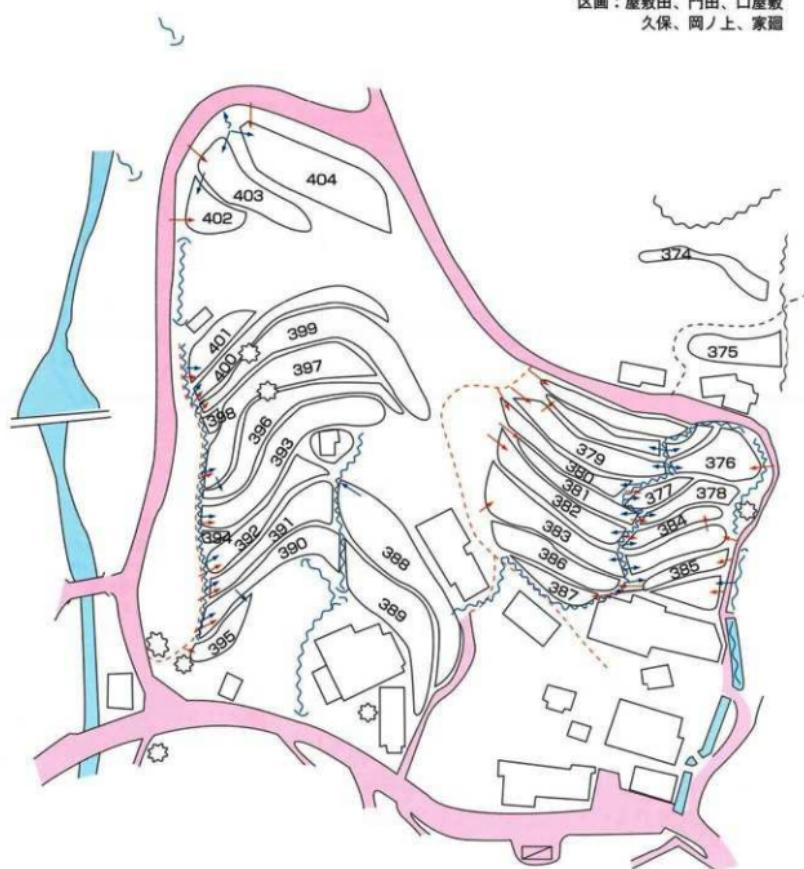


図1-25 利水・畜道調査図 (10)

区画：本田、大碌、岡ノ上

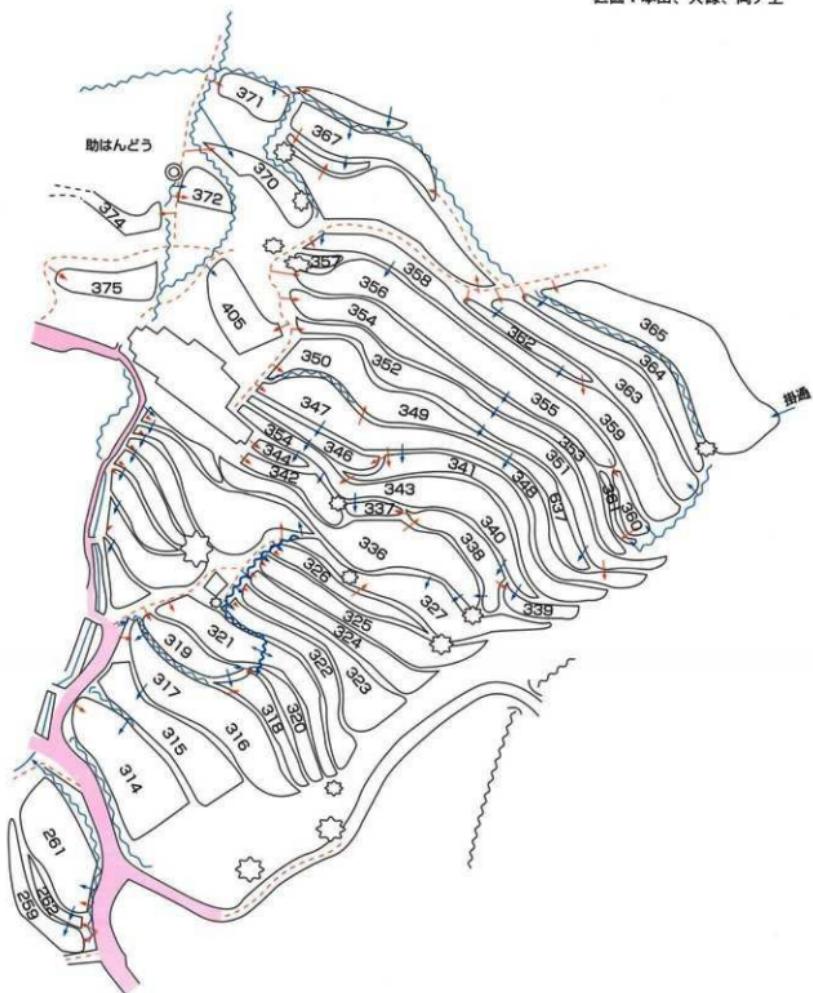




写真1-13 銀治屋敷



写真1-14 門田



写真1-15 銀治屋敷



写真1-16 埼添



写真1-17 本田



写真1-18 見上ヶ

## 後記

- ① この報告書は内容はできるだけ客観的なデータをもとにまとめた。
- ② 石垣状況で報告したが、全体的に老朽化が激しく保護補修の必要性を感じる。  
老朽化の原因として、土化（土が隙間に入り込み組合せが緩む）や植栽・漏水が考えられるが、石垣そのものが静止には強いが動圧（耕作機械のエンジン振動40～60Hz相当）に弱いのではと地元の人の訴（機械化のころから傷み方が激しい）から感じた。
- ③ 石垣に、自然転石を組み込んだり犬端を合わせたりしたもののが相当数あることや自然石の犬端を利用して蓄道にしたり、造成当時の苦労が今でも伺うことができる。
- ④ 分散図からも読み取れるように、間口が長く奥行が短い（面積が小さい）田がたくさんあり、その端例をあげると間口80mで奥行60cmくらいのものがあり二条植え田植機でも往復は出来ない、そのうえ障害岩礁があり、現在でも田植えはもとより耕作時にも相当な苦労があると痛切に感じる。  
このことは、米のもつ重要性と地域の絆なくしては今までこれからも棚田の存続は考えられないと思う。
- これから先、この文化遺産を保存継承するためには大井谷地区の人々の努力だけでは限界があると、私自身の水田耕作（大井谷ではない）の経験よりも言わざるを得ない。
- ⑤ 利水蓄道調査では日視により確認して記録したが、村道周辺や河川周辺ではそれぞれ改修がなされており、したがって水口蓄道もそのおりに改修されたものが多いと推測出来ることや、機械化と共に能率化のために水田や畜道の新たに追加されたのではと考えざるを得なかった場所もあったが、現状で判断できないものはそのまま記録した。
- 結果的には調査目的の意に沿ったものにはならなかったのはとしかの危惧がある。
- ⑥ 棚田維持のため、地区のひとたちが努力している様子を紹介してみる。
  - ・ 今も田の中の麻雀骨（岩礁）を、加熱して破壊している。（写真1-13）
  - ・ 昇畔の流出した土を補充し、漏水を防止している。（写真1-14）
  - ・ イノシシによる被害防止に、金網やトタンをめぐらしている。（写真1-15）
- ⑦ 文中、整備農道工事や保全工事を表現した工事での整備の様子も紹介して締めくくる。
  - ・ 水路がベンチフリュームに整備され、給水効率が上がった。（写真1-16）
  - ・ 排給水の落としが、塩化ビニールパイプになった。（写真1-17）
  - ・ 農道が拡幅コンクリート舗装され、軽トラックが使える。（写真1-18）
- ⑧ 最後に、この調査に当たり協力していただいた“助はんどうの会”をはじめとする大井谷地区の皆さん、現地調査の手伝いをしていただいた三浦清美氏、三浦尚樹氏、データ入力をしていただいた三浦泉氏、そして保全工事中にも拘わらず調査のために工事を一時中断し協力していただいた（有）三浦土木社にお礼を申し上げ、終わりとする。

三浦 一美



## **第2章 棚田の歴史**



## はじめに

江戸後期の文化年間に出丸庄村屋尾崎太左衛門が記したとされる『吉賀記』<sup>1)</sup>には、「吉見弘信の時、吉賀大井谷三浦何某、青原柳村始て紙を纏、其た鹿紙にして紙子又は反古の如し」(上巻)とあり、同下巻の下領組々譜における大井谷村の記述中にも「正長年中」のこととして、同様のことが記されている<sup>2)</sup>。

また同じく柿木村の記述の中に、松龍山崇泉寺の説明として「元応仁文明の頃山口大内家より…寺を建立、琳聖寺と云」との一文がある。これをうけて『柿木村誌』第1巻では、琳聖寺建立を三浦氏一族が大井谷へ入ってきたことと関連づけてとらえようとしている<sup>3)</sup>。

その当否を判断する材料は、今のところ見あたらない。ただ確実にいえることは、江戸初期までに既に大井谷がある程度まで開発されていたということである。

問題は、その後どのような変遷をたどって現在のような景観になったか、である。しかしそれを具体的に明らかにする史料は、ほとんどないといってよい。

ここで少し史料の残存状況について触れておくことにしよう。現在、柿木村教育委員会に大井谷村の名寄帳<sup>4)</sup>が数冊保管されているものの、寛保2年(1742)のものを最後に、地租改正後に作成された「地租名寄帳」まで途絶えてしまう。つまり約140年間は、史料的にまったく空白の状態にある。明治4年(1871)の「萬手鑑」(津和野町郷土館蔵)に、大井谷の村高(古高・新高・引高等)が所載されているが、それも寛保2年段階の集計とは誤差を生んでいる。つまり江戸中・後期の状況は、まったく把握できないのである。

また明治期以降も、柿木村教育委員会所蔵の役場文書の中に、たとえば「農商之部例規」など勧業関係書類も現存しているが、村内全般の統計や記述がほとんどであり、大井谷地区の状況や他地区をも含めて棚田農業の姿を示す史料は望めないのである。

こうしたなかで、戦後の農地改革期の農地委員会・農業委員会関係書類に地区別・農家別の貴重なデータがあったり、同村役場で現在なお使われている「土地台帳」(「地租名寄帳」をベースとする)が存在する。また広島大学附属中央図書館に中国五県土地租税資料が所蔵されているが、そのなかに地租改正時に作成されたと思われる柿木村の絵図があり、幸いなことに大井谷の絵図も残されているのである。

このように極めて史料が限られているのであるが、いっぽうで貴重な史料が存在しているのも事実なので、これらを用いつつ大井谷の景観についての歴史的変遷をある程度推測していく作業は可能かとも考えられる。同時に明治期以降の土地所有状況やその推移、地主小作関係など社会的・経済的側面の一端を明らかにすることも、また可能であるといえる。

ただし、上記の史料(絵図・データ)はいわば二次元(平面)的な情報であり、現実に営まれている三次元(立体)的な棚田での農業労働のようすをくみ取ることはできない。棚田の歴史的変遷を明らかにするには、本来三次元的な考察を加えねばならない。文字史料によるその欠を補うために、前章の現況調査の結果や、聞き取りなどを援用して、できる限り三次元的考察を試みてみたい。

## 1 前近代における歴史的様相

### (1) 歴史的景観の形成

津和野藩では、坂崎氏時代の慶長7年（1602）に行われた検地で把握された田畠及び龜井氏になって行われた寛永14年（1637）検地時の田畠は「占田」「占島」（その高が占高）とされ、以後元禄4年（1691）までの開発田畠は「年々新田（島）」、同年（辛未）以後の新田畠は「未以来新田（島）」と区分されている。<sup>10)</sup>「萬手鑑」によれば、大井谷村の慶長期の古高は田畠あわせて80石5斗、寛永検地の際の古高は114石1斗2升（面積にして20町4反歩余）となっている。

この30石余の古高増加は、1つに坂崎氏検地と龜井氏検地の基準の差によるものと、2つにこの間の開墾（開墾奨励）によるものであろうとされている<sup>11)</sup>。また「萬手鑑」によれば、その後の新高をあわせて合計155石8斗9升（面積にして26町7反歩余）とされてるので、いずれにしても帳簿上では寛永検地までに江戸期開発地の大半が開かれていたことになるであろう。

ただし「萬手鑑」では、155石余のうち、12石6斗8升弱は「年々永杏」「御延杏（十年杏）」として「万引高」に算入されていたように、藩公認の荒れ地とされていたのである。もっとも、実際にはそれ以上の田畠が荒れていたものと考えられる。

たとえば寛永14年「大井谷村田方人別名寄帳」（写）の古田のみの面積を集計すれば10町5反9畝余となるが、ほぼ100年後の寛保2年（1742）段階では7町6反9畝步（表2-1参照）と、約3町歩ほど減少しているのである。この間、最上等級の麦出（石盛1石3升）が2町2反4畝から1町2反5畝へ、上田（同1石2斗）が2町5反3畝から1町4反3畝へ、中田（同1石）で4町2反から3町4反4畝へと、それぞれ1町歩ずつ減少している。下田（同8斗）は1町6反7畝から1町5反7畝とあまり変わらないので、上位の田で3町歩が消えたことになる。これらは山崩れなどさまざまな災害などによって、復旧の見通しが立たず耕作放棄に追い込まれたものと考えられる。

「萬手鑑」の大井谷村分の引高計12石6斗余のうち、古高は5石1斗余、面積にして5反2畝余となっている。しかしいま見たように、現実には寛保2年段階で既に3町歩減っていたにもかかわらず、5反余しか荒れ地と認められていないのである。寛保以後の状況がどうなっていくか判明しないので確定的なことはいえないが、現実的に耕作放棄に追い込まれた田畠は、藩が引高を認めた荒れ田畠よりはるかに多かったことはまちがいないだろう。その分は結局村全体で負担せねばならず、最終的には個々の農民に割り当てられたのである。

ともあれ、大井谷など棚田地域ではせっかく開いた田畠が山崩れなどで耕作放棄に追い込まれる事態が、かなり頻発したものと思われる。もちろん平地農村であっても川成り・山成りのように耕作放棄をもたらす危険はあったが、谷において山へ向かって開かれていくほど、山崩れなどの災害に遭う危険性はより大きかったと思われる。その意味で、谷の開発はまさに自然との戦いであったといえるだろう。現に寛保2年（1742）段階の田ですら、古田・新田あわせて56筆・3町2反9畝弱が崖で消されており、耕作放棄に追い込まれていったことをうかがわせるのである。

なお表2-1によれば、少なくとも寛保2年段階で残っていた田のうち、過半は既に寛永期までに開かれていたが、その後も17世紀後半の寛文～元禄期に當々と新田が開かれていたことがわかる。

表2-1 江戸前期における新田開発のようす

	古田	年々新田			未以来新田			
		寛永14(1637)	承応3(1654)	寛文5~8(1665~68)	天和2~3(1682~83)	元禄元(1688)	元禄5(1693)	享保5(1721)
麦田	12.5			0.0				
上田	14.3							
中田	34.4	1.0					1.8	
下田	15.7	1.2	8.7	16.8	18.2	1.4		
下々田						0.3		
合 計	76.9	2.3	8.7	16.9	18.2	3.2	0.3	
累 計	76.9	79.2	87.9	104.7	122.9	126.1	126.5	
一筆当たり平均面積 (歩も十進法で表示している)								
麦田	0.69							
上田	0.68			0.03				
中田	0.72	0.35				0.15		
下田	0.60	0.21	0.28	0.38	0.55	0.23		
下々田							0.16	
平 均	0.68	0.25	0.28	0.38	0.55	0.18	0.16	

(典拠) 植木村教育委員会蔵、寛保2年「大井谷村田万名寄帳」による。

表2-2 明治前期に存続する寛保2年段階のほのぎ(推定含む)とその面積(反)

古田	古畠	年々新田			未以来新田				
		年々新田	年々新畠	未以来新田	年々新田	未以来新畠			
さこ	0.3	口ヶ谷	19.0	大さこ	2.1	大迫	1.0	大きこ	0.5
岡田	5.1	城尾	0.9	田道	0.6	大谷	0.5	屋たい	0.3
ほしがみ	1.6	ほしかみ	0.3	大谷	0.2	城尾	0.6	もり下	0.5
中切	15.5	橋詰	2.5	岡上	0.9	田ノ迫	0.5	もり脇	0.3
畑	1.2	畠	1.7	口谷	3.0	畠	0.4	かど	0.6
引明	3.9	屋ない	12.2	向田	0.1	元ノ谷	0.1		
杉ヶ谷	6.9	河原畠	1.4	はしかみ	1.5	立山	0.1		
くみち	0.6	ふろか谷	1.7	畠	1.4	屋たい	0.4		
谷	0.3	柳あき	0.1	屋たい	3.6	もり本	0.7		
寺原敷	2.4			引明	1.2	かね	0.1		
堂ノ尾	0.3			ふろ口	0.9	河原畠	0.3		
				杉ヶ谷	2.5	されか谷	4.0		
				七十尻	1.1				
				八十尻	0.2				
				谷	2.5				
				柳瀬	1.3				
判明率	48.1%	判明率	31.4%	判明率	43.3%	判明率	62.0%	判明率	53.9%
その他	41.1%	その他	87.0%	その他	30.2%	その他	5.3%	その他	1.8%
計	79.2%	計	126.7%	計	53.3%	計	14.1%	計	4.0%

(典拠) 寛保2年「大井谷村川方名寄帳」「島方名寄帳」と広島大学附属図書館蔵(中国五県土地租税資料)「鳥根県鹿足郡柳木村絵図」中の大井谷分による。

表中ゴチックは一致するほのぎ、それ以外は推定されるもの。なお判明率は筆数ではなく、面積により算出した。

表2-3 江戸期~農地改革期に至る大井谷田畠面積の移り変わり

	名請人・所有者数	田			畠		
		反別(反)	筆 数	一筆平均	反別(反)	筆 数	一筆平均
寛保2(1742)	30	138.7	261	0.53	140.8	307	0.46
明治初(1880代?)	54	141.9	391	0.36	176.9	496	0.36
昭和20(1945)	51	133.0	363	0.37	26.0	143	0.18

(典拠) 寛保2年「大井谷村山方名寄帳」「大井谷村島方名寄帳」、「地租名寄帳 白谷乙」・昭和20年「耕作農地申告書」による。

このように、谷の開発は新田畠の開発と災害等による消失、復旧と耕作放棄をくり返していたことが想定されるのである。

ところで同表下段を見るならば、1筆当たりの新田面積は古田に比べて小さくなっている点も注目される。古田の7畝前後に比べて、新田では2~3畝とほぼ半分以下になっているのである。おそらく条件のよいところはすでに開かれており、新田を開くには少々条件が悪くても厭わずに開いていったということであろうか。

これらの古田・新田が現在のどこに相当するかについては、寛保2年段階と140年後の明治前期との間にホノギ（小字）がかなり入れ替わっており、また明治期にホノギが残っていたとしても地番までは対照できず、特定することはほとんど不可能である。やむを得ず寛保2年に出てくる田畠ホノギのうち明治期に存続したものを、「古田（島）」初出、「年々新田（島）」初出、「未以来新田」初出に区分して、ホノギ全体に色づけしたのが図2-1である。ここでは地番・面積を無視して塗りつぶしているため現実の対応にはならないし、表2-2のように判明する面積はほとんど半分ないしそれ以下であるため、極めて限界がある作業といえる。

そのことを前提に同図を見ていくならば、古田は岡田・中切・引明ヶ迫・杉ヶ谷などいわば谷の中心に拡がっていたと見ることもできる。おそらく判明しない半分強の古田部分は、原ノ田・小弘田から本田など、開発当初の歴史を感じさせる重屋・向屋敷などのホノギを取り巻く一帯（図の中心部分）に集中していたものと思われる。いっぽう古畠はヤタイ・口ヶ谷・大迫・城ノ尾・橋詰など山ぎわの箇所に開かれていたことも推測される。

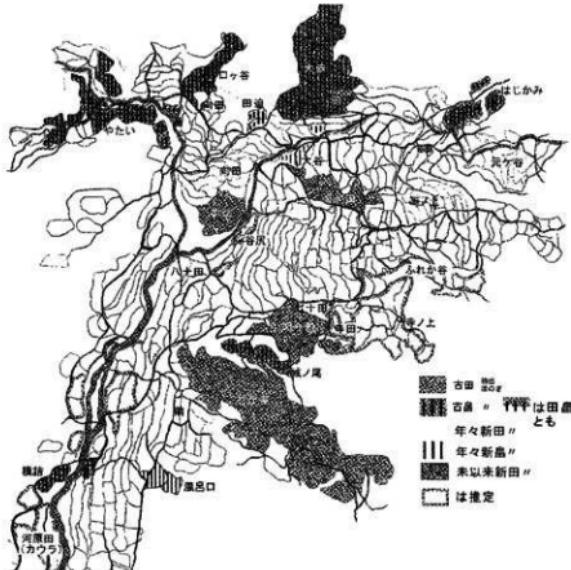


図2-1 古田～未以来新田初出ほのぎの対応エリア

表2-4 持高階層(寛保2)

	員数
石以上～未満	人
~1	2
1~3	4
3~5	7
5~7	9
7~9	4
9~11	3
11~13	1
13以上	0
合計	30

(典拠) 前掲寛保2年田  
方・畠方「名寄帳」  
による。

(注) 田畠持ち高の合計値  
で示した。

いっぽうで、外延的に括っていくことは既に限界に達し、分筆などによってより耕地がより細分化されていったことを示しているといえよう。このことは、農業そのものがより労働集約的なものになっていったことを類推させるものである。寛保2年段階の名請人30名から地租改正段階の所有者54名への増加は家数の増加をうかがわせるものであり、その増加を支えたのは集約的な農業による土地生産力の増大であったとするのは考えすぎであろうか。

## (2) 18世紀前半における土地所有の状況

表2-4は、寛保2年(1742)段階の持ち高を階層別に示したものである。田畠あわせて10石を超えるのは1人であり、全体に極めて持ち高が少ないといえる。ことに5石未満が計13人と全体の半分に近い数字を示している。そのこと自身は棚田地域の特質とまではいえないが、いずれにせよ生活していくにもかなり厳しい状況であったと考えられる。

なおここで田畠の高をあわせて表示しているため、田畠別の所持状況はわからない。そこで散布図にして示したのが、図2-2である。これらのデータによる限り、相関係数は46.4%とあまり高くなく、全体に田の所持高が大きいからといって畠の所持高が大きいわけではない。

ただそれでもゆるやかな相関は認められ、田5石で畠1石4斗弱、田10石で2石1斗強となるような傾向線を引きうる。つまり石高でいえば全体に田の所持が中心であり、明確な相関性は認められないものの、ゆるやかな形では田の所持高に畠の所持高が比例する傾向性も指摘できるのである。

おそらく屋敷地の周囲ないし水利に不便な山ぎわ・山腹に畠を営み、主として大根・菜類など自給作物を中心に作業を行っていたものと考えられる。また津和野藩では吉賀地方に対し半紙・中保(ちり紙)を貢納させて専売制を実施していたこともあり、「萬手鑑」にも大井谷村で「紙漉船拾七艘」あって半紙60丸・中保4丸余を納めていたことあることから、山ぎわの畠等に楮を種えていたと思われる。

「年々新田(島)」「未以来新田」は、古田・島とホノギが重なるケースも多いが、大谷・田追・向田・八十田など大井谷川に面した箇所を開くか、ないしは岡ノ上・元ヶ谷など山を開く形で開かれていたものと推測される。

ただし、先に述べたように、こうして開発されても古田すら姿を消したように、常に荒れる危険が潜り合わせであったわけであり、谷の景観が安定したわけではなかったと考えられる。

しかし表2-3を見れば、このような不安定さのなかでも地租改正までに菅々と田畠の維持・復旧・開発が進められていったことがわかる。ことに畠のほうは3町歩の増加が見られるのである。同時に、この間筆数が極めて多くなっている点にも注目される。田では面積の増加が3反ほどに過ぎないので対して、筆数では130増加しているのである。畠も同様であり、このため田畠とも1筆当たりの平均面積がかなり小さくなっているのである。

これは江戸中・後期において田畠の維持・復旧・開発が行われ

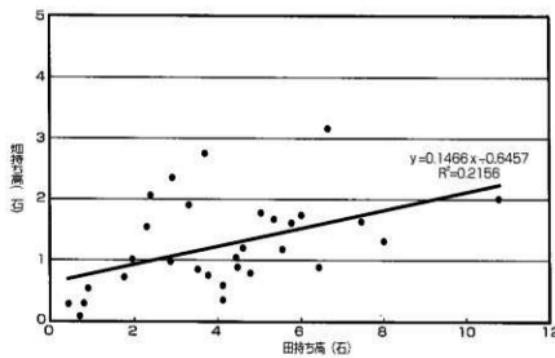


図2-2 田畠所持高の状況（寛保2年=1742年）

ともあれ江戸時代における大井谷村の農民らは、不安定な生産力条件及び藩による収奪のなかでも、田畠を開いたり災害・自然条件と戦いながら日々と農業を営み、より集約的に発展させていったといえるだろう。持ち高等の状況を見ても決して楽な状態ではなかったと考えられるが、いっぽうでそうした不利を乗り越えていくバイタリティも感じられるのである。

## 2 近代における歴史的様相

### (1) 明治期以降の棚田景観

#### ① 明治前期の棚田

はじめに述べたように、地租改正の作業にともなって大井谷の絵図も作成されている。この絵図は1筆ごとに田畠・宅地の色分けがなされており、当時の景観を極めてよく復元しうるといえよう。この絵図に、実際の航空測量による等高線データを修正しつつ重ねたのが、口絵の図と等高線図である。

絵図中赤い線は道を、青い線は川・水路をそれぞれ表している。現況と比べるならば、ループ橋とそれにつながる道路はもちろんそれ以前の道ともかなり異なっている。当時の道は川沿いから山ぎわまでまさに田畠のあいだを縫うように走り、またそこから細かな道が枝分かれして縦横につながっている。これは牛や苗・肥料等ないしは収穫米を運び入れ、運び出すために、細かく各田畠をつながっていたのである。

もっとも昭和37年(1962)に作成された公図第33-3号(柿木村役場蔵、この図はここでは掲げていない)と比較してみると、川も道もあり変わっていかなかったことに驚かされるのである。景観面の大きな変化ということからいえば、実は明治前期から(したがって江戸後期から)高度成長初期のころまであまり変わることになるのである。ということは、景観における劇的変化は高度成長以降にもたらされたといえるだろう。おそらく農業用の小型機械の導入・モータリゼーション等による農作業・生活様式の大きな変化が、その要因であったと考えられるのである。

絵図に戻り耕・宅地を見れば、田は黄色、畠は茶色、宅地は薄い茶色に塗り分けられている。先に表2-3で明治前期までに畠がかなり増えたと記したが、現況に比べてかなり茶色=畠が目立っていると感じられる。特に宅地=屋敷を潤む場所に多く畠が存在しているのが目立つのである。いっぽうでヤタイ・口ケ谷・大迫といった山ぎわの畠がこの時点できなり水田化されており、これは江戸中後期の間に進んだ事態であっただろう。その分元谷川から山中へ入っていくアサカ溢(麻ヶ溢=図中ヤタイの下)や寺ノ上、杉ケ谷など山すそ・山腹へ向かって畠が開かれていたのである。

さてこの絵図と等高線データを組み合わせて、その一部を3次元的に表現したのが図2-3~5である。もちろん歴史的現実の景観そのものではないが、かなりそれに近いものであると考えられるのである。

まず図2-3では、ホノギ「前」の上空あたりから谷を見た形になっており、右手前に杉ケ谷・城ノ尾の畠が見える。城ノ尾の尾根の向こう側に引明ヶ追・小泓田・原ノ田などの田が広がり、そこから板をのばる形で屋敷(宅地)と畠が続き、右手上の本田・岡ノ上あるいは奥まった所にはじかみの田が見えている。その周囲の山腹には畠が作られている。大井谷川をはさんで大迫へのぼっていく所は畠が中心であり、手前の大井谷川・元谷川が合流する地点までの向田・中切あたりは田が広がっている。

この視点に一致する写真を撮影できないので、現在のループ橋上から撮影した現況の姿が写真2-1である。元谷川を收めることはできなかったが、地形的には図2-3と対応はできるであろう。



図2-3



図2-4

先にも述べたとおり、ループ橋から続く道（画像右中央から中心へ向かう）はもちろん元谷川をまたぐ橋（左下）からのぼっていく道も、図2-3にはない。また左手の家や集会所・剣玉神社も、もともとなかった。更に写真2-1に見られる畑も現在は多く田に変わっているとともに、山ぎわや両川合流地点より右手の耕地も現在は耕作放棄されているところがめだつ。

図2-4は、合流地点南側の上空から北側を見下ろす鳥瞰図となっている。やはりこの角度から撮影するのが困難なため、向田・中切の辺から北東を望んだのが写真2-2である。ここでも山ぎわの田畠において、現在耕作放棄が進んでいるのがわかる。

これらを見ると、どういう場所があとから開発され、条件悪化等によってまず耕作放棄されいくのかが推測されるだろう。



写真2-1



写真2-2



図2-5



写真2-3

また大井谷へ入ってまもなくのあたり、おそらくホノギ鍛冶屋敷の上あたりから合流地点を望んだのが、図2-5である。これに対応すると思われる現況写真が、写真2-3である。写真的中央からやや右上にループ橋がかかっているが、ここへと続いていく道が左手山すそを通っており、図2-5に見られる山すその田畑が道へ変わったことがわかる。

写真中央下に写っている道は、図2-5の川岸を通る道の名残りであることがわかるが、この道幅はかつて（つまり高度成長期初めまで）のものであったことを示している。この道幅を、人々は牛を連れ、あるいは肥料・米俵等を担いで上り下りしたのである。

表2-5 年代別の各地目変換状況

	1889~1909	1910~29	1930~49	1950~69	1970~80	計
田	→畠	1	1	6	1	9
	→宅地	1			3	4
	→山林原野			2		2
	→道				24	24
	→堤塘				26	26
	→墓地他				0	0
計		2	1	8	4	65
島	→田			1	1	2
	→宅地	2	5	2	1	10
	→山林原野	1		84		85
	→道				11	11
	→堤塘				2	2
	→墓地他				1	2
計		3	6	87	2	112
荒地 (田畠)	→田					0
	→畠					0
	→山林原野	7		8		15
	→道					0
	→堤塘					0
	→墓地他					0
計		7	0	8	0	0
山林原野	→田		1			1
	→畠	1		1		2
	→宅地				1	1
	→道				10	10
	→堤塘				12	12
	→墓地他				1	1
計		1	1	1	1	27

(注) 出典は前表に同じ。

1筆の土地が2回以上変換する重複分も4件あるが、1つのデータとして計算した。なお宅地からの変換6件は、ここではあげなかった。

放棄されていたのである。地租負担とのかねあいからこの段階で早々に地目変換の手続きがとられたのであるが、明治初期の段階でもなお荒田・畠が出ており、中期になんて回復の見込みが立たず山林原野に復すという不安定さは免れなかつたのである。

畠(島)から宅地への転換では、明治39年(1906)に2件、同43~4年(1910~11)に3件と明治末年に比較的集まっているが、これらはみな宅地に隣接する畠地が宅地になったものである。1畝未満から5畝強までさまざまであるが、いずれにしても屋敷地を広げる動きがあったのであるか。

ただ何より目立つのが、第二次大戦前後の時期に畠から山林原野に転換するケース計84件である。このうち59件は昭和5~6年(1930~31)を中心とする戦前期であり、残る25件は終戦直後の21~23年(1946~47)である。実際の事態が先行していたとすれば、大正末年から昭和初年及び第二次

## ② 景観の変容

こうした明治前期の景観が、いつごろどのようにして変わっていったのかについて、手がかりを地目変換のデータに求めてみたい。

表2-5は、「土地台帳」から地目変換に関するデータを拾ったものである。ただし地目変換は、今までもなく登記の手続きを経て台帳にあらわれるものであるから、実際の転換はそれ以前に先行していたであろうし、現実には転換しても台帳に載らないケースも多かったと考えられる。そうした限界をあらかじめ踏まえておく必要があろう。

さて、地租改正からそれほどたたない明治22~3年(1889~90)時点では既に荒田・畠から山林原野へ転換しているのが7件あったというのは注目される。この時期の地目変換としては突出した数字であるが、おそらく地租改正時に既に耕作

大戦中の二度にわたる時期に耕作が放棄されたのであろうが、これらの大半は山腹でも最も山側ないし川岸など耕作条件が最も悪いところであり、その面積は前者が1反9畝、後者が3反9畝余、合計9反弱におよぶのである。前者の要因は不明であるが、後者は明らかに戦争の影響といえるだろう。おそらく労働力不足によって、条件が最も悪い畑からまず耕作放棄が行われていったということであろう。

ついで目立っているのが、ここ最近30年ほどの間における田畠及び山林原野の道・堤防への転換である。これは昭和48～9年（1973～74）と同58～9年（1983～84）の2度のピークがあり、道の設置・拡幅に關わるケースが中心であった。

このように大井谷棚田の景観の大きな変化としては、大正末～戦時期における畑の耕作放棄と最近30年ほどの間における道の設置であったといえる。ただし、畑から田への転換が台帳に現れるのは全体でも2件しかなく、畑から水田へというケースは登記手続きが行われず実態だけが変わっていったものと考えられる。

加えて同表には現れてこないが、先の写真のように、近年農業の担い手の高齢化とともに耕作放棄が進みつつあるのが現状である。今後の状況が危惧されるところである。

ともあれ、以上見てきたように山腹・山ぎわないし川沿いの場所など、耕作条件が決してよくないところが、田畠が開かれるときにはつぎつぎに開かれていき、逆に労働力不足などになるとまっさきに放棄されるという盛衰をくり返してきたといえるだろう。こうした状況が、そのときどきの景観を作り出してきたといえるかもしれない。

## (2) 耕地の所有状況と棚田の農作業

## ① 明治前期の耕地所有

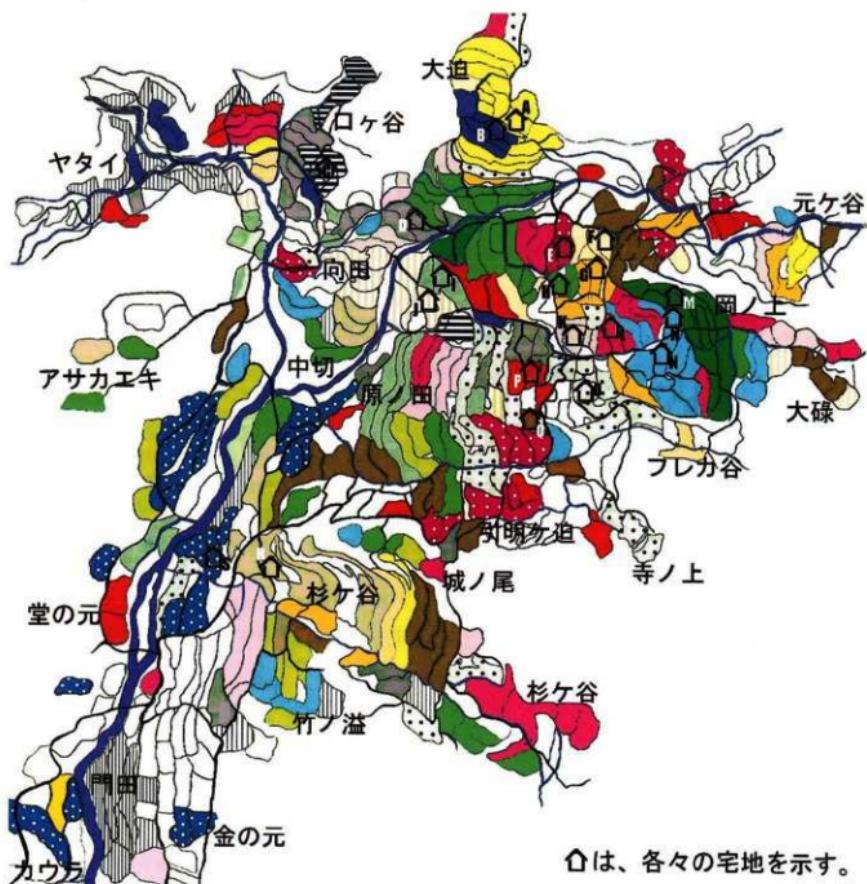


図2-6 大井谷における田畠所有状況【抄出】(明治前期)

図2-6は、明治前期の絵図（白団化したもの）に地租名寄帳のデータをおとし、農家別に所有地の分散状況を示したものである。ただし全データをおとせば極めて錯雜したものになるため、20例をピックアップして例示した。このうち1件（黒タテ線の模様）は隣町日原町の地主佐々木家の所有にかかるものである。残る19件（A～S）が大井谷に宅地（屋敷）をもつ農家となっている。

この図を見れば、耕地所有に2つのパターンがあることがわかる。1つは比較的まとまった形で所有するというものと、2つに1筆ないし2～3筆を分散して所有するというものである。

たとえば、農家A（黄色）は大迫・大迫下にまとまった耕地をもちつつも、元ヶ谷に2筆、杉ヶ谷に1筆の田を有していた。またM（緑）もホノギ岡ノ上・本田あたり、屋敷の周間にまとまった耕地をもっていたが、大井谷川筋のホノギ大谷に2筆の出をもっていた。

J（うす茶タテ線）もホノギ下溢の宅地周辺に畠やホノギ門田の田、さらに川をはさんで向田にまとまった田をもっていたが、同時に原ノ田の畠を1筆、大碌に2筆の田を有していた。H（黄緑）も屋敷はホノギツ岩にあり、裏手に畠、谷を下る形で岡ノ田・久保屋敷にまとまった田をもっており、また大井谷川対岸の大迫尻・大谷・向田にも一定のまとまった田畠を有していたが、同時に中切に田畠1筆ずつ、八十田の出1筆、アサカ溢の畠2筆、小弘出に出2筆と引明ヶ迫の出1筆、その他城ノ尾・杉ヶ谷などに田畠7筆を分散させていた。

これだけ分散すれば、往復にもかなり時間を要し、農作業の効率も極めて悪かったであろう。特にL（ピンク）やQ（茶色）などは、いっそう分散傾向にあったため、ひとつひとつの作業が大変であったと思われる。そもそも半地での移動とは異なり背中に荷を負って狭い道を上り下りしたのであるから、なおさらである。

ところで、村外地主の佐々木家の土地所有を見れば、門田・風呂口・竹ノ溢（畠）や杉ヶ谷に接する柳ヶ迫、川岸のハダ（荒田）、ヤタイに集中している。これらは、先に見たように耕作条件がよくなく耕作放棄されやすい場所であったといえる。さまざまな経済変動で土地を手放さざるを得なくなったりとしても、村外の者に対してはまずこうした場所を手放し、条件のいい中心的な耕地は容易に放さなかったのであろう。

ともあれ本来的にはまとまった耕地を有していたものと思われるが、歴史的な経過・さまざまな経済変動のなかで分散した耕地の所有が現れてきたと考えられる。その意味で、こうした耕地の所有状況はまさに歴史的所産であった。

## ② 畠田での農作業

平面的に見ても農作業が大変であったと思われるが、三次元的に見ればなおさら労働はきびしく非効率であったと思われるが、こうした点に関して残された文字史料はない。そこで聞き取りによって、そのあたりを補っておきたい。

三浦フミヨ氏<sup>66</sup>は、むかし金肥を下の井手ヶ原までおりて貰い、約20kgの肥料を担いでのぼってきたという。その間かなりの坂をのぼらねばならなかつたが、それだけではなく道が狭かつたためその点でもこの地域独特の苦勞があつたようである。特にそれは牛をつれて歩くときに、なおさら大変であったようである。それについて、三浦シゲ子氏<sup>67</sup>が興味深い話をされている。

今のようにねえ、道でも幅が広かつたらえんじゃがね、こないねえ小さいん  
じやけえ、牛のような大きなんが通りやくずれる所があるんですね。そねい

な所は石でもちょっと動きやバーッと飛び上がるけんね、牛が。じゃけえ安心して網もっとられんんですよね、牛は力があるけえねえ…。

つまり狭い坂道で牛が暴れ出したら女性の力では抑えきれなかったために、牛をつれて道を歩くのが実にこわかったというのである。

その牛の飼料にする草を刈るのも、また重労働であったようである。

今は牛がおらんからええけど、昔牛がおるころにあンタ、ワタシら毎朝草刈りよったけえね。草を刈って戻って、それから4頭ぐらいおるけえ、なに20把くらい刈って戻ったんじゃ1日ないですけえね。ほいじゃけえ2へんにして24把ほど刈らにゃあ牛に喰わすほどなかったですよ。

山へ行きあちょっとええ草がありあ、みな刈って荷子（負子）にのせて、船りにあ負うて帰るしね。で、行く時きあ肥料でも振ろうと思うたら何いね、荷子へのせてまた担うてあがる訳いね。（何も担がずに）ただ行ったり来りすることはない下さいね、ほとんど。あれでここ（大井谷）の人は腰も曲がるし、足も痛うなる下さいね。

（三浦シゲ子氏）

また秋に稲刈りのあと、飯米分を除いて組合などへ米俵を出す時には、下まで担いで出さねばならなかった。

1俵は60kgでしょう、そりや正味じゃけえね。ほいで（荷子の重さなどあわせて）17荷子（63.8kg）から多いので18荷子（67.5kg）ありよった。ワタシらあの島まで6俵くらいしかよう担がんかった、…6回（に分けて）。それ以上は足が悪いんでよう担がんかった。6回担うたら足が疲れて足が立たんようになる。…

（全部で）24～5俵から多いときで30俵下へおろしよった。（三浦フミヨ氏）そうした条件のなかで、集約的な農業を勤勉にこなしていた。

田の草も、はあ今のようにはない、4回取りよったですけえね。一番終わりのころにはねえ花が咲いてね、田の草を取るには花が落ちるようなのを取りよったです、昔はねえ。

今の人のように草は放らんけえね。足で踏み込んでね、土の中入れてね、草が腐れりや肥やしになるでしょう…。

（三浦シゲ子氏）

水の管理でも同様である。

だいたいね、水がよくあたるように見なかつたらダメ下さいね。水あたりが悪ければ、天気がよかつたらイネが枯れる所がありますけんね。またその反面あたりすぎると、大井谷の水は冷えてイネができることがありますけんね。水がぬくもるから。…秋になつたら同じくらいになりますが、二番草のころまでは境がつきますいね。

（三浦シゲ子氏）

棚田で山水を利用する情景ならではの話である。

稲刈りでも上下の運搬があった。

昔はねえ、10月入らにやねえ、10月の中ごろくらいから先じゃったね…。そい

で昔はみな刈ってハデ（稲架）にしようとしたのですけれどねえ。乾いてから収穫するんじゃけえ。それでゴンゴラゴンゴラ足で（脱穀機を）踏んで扱ぐんじゃけえ、晩にも扱いだり、朝も早うおきて扱いだり…

（三浦フミヨ氏）

朝間時間早うおきてね、（ハデから運んできた稻を）昼までにはおおかた扱いてしまうんですよ。ほいで次のをね、乾いたらまた庭に入れるんですよ。

（三浦シゲ子氏）

いっぺんには入らんけえね、家へ入るほど入れておいてねえ、晩から明けの昼までにきれえにして、またこう持ってくる…毎日それをして…

（三浦フミヨ氏）

このように刈った稻は田で稲架に干して、乾いたものから運び入れて脱穀していた。その際たくさんの稻束をもって狭い坂道を何度も運ぶのは、想像するだけでも大変である。まして遠く離れた田から運び込むのは、かなり骨の折れる作業であったと思われる。

しかし、本入たちは田の上り下りは当たり前のこととしてその苦労はないと思ふなく笑う。

（上り下りは） 大変でもなあが、畔のところが広かったら歩くのに十分じゃが、狭いところでねえ畔なみへあがったりするとねえ、ちょっと調子が狂いますね。

（三浦シゲ子氏）

棚田の地域で生きてきた人々のバイタリティを見る思いである。

両氏より…世代若い村上鶴子氏<sup>註</sup>のころになると、動力脱穀機が出はじめており、しかも各田へそれを持っていって作業するようになっていたという。

田で扱ぐのはええけどねえ、自脱（自動脱穀機）いうてねえ、何と重たい機械（100～130kg）があるんですねえ。それをねえワタシら若いときじやけえねえ、主人と2人で扱ぐのよ。…それをこうやって棒を刺して（棒にかけて）扱ぐんじゃが、ワタシにはねえ「棒の長いほうを掛け」いうんじゃ。主人が機械に近づいてね扱ぐんじゃが、それが坂道をこうがるんじゃけえね…、後ろにさがるんじゃけえね、それを上の出んぼへ扱あであがれいんじやけねえ、まあほんとにせんなかったねえ、ありやあ。

平地で持つても重たい機械を、肩に担いで上り下りするのも大変だったであろう。棚田では機械化すらも、別の重労働をもたらしたといえる。

### ③ 耕地所有と水利・畜道

図2-6のうえに、三浦一美氏が丹念に調査された現況の水利及びかつての畜道（推定）のデータをおとしてみたい（この調査データそのものは、前章を参照されたい）。

図2-7はその一部を拡大したものである。宅地（家マーク）・「丘」は明治前期のデータによるものであり、道・水利の状態とあわせて現況と違っているのはいうまでもない。加えて各家の田畠が実際には何枚にも分かれており、三浦氏の現況調査は田1枚1枚についてなされていることから、ここでは地帯と対照させて各筆ごとにまとめて地図上におとすという作業を行っている。それゆえ多少推測による危険も否定できない。また欠印の場所は実際の場所を示すものではなく、あくまで流れの方向だけを示したものである。

そのことを前提に図2-7を見ていけば、まとまった耕地の所有と特に水利は一定何らかの関係がありそうである。川や水路・湧水からの取水はもちろん、他人の田から水を受ける場合でも、だいたい自分の田全体へ水を回した後にたとえば他人の田へ水をおとすというパターンが見られるのである。

なお45頁で述べられたとおり、当て越しの最終の田は水を受けるだけで、排水先をもたない田がほとんどであるという。おそらく地下へと水が落ちているのであろうが、こうしたパターンの田が明治期も見られる。たとえば図2-6でいうN(水色)の田(ホノギ本田を中心とする)では、M(緑色)の田→L(ピンク)の田を経て受けた水を順に自分の田に回しているが、屋敷のとなりの田でその流れは途絶えている。これは、こうした一例であろう。

ともあれ先のパターンについていえば、E(紫色、白の水玉)のホノギ与五郎田の田(図下)では、湧水と水路から取水してO(薄グレー、黒の水玉)の田に水を回すとともに、その下の田で水路から取水しやはりOの田に水を回しつつ、自分の田に水を回している。OはEから受けた水を回

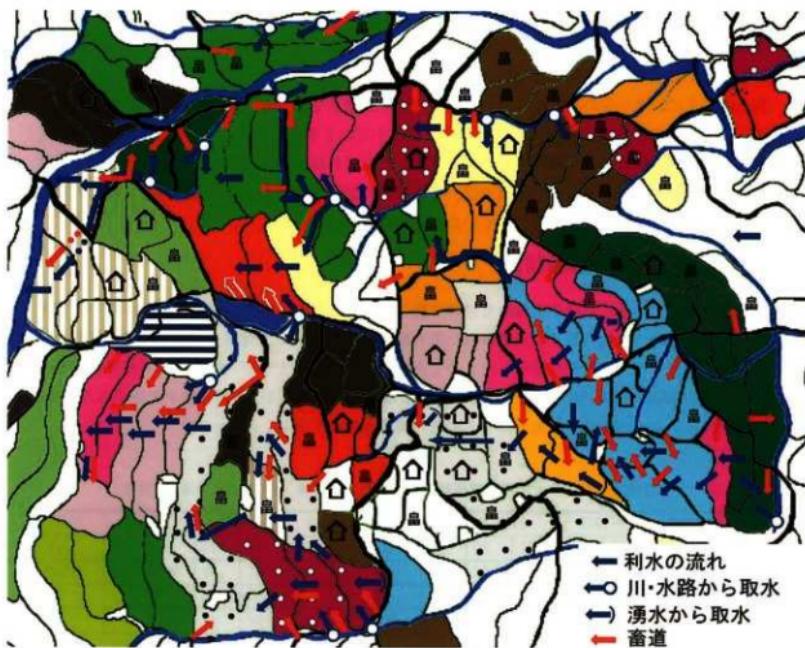


図2-7 田畠所有と水利・畜道(明治前期)

しJ（薄茶、タテ線）の田（ただし当時は「島」であったため、当時この水の流れがあったかどうかはわからない）を経て再びその下のホノギ原ノ田の田に入れ、もう1筆の自分の出に回した後K（藤色）の出におとしている。

このように一定程度は自分の田全般に水を回す傾向も認められるものの、はじめに他人の田から水を受ける場合もあるし、隣に自分の出がありながらそこは他人の田から水をうけそのまま別の人の田に水をおとすパターンも見られ、極めて複雑であったといえる。これは三次元的に見たときの地形的条件に左右されているものと思われる。

現在でも水については他人の田から水を回してもらうということは、少なからずあるという。水が少ない年に「早く水を回してほしい」という要望が出ることはあっても、水をめぐるトラブルはまず聞いたことがないという（三浦満氏談）。

おそらく谷で生きていいくうえで、お互い様といいわば共同体的関係のなかで処理されてきたことなのであろう。

牛を田に入れる場合には、図を見る限り、ほとんど道から入れられるようになっており、あまり他人の田を通らなくてもよかつたようである。またそのように、道が歴史的に作られてきたとも思われる。しかし多少他人の田を通らねば牛を入れられないというケースもあったと思われ、当時Kの原ノ田の田はOの田を通らねばならなかった可能性はある。現在、道は整備されており、機械を入れる場合でも他人の田を通ることはほとんどない（同上）。

以上のように、水・牛の出入りにおいて自分の田で完結させようとする形の耕地所有の意識をかいみ見ることもできるが、現実にはそれだけではとうていすまない。まして土地所有そのものが、さまざまな経済条件によって移動することが避けられなければ、他人の田から水をうけること等は常態化せざるを得ない。そうした場面では、三浦満氏の談にもあったように、大井谷に住む人びとの間でのムラ=共同体的関係が機能していたと思われるのである。

### （3）土地所有権の移動状況

では果たして大井谷における土地所有権の移動はどのようなものであったのか、がつぎの問題となる。表2-6は「土地台帳」に所載された所有権の移動について、売買・相続・譲渡・買収の4つの事項に区分して、年代別に整理したものである。なお各筆の土地が一括して所有権移転する場合もあるが、同時にその一部が分筆されて移転する場合もかなりある。その件数を把握するために、同表①では各年代の右欄に分筆地に関する移転の件数を掲げてある。

表2-6① 大井谷地区における土地所有権移動の年次的推移（各欄右斜体数値は分筆分の件数）

	~1909	~1919	1929	~1945	~1955	~1969	~2001	合計							
売買	391	166	74	28	77	30	126	52	26	11	34	13	80	40	808
相続	493	248	17	4	143	57	134	63	110	49	161	64	641	320	1,699
譲渡	8	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	3		13
買収	2	0	0	0	0	0	21	21	74	32	14	12	108	105	219
合計	894	418	91	32	220	87	281	136	210	92	209	89	834	468	2,739

（典拠）柿木村役場「土地台帳」白谷分により作成。

表2-6② 大井谷地区における土地所有権移動推移の百分比・年平均件数（斜体数値は年平均件数）

	～1909	～1919	1929	～1945	～1955	～1969	～2001	合計
売買	48.4%	17.8	9.2%	7.4	9.5%	7.7	15.6%	7.9
相続	29.0%	22.4	1.0%	1.7	8.4%	14.3	7.9%	8.4
譲渡	61.5%	0.4	0.0%	0.0	0.0%	0.0	9.0%	0.0
買取	0.9%	0.1	0.0%	0.0	9.6%	1.3	33.8%	7.4
合計	32.6%	40.6	3.3%	9.1	8.0%	22.0	10.3%	17.6
								7.7% 21.0 7.6% 14.9 30.4% 26.1 100.0%

特にここで問題となるのは、売買・買取の2つであろう。

まず売買では全体で計808件あるが、そのうち明治中後期に391件、実に48.4%が集中している。年間平均件数でも、この時期17.8件と突出しているのである。この理由は定かではないが、資本主義化・市場経済化にともなって経済的にはむしろ弱者であった大井谷の人々に経済的変動が訪れたのかもしれない。

つぎに売買件数が多いのは昭和前半期で、昭和恐慌から第二次大戦の時期である。ただ年間平均件数7.9件という数字からすればそれまでの時期と大きな変化はなく、明治中後期ほどではなくとも、むしろ戦後の2.5件という状況との違いに着目するほうが意味があるであろう。つまり明治中後期は突出しているものの、総じて戦前は土地所有権の移動は戦後に比べてはげしく、年間平均件数でいえば戦後の約3倍の規模で所有権が動いていたといえるだろう。

またいずれの時期も、分筆ないし再分筆された極めて細かな土地所有権の移動がほとんど半分近くを占めるという状況であった。

買収について見れば、件数のうえで目立つのは第二次大戦後10年間と最近30年間である。前者は農地改革により農地委員会が買収を進めたものであるが、上の土地所有権移動の件数で昭和20年(1945)までの累計668件という数字から見れば、むしろ少ないようと思える。とすれば、戦前における土地所有権の移動は農地改革にからない性質のものであったのだろうか。この点は、のちに検討することにしたい。

後者の買収は、いうまでもなく道路・堤塘築造にかかるものである。

ともあれ大井谷でも土地はむしろ活発に売買されていたといえるであろう。しかも件数でいえば、半分が分筆・再分筆された極めてこまかき地片であったのである。その結果終戦直後の農地改革の洗礼をうけることになるのであるが、大井谷の場合は農地委員会の買収件数が極めて少なかったといいうる。その要因は、当地において展開した地主・小作関係のあり方と密接に関わっていると思われる。

### 3 農地改革期の地主・小作関係と農業生産力

#### (1) 農地改革直前における地主・小作関係

表2-7 農地改革期の小作地率

	自 作		小 作	
	田	畑	田	畑
筆数	229	116	111	24
反別	85.6	22.1	40.5	5.7
(反)	67.9%	79.6%	32.1%	20.4%

(典拠) 柿木村教育委員会所蔵「大字白谷 耕作農地申告書 柿木村農地委員会」による。

(注) 山林・原野・屋敷地・地目不明分・面積判認不能分については省略した。

表2-8 地主の地域区分

	村外地主		地区外地主		地区内地主	
	田	畑	田	畑	田	畑
筆数	17	8	25	10	69	6
反別	6.2	2.7	9.9	2.0	24.5	1.0
(反)	15.2%	47.3%	24.5%	35.1%	60.3%	17.6%

(典拠) (注) とも前表に同じ。

作関係の中心は、大井谷のなかでのものであったのである。

これはいったいどういう事態なのであろうか。表2-9によって、少しその事情を見ておこう。地主をA~Oとし(図2-6のA~Sとは全く関係しない)、小作人をa~pとして、それぞれ大井谷のなかでの自作田畑の面積をあわせて表示したものである。

たとえば、地主Bは田1反4畝、畑1反9畝を自作していたが、同時に田1畝を小作人aに貸していたのである。そのaは自身で田1反9畝、畑4畝を自作していた。またたとえば地主Mは4反2畝の田と5畝の畑を自作していたが、いっぽうで1反9畝の田を小作人l、m、n、jの4人に貸していた(その内訳は表示していない)。小作人lは田1反5畝・畑3畝を、mは7畝の田と1畝未満の畑を、nは4反7畝の田と7畝の畑を、jは6畝の田をそれぞれ自作していたのである。

これを見れば相対的に地主のほうが小作入雇よりも自作田畑の面積は確かに大きいといえる。小作人bやeのように自作地のない農家もあった。

しかし逆にその地主が、小作人になるケースもあったのである。地主JはAの田4畝を小作し、IはKの田のうち21歩を小作していた。また小作人nやoのように、地主層より大きな田畑を自作していたケースもあったのである。

これらの個々の事情までは判明しかねるが、時期が時期だけに一家の働き手が復員してくるまでの間、小作によって田畑を支えていたケースもあったかもしれない。あるいは零細な農家に小作させることによって、農家として自立させていたケースもあったかもしれない。いずれにしても、地

そこで柿木村農地委員会が作成した調査表にもとづいて、大井谷における地主・小作関係のあり方を検討しておきたい。表2-7は、各農家の耕作地のデータ中、地目・自作別などの不明分を除き、また親子関係(所有者と耕作者)と類推されるものを自作として、自・小作の筆数・面積を集計したものである。

面積で見るなら自作地率は、田が約68%、畑が約80%であり、かなり自作の度合いが高いといえる。この段階では畑の面積が減っているため、小作の中心は田であり、全体の3分の1にあたる約4町歩が小作されていた。

ではその地主はどの地域の人々であったのだろうか。表2-8によれば、村外地主の小作地所有率は15%、柿木村内の他地区の地主が25%であったが、何よりその60%を大井谷の人々が占めていたのである。つまり地主・小

表2-9 大井谷地区内における地主小作関係 (自作・小作反別の単位は反)

地主	自作反別		小作反別	小作	自作反別	
	田	畠			田	畠
A	-	-	0.4	J		
B	1.4	1.9	0.1	a	1.9	0.4
C	4.5	0.4	0.5	b	-	-
D	3.1	1.3	0.7	c	-	0.3
E	-	-	0.3	a		
F	4.4	-	0.1	d	-	0.9
G	-	-	0.6	f	1.3	-
田	H	4.5	0.7	4.7	c	
	I	4.9	0.3	2.5	b	
	J	5.5	1.2	2.7	c	
	K	6.4	0.9	3.0	g	
	L	7.1	0.9	5.5	k	
	M	4.2	0.5	1.9	l	1.5
	N	5.2	0.7	1.4	i	0.3
	計		24.5	m	0.7	0.0
				n	4.7	0.7
畠	E		0.8	l		a
	O	-	-	o		
	M		0.1	p		
	計		1.0			

(典拠) 前表に同じ。

(注) 「自作反別」(田畠) は、それぞれ大井谷地区内における自作反別、|-|は自作なし。

2度目以降は空欄にしている。

主層と小作人層のあいだでそれほど階層差はなく、極めて複雑な様相を見せていたのである。これは通常の近代農村に見られる地主・小作関係とは、そうとう様相を異にするといわざるを得ないのである。

そして、こうした事情が、農地委員会の買収にかかる件数が極めて少なかった要因であると考えられるのである。

つまり戦前において土地所有権が活発に移動していたことはまちがいないが、その中心は大井谷という小宇宙のなかのことであって、それゆえに地主・小作関係が発生したとしても小作料收取を主目的とするようなものではなく、むしろぎりぎりの経済状況のなかで相互に共助しあうようなものであったのではないかとも思われるのである。それは逆に村外の地上に対しては、例えば明治前期の佐々木家の土地所有が、谷の中心の田畠ではなく、耕作放棄の危険をともなうような場所に集中していたということに見られるように、小宇宙の美田はあくまで村内で守るというしたたかさとなって現れるようにも思われるのである。

## (2) 大井谷の生産力の柿木村内での位置

最後に、この時期における生産力的な位置を、米の反当収量(反収)を基準にして、村内他地区と比較しつつ見ておきたい。図2-8は、米供出にあたって柿木村農業委員会が確定した昭和23年

度（1948）実績の農家別データを地区別で表したものである。あくまで同委員会の査定による耕作面積と収穫値であるため、現実のものとは多少違があるかもしれない。したがって反収を算出するうえで、やや過大ないし過少となることは避けられないといえる。しかしそれでも一定程度現実を反映したものと考えられるし、ある程度の傾向性をつかむうえでは差し支えないであろう。

これを見れば村全体でも1町歩をこえる経営は極めて少なく、わずか7戸程度である。全体の平均は4反3畝余で、村内全般を見ても零細經營であることはまちがいない。反収レベルにおいても、この時期でおお1石5斗～2石の層が中心であり（平均で1.71石=256kg）、あまり高いほうではなかったといえる。

地区別に見るならば、経営面積が大きいのはやはり大野原で、地区平均でも6反2畝強と村平均を2反上回っており、最も大きい。反収レベルでも2石の線に近いものが多く、平均で1.81石と村平均をやはり上回っている。大野原について経営面積が大きいのは福川であり、データも総じて大野原について右側に分布しており平均は5反1畝強となっている。反収は上下のばらつきが見られるが、少し低めで平均1.67石となっている。桃谷も比較的経営面積が大きいほうであるが（平均5反弱）、反収は低く1.0～1.5石の層に多く分布しており、平均も1.24石と村平均をかなり下回って

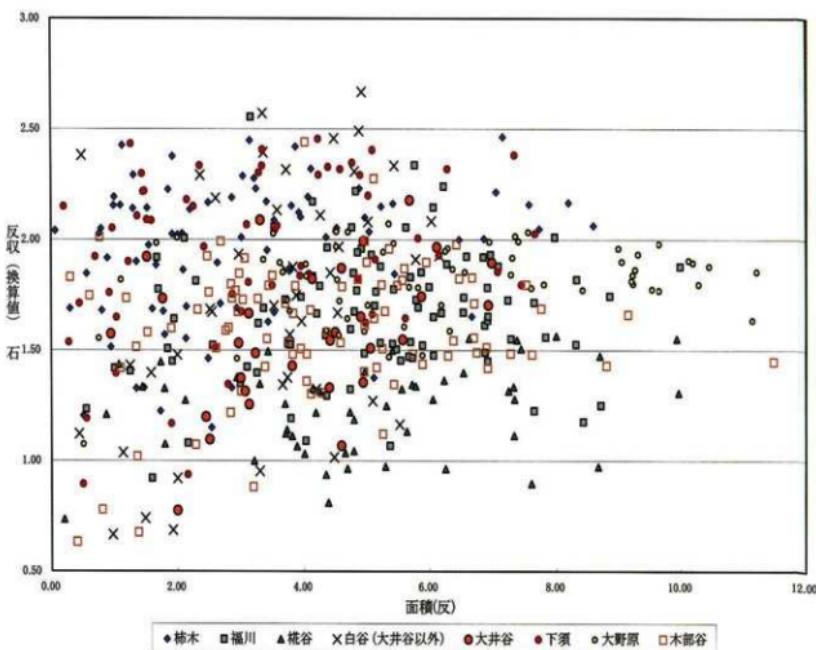


図2-8 村内各地区的農家別経営面積および反収状況（昭和23年）

いる。

これに対して柿木は、全体に左側にシフトしており経営面積の平均も3反1畝弱と小さいが、2石をこえる農家が最も多めだっており、平均でも1.95石と村内では最も高い数値を示している。下須も同様の傾向を示しており、経営面積平均は3反3畝弱で、反収では1.94石と柿木と並んでいる。

経営面積で最もばらつきが大きいのは木部谷（奥木部谷を含む）で、1町をこえる農家から1反未満まで散在しているが（平均4反3畝弱）、反収レベルではだいたい1.5~2.0石の層に集まっている（平均1.60石）。いっぽう面積ではほとんど6反未満である白谷（大井谷を除く）は、反収の面で大きなばらつきを見せており2.50石をこえる2戸から6~7戸しかない3戸まで大きな幅があった（平均1.73石）。

こうしたなかで大井谷は、経営の広狭・反収の高低における地区内の差は比較的少なく、平均でもそれぞれ村平均を少し下回る4反1畝足らず、1.57石であった。経営面積でも土地生産力でも、村内の平均的なところに位置していたといえよう。

それにしても各農家の生産力は、経営の大小とはほとんど関係ないようである。煩雑になるので表示はしなかったが、各地区的傾向線を引いたとしても傾きが極めて小さく、ほとんどの傾きの値が0.02~0.05と横に倒れたような直線（x軸に平行に近い直線）になるのである。つまり、経営面積が大きかろうと小さかろうとだいたい各地区のなかでは反収の差がなかったということである。

これはおそらく、棚田であろうとなかろうと、当時柿木村全体において総じて1枚当たりの田が小さく、より集約的な稲作が営まれていたことと関わりがあったのだろうと推測される。すなわち棚田地区に集約的に見られるように、全体に平地に恵まれない柿木村では仮に経営面積が大きくても零細地片の集合であって、技術的に経営の大小による差はほとんどなかったと思われるのである。そうしたなかで現れる地区ごとの差は、日当たり・水など各地域の持った条件の差であり、白谷地区に見られた反収のばらつきも地域のなかでの条件の差であったと考えられる。

その意味でも、大井谷に見られる経営面積・反収における格差の少なさは、まさに象徴的であるといえるかもしれない。大井谷という小宇宙のなかでの差は村内全体においては相対的なものであり、ことに戦前土地所有権が流動的であったにしても、技術的・生産力的格差の少なさが共助といった共同体的関係を強面に保たしめたという側面が強かったように思われるのである。

## むすびにかえて

いうまでもなく棚田のうえに展開する労働集約的な農業は、経済効率の論理からすればまっさきに切り捨てるべくべき存在であるといえよう。日本の農業全体がまさにそうした危機に直面しているのであるが、棚田の農業はその象徴あるいはより集約化された存在であるともいえる。大井谷でもこの先20~30年後の状況を考えれば、開発以来の400年以上にわたる歴史のなかで、最も大きな危機を迎えることになると危惧される。

しかし、こうしたなかでただ声高に「棚田を守れ」と主張しても、あまり意味のあることではないかもしれない。それは、大井谷をはじめ棚田の地域でなお生き続けていく人々に、一方的な負担を負わせるだけになりかねないからである。

むしろ問われているのは、消費者である都市生活者の意識のほうであるように思ってならない。あるいは、政治を含めた社会全体の意識といつてもよいかもしれない。

グローバル化によって一定経済効率の論理が強まってきたことは、ある面でやむを得ないことであろう。それによって日先の対応を迫られる局面も確かにあらう。しかし、経済効率優先のかけ声が社会全体を包み始めたならば（現にそれは進行しつつあるが）、目には見えないが本来守つていかねばならない重要な価値まで失っていく危険性は極めて大きいといわざるを得ない。日先に追われるあまり、歴史が軽視され生活文化を含めた文化総体が衰退し、窮屈な社会のなかで人々は捨てるべき価値を見失い精神的頽廃を來たす恐れは濃厚であろう。

棚田を今後どうしていくのかが、ただちにその解答をもたらすわけではない。しかし棚田を危機に陥らせているものと、上の問題は根のところでつながっているだろう。その深みのなかで考えていく必要があるということである。

棚田を開き、災害等を乗り越えながら嘗々と生きてきた人々、極めて厳しい労働に堪えながら届託なくまたしたたかに地域を守ってきた人々の歴史やバイタリティを、私たちは今どう受けとめるのか、共助の精神で生き抜いてきた人々の智恵を私たちはどう受けついでいけるのか、問われた課題は重くかつ大きいといわざるを得ないのである。

### 注

- (1) 島根県鹿足郡六日市町教育委員会復刻版（1981年）による。
- (2) なお大井谷村の記述には「里諱に大井谷西藏寺妻防州山代三浦より来り、紙を濾始と云フ」とも記されており、既に文化年間当時さまざまな伝説の形で伝えられていたことがわかる。
- (3) 柿木村村誌編纂委員会『柿木村誌』第1巻（1986年）pp.293~4。
- (4) 同上pp.447~50。
- (5) 同上。
- (6) 同上pp.521~9。
- (7) 株式会社ワールド山陰支社に作業を依頼した。

第2章 標山の歴史

- (8) 大正7年（1918）2月26日日原町生まれ、昭和14年ころ数え年22歳で大井谷へ嫁いできたという。聞き取りは平成13年（2001）2月22日に、三浦シゲ子氏（注9参照）の案内と同席のもとで行った。
- (9) 大正12年（1923）12月30日大井谷生まれ。
- (10) 昭和10年（1935）9月6日大井谷生まれ。

勝部 眞人



## **第3章 棚田の民俗**



## 1 大井谷の集落

### (1) 地名

#### ① 大井谷

地名の由来は次の2つが考えられる。

1つは地理的自然条件によるものである。「井」は「泉または流水から用水を汲み取るところ。一広辞苑」とあり、大井谷の場合も、谷から用水を引き込み生活や農耕に利用してきた。また「井」は「囲」にも通じ、的場をはさんで向かい山と城の尾（引明ヶ迫・柳ヶ迫へ続く）との間に挟まれた（囲まれた）谷底の集落であることからこうした呼び名になったとも推測される。

更に「井」は「堰」と同じ意味で使われることもあるが、大井谷で堰を築いたというような話はなく当てはまらないように思う。

ある「吉賀記」では「因名不解。古来より見迎（村）の枝郷として、往古三浦の祖助七郎この所の地主たり…」とあり、名前の由来は不明としている。

「鳥根県の地名」（平凡社）には大井谷が2カ所あり、柿木村の大井谷村は「山須山村の北西、吉賀川の支流大井谷川のほとりにある山間の村」と紹介され、もうひとつの大井谷村は金城町にあり「大佐山の北麓、長田川左岸に位置」となっている。いずれの場合も山に囲まれその麓の谷筋に開けた集落といえる。

のことから第1に、地名は地形の様相から付けられたものと推察できる。

2つ目は人名によることが推察できる。

同じ「吉賀記」でも異本には、下須村の項に

「見迎（柿木）四ヶ村の内下三ヶ村。考えてみると富貴八ヶ村の開拓者井谷郷三郎は富貴八ヶ村開拓後、川に沿って下り、下位に向うとき見迎の村々が開拓されておらず、よって沢山の人夫や木挽きをひきいて奥谷を開く。これが大井谷より下井谷である。井谷郷三郎はその後、左鎧へ入り、これから美濃郡横田庄、守領内、枝郷の井谷へ伐り入りついに大木に打たれてここで死す。よって郷三郎の墓は井谷で大元神に祀り小さい社もある。…よって大井谷、又左鎧・井谷はいずれも郷三郎を開拓の上とするという」

ここに出てくる井谷郷三郎とは、六日市町藏木地内の九郎原、親追、藏木、樋口、田野原、星坂、初見、金山谷・河津の8ヶ村を開墾した人物である。

「吉賀記」では同じく「樋口村」項で「日向の井谷郷三郎、高津の銀阿弥の両人が高津川の水源をたずねてこの奥に入り…」「田野原村」の項では「寛治年中、井谷郷三郎、高津銀阿弥の2人高角川の水上をたずねて…」となっている。

のことから井谷郷三郎は宮崎県の出身で平安時代の寛治年間（1087～1094）に高津川沿いの集落を探査のためこの吉賀地方にやって来た。まだ開けていなかった藏木地内を開墾した後、高津川に沿って七日市の<sup>福井谷</sup>から柿木村の木部谷を通り、川伝いに下り柿木村の大井谷、左鎧の井谷（高津川を挟んで万瀬地区の対岸の地区）等を開墾したことになる。

※ 「井谷」のつく地名で、六日市町七日市の船井谷（下高尻の手前）、益田市横田町の井谷  
もこの井谷郷三郎が開拓したと言われる。

「六日市町誌」第1巻によると、探査隊がこの地に入ったのは寛治年中のこととしているが、これは一応の目安であって明確なものではないとしている。探査隊は古代末の荘園制度の展開に対応した国家権力の一連の動きである。つまり、荘園領主の所領支配に対して、院政を敷こうとする国衙権力が地方における自らの支配領地を確認し広げるために探査隊を派遣したところ、つまり院政が始まる11世紀（1086～）ころであるとする。天皇側は藤原氏を中心とした荘園の私物化に対して歯止めをかけその整理を目的にして全国的な調査を行い、高津川水系源流地域にも探査隊を向かえた。

高津銀阿弥とは国衙からつけられた地元の案内者であり、郷三郎は勇気と財力をもって諸国を渡り歩き荒廃田を開拓し、新田を開拓、営田を請け合う有力者という。

このことをもとにすると、大井谷は三浦氏がやってくる前の平安時代には既に人が生活していた痕跡があることになる。

※大井谷の因名について同じ「吉賀記」で2とおりの考えが紹介されていること

同じ「吉賀記」で記述に整合性がなかったり、内容に違いがあるのは、原本の尾崎太左衛門の著した「吉賀記」が現存せず、写本に誤記、脱落、増補があることによる。

### ② 桟ヶ坪

大谷の下手、観光駐車場の上手付近をさす。村道路と雑草地・作業場となっている場所付近。「杭」とは「地中に打ち込む長い棒のことを指し、日印や支柱にする。一広辞苑一」となっており、地名の由来は、「この地は殿様に献上するお米を栽培する圃場で杭を打って他と分けた所」との意味か？

ここで収穫された米はおいしく、江戸時代は津和野の殿様の献穀田となっていた。

### ③ ヤタイ

瀧の谷の傍に開けた区域。津和野街道が谷筋にのびている。昔は、ヒタキ（田圃の肥やしや牛糞の下敷きなどに使うため、ススキやクマザサなどの雑草を刈り取っていた）の刈り場だった。

ヤタイから津和野街道を登っていくと途中に1本の大くぬぎがある。

昔（江戸末期から明治・大正時代）この大くぬぎの近くに茶店があり、お爺さんとお婆さんが小物や食物を売っていたという。この付近には道のそばに屋敷跡と思われる石積みが数ヶ所見られる。

地名の由来を推察するに、ヤタイとは「屋台」であり小さい家の形にし、持ち運びやすいように作った屋根のある台のことをいう。「屋台」のイメージから大井谷のヤタイという地名を結びつけるのは少し無理がある。広辞苑では、「ヤダイ（矢代）」として、「射芸で勝負などに射手を上矢の組と下矢の組の2組に編成することをいう」とある。ヤタイが昔、矢を射た的場の近くにあることからヤダイ→ヤタイとなったと考える方が自然なよう思う。

#### ④ 城の尾・的場

言伝えによると城の尾からの場まで弓を射る稽古をしていたという。実際に現場に立つと、向かって右手の城の尾から左手の的場までは直線にして300mは優にあり、弓の練習がなされたかどうかは疑問である。また、城といっても石垣等もなく中世の砦といったほうが適切な表現であろう。現在城の尾は展望台になっており、的場は雑木林でいずれも遺跡等は見あたらない。

大井谷は三浦氏と津和野藩の吉見公との取り決めで、大井谷を戦場としない約束を取りつけたという話があり、今まで戦いが行われたことはない。

#### ⑤ 井手ヶ原と境界石

大井谷は昔、山の上の方から開墾し下の方に生活圏を広げていった。下って行くと井出(手)堰がある原っぱに出てきた。その「井出(手)の原」が地名となったのではなかろうか。

また次のような言伝えがある。

「津和野藩政時代に『大井谷の検地をする』という御達しがあった。西藏寺は長い間『大井谷の西藏寺』ということで通用していた。ところがお寺は既に井手ヶ原に移転し（地区的境界石はお寺の上の方に据えられており）大井谷の地区内ではなくなっていた。

当時、お上の許しなしで住居を移転することは禁止されている。まして信仰の中心であり地

域のセンター的な役割を果たすお寺の場合はとくに厳しい。おきて背くことはご法度で大変な

ことである。『津和野藩から調べにこられる。これは一大事、何とかしなければ』ということで、

急きよ苦肉の策を考えだした。境石をお寺の境内に移したのである。

事なきをえた後、大井谷と井手ヶ原の境界はそのまま西藏寺境内になった。

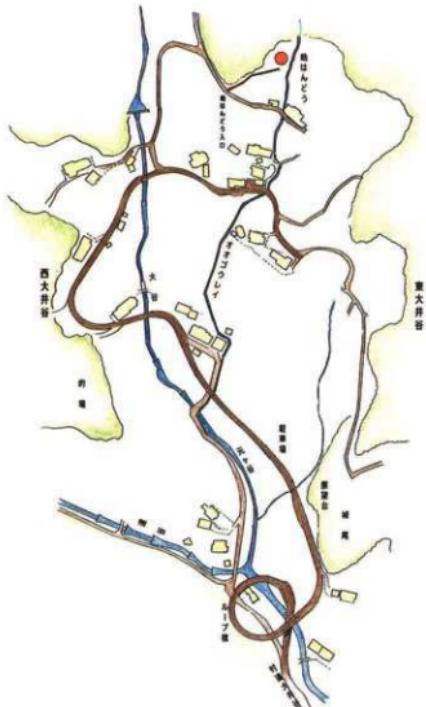


図3-1 大井谷地区の現況

## (2) 各*j*の系統

### ① 三浦氏

大井谷地区は三浦姓が多い。これは、山口市仁保から来村した三浦一族がこの地に定住したことによる。明治時代の初め、地域の有志によって大井谷に墓が建立されて以来三浦氏の先祖を祭る法要が現在も続けられている。大井谷三浦氏の始まりは平子重経としており、命日が9月14日であることから、以前は三浦姓15軒が集まり9月14日に祭祀を行っていた。現在は13軒に減ったものの9月の都合の良い日曜日にこの祭祀を行っている。

「村誌資料—岩谷氏一」によると「三浦一族の会は、現在11軒（昭和56年）、江戸時代には24軒」となっており、時代により数の変遷がうかがわれる。祭祀の概要は次のとおり。

○法要の導師は、三浦一族の菩提寺である栄泉寺住職が行う。

○3軒ずつがひとつのグループになってその年の世話をする。

○3軒の中の1軒が頭屋をつとめ、法要の後はおおらいをして親交を温める。

○現在、費用は1軒あたり3,000円で、折り詰をとっている。以前は米1升と何某かのお金を集めていた。

—平成13年8月現在—

三浦一族の系図があると聞いたので、筆者が調べたところいざれも確かなものではなかった。

三浦一族のルーツを探るもう一つの方法として、山口県の仁保にある源久寺の歴史を調べてみた。『村誌第1巻』の資料から、源久寺の三宝殿竣工記念と本堂・庫裏・位牌堂改築記念に出版（昭和36年）された小冊子を引用する。

### 「仁樂山 源久誌（2冊）」より

#### <源久寺の由来>

「源久寺は山号を仁樂山と称し、曹洞宗で本尊は、阿弥陀如来である。

建久8年（1197）、武藏国に本拠を持っていた平子重経は、源頼朝から周防国 の伊保保と仁保荘の地頭職に補任されて下向した。そして仁保に居館をかまえ政務を執っていた。正治元年（1199）源頼朝は鎌倉において亡くなつたが、重経はその位牌を安置するためにお寺を建立した。これが源久寺である。僧を住まわせ、頼朝の菩提を弔うとともに、源家の繁栄を願つたとされる。

重経は源久寺に対して崇拝することは、ことさら厚く、建保元年（1213）正月には禁制札を建てて生殺その他を禁止した。

また、同じ建保元年2月23日には、仁保荘内の高松・妙見・丸山の3か村における50石を免田とし、鎌倉殿の御茶湯料として永代附置している。つまり源久寺の頼朝の靈碑に対して供物料として50石を与えるというのである。

その後、平子重経が元仁元年（1224）9月14日に亡くなつたので、この寺に葬った。法名を源久寺殿西仁大槻定門といつ。この寺の開基として、その法体の木像が安置された。これにより、のちは源久寺が仁保平子家の菩提寺となつ

た。

この寺の最初は何宗か明らかではなく、その開山も不明である。慶長年間、瑞穂光守の9世雲甫永岳和尚がこの寺に入り、曹洞宗に改め、寺の復興につくした。よって、後に永岳和尚をもって源久寺中興開山とした。永岳和尚は慶長3年9月11日に亡くなった。平子氏はその後、仁保氏を称し、また後には出身地にちなみ三浦氏に改めた。

22代三浦元忠の時、毛利輝元から山口の亀山城番を命ぜられた。それで三浦元忠は山口に住むようになった。また元忠は安芸所領二保島城にも長くいたといわれ、自然に仁保の方は留守となった。このため慶長の頃には仁保の地は吉川広政の妻（毛利輝元の娘）の所領となった。…略…」

要するに、「平子重経が、鎌倉時代に源頼朝の菩提を祭るために源久寺を建立した。彼の死後江戸時代までは仁保氏を名乗っていたが、慶長年間に三浦氏に戻した。」というのである。

#### <平子重経について>

「東国平氏の大分派で、相模の三浦半島に住み三浦氏を名乗る豪族があった。三浦氏は代々源氏に仕え関東に勇名をはせたが、その累系に武藏國久良郡平子（たいらご）郷に居をかまえた平子氏を名乗る一族があった。治承・寿永のころの当主は平子重経であった。

治承4年（1180）源頼朝、平家討伐の軍を伊豆であげたが、平子重経は頼朝に従い、石橋山の戦いにおいて働き、その後も頼朝に従って戦功があったため建久8年（1197）周防国吉敷郡仁保莊及び恒富莊の地頭に補せられた。

仁保に居をかまえた平子重経は、その翌年源氏の氏神である鎌倉の總岡八幡宮を勧請して、いまの源久寺の参道近くに社殿を建てた。この八幡宮は後に今の船山に移され、船山八幡宮として現在に至っている。

正治元年（1197）源頼朝の逝去とともに、その靈廟を安置するために源久寺を建立した。

重経は30年近く仁保で住したが、元仁元年（1224）9月14日に亡くなった。重経は、晩年は仏門に入り入道して沙汰西仁と名乗った。法名は源久寺殿西仁大押定門という。いまの源久寺の参道脇にある大きな宝篋印塔は重経の墓といわれる。

平子氏はその後、室町時代の応永のころ、重経の時代に仁保の氏を名乗り、更に慶長年間に元忠の時代に三浦氏とあらためた。…略…」

#### <平子氏について>

平子氏のいわれについて、「仁保の郷上史」では次のように述べている。

三浦氏は源家累代の家人で、源頼朝の挙兵に際しては、義明は一族を率いて参陣し、鎌倉幕府成立後は、義明の子義瀬が、次いで義村・泰村と代々が相模

守護となるなど、幕府の重臣であった。その一族が武藏国久良岐（くらき）郡たいらご平子郷（現 横浜市中区本牧町辺）に居住して、平子氏を名乗るようになったという。

### ＜重経と大介＞

「源久寺誌」に

『正治2年正月23日戊三浦介平朝臣義澄卒 年74 三浦大介義明男』とあるごとく普通には義澄は介と称し義明は三浦大介と称した。そこで『三浦大介百六つ』は三浦義明でなければならないのである。仁保地方では、重経や重資を三浦大介とするのは他の文献には見られないである。

三浦大介義明は村岡（平姓）為通の子で、為通が相模の国三浦郡を領し衣笠城を築き、初めて三浦氏を名乗った。治承4年8月頼朝が伊豆で兵を擧げると、義明は一族を率いてこれに応じ海路を石橋山に向かったが期におくれ、義明は帰って衣笠城にたてこもり敵の島山軍と戦い、敗れて城中で死んだ。その勇略のさまは「源平盛衰記」に伝えられている。衣笠城の一部分は今日衣笠公園となり、一部の城跡も残っている。付近に義明山滴昌寺がある。建久5年(1194)9月29日頼朝が義明のために建立したものである。義明の木像を蔵しているが、その岡は集古十種にも出ている。頼朝は義明が死後17回忌参詣して、その歎功を思い出し『今日まで存生とみなすべし』といったので義明の歿死時の年齢89歳に17を足して『三浦大介百六つ』と里人が語り伝えたというのが関東で伝



図3-2

わる諱である。…略…」

と記されている。従って、大井谷では重経と三浦大介とは同一人物のように語られているが異なった人物であることが分かる。

## ② 三浦氏の柿木来村

「源久寺誌」には「島根県柿木村における開基公の墓所」の項を設けている。以下はその中から抜載したものである。

「…源久寺の古い記録の中から、明治8年9月6日に柿木村字大井谷の三浦甚六、三浦五六、三浦伝二郎、村上庄左衛門の4人が、平子重経公は自分たちの祖先であるからと訪ねてきた、との記事がある。…略…」

三浦甚六は、文化14年7月8日の誕生で明治8年には58歳であった。その長男が三浦愛助で、現在は愛助の養女でツルメ氏が継いでおり、白谷903番地にいることが分かった。村上庄左衛門は明治6年の戸籍には天保14年9月7日生まれになつておらず、明治8年には30歳だったはずである。…略…」

大井谷には平子重経の墓が祭られてある。

墓の正面は三浦家の家紋を入れて、次のように彫ってある。

(前面)

元仁元年甲申9月14日

源久寺殿西仁禪定門

平重経公塚

(裏面)

明治12年1月 世話人 三浦 伊三郎

同 芳助

三浦家22名建之

三浦一豊氏宅には、重経公の位牌を祭つてある。位牌には次のように書いてある。

(前面)

源久寺殿西仁禪定門 位

(裏面)

元仁元年甲申9月14日

平重経公

大井谷三浦家先祖也



写真3-1 平重経の墓

山口（仁保）の三浦氏の支族が集団的に逃避したと伝えられる地は、津和野町畠辺にもあるが、これらの地にいつの時代に逃避したかは文献からは明確ではない。

以下はこれまでの史料から筆者の私見を加え、三浦氏の柿木来村の考え方を紹介する。

### 「源久寺誌」の考え方

第1は、応仁の乱の時大内政弘は西軍の主要勢力として京浜の間で山名氏のために戦った。東軍の細川勝元は、大内政弘の分国擾乱をくわだてて大内教幸入道南宗道頓をして文明2年3月、長門赤間関で兵を挙げさせた。仁保弘有も政弘に従って浜津にいたが、これに応じて南宗道頓に合流することになった。しかし、南宗道頓は政弘の留守を預かっている陶弘農に玖珂郡で敗れ、石見の吉見信頼のもとに援軍を乞うた。

この時、仁保弘有と大内政弘との関係がどのようになったか不明である。

三浦家文書が鎌倉初期から毛利氏時代までは整然とし残っているにもかかわらず、文明3年（1471）から長享2年（1488）までの17年間分が欠けているのは、この間に三浦氏（仁保氏）に何か事件があったことを推察できる。

もし、三浦氏の支族が大内氏を離れて逃避するとすればこの時期と考えられる。

第2は、三浦家文書が整然としているなかで、大永7年（1527）11月以降、天正5年（1577）12月に至る50年間の文書がない。この50年間に大内氏が滅亡して毛利氏の時代になっている。この政権移動は莊園制度がくずれ大名の領国制に代わった時代もある。

ことにこの50年間は、仁保（三浦）隆在と元氏の時代であり、その次の元忠の3代にわたって三浦氏の家系は大移動があった。元氏は吉川氏から入り、元忠は神出氏から入った。もし三浦氏の支族が大内氏を離れて逃避するとすればこの時期も考えられる。

第1の場合は、大内氏の圧迫のためであり、第2の場合は、毛利氏の抑制のためとも考えられる。…略…」

のことから、いずれにしても戦国時代の文明3年（1471）から安土桃山時代の天正5年（1577）までの間に、山口県の仁保から柿木村にやってきたのでは？と結論づけている。

### 「柿木村誌」の考え方

「柿木村誌第1巻」では、前述の「源久寺誌」を引用し更に「古賀記」の「正中年中（1428～29）に三浦家がはじめて紙を漉きだす」の記事をもとに、「源久寺誌」で示した時代よりも前に大井谷に入ったとしている。

「源久寺誌」の系図でみると、半子重綱の子で3男の重綱を助七郎と呼んでいたことから（大井谷でもそう呼ばれていた）助七郎こと重綱が大内氏の命により、大井谷に入ってきた祖先ではない

かというのである。更に大内氏によって琳聖寺が白谷に室町時代前期の応永年中（1394～1427）に建立されたとの記録からそのころに入ったのではなかろうか、としている。

※ 「仁保の郷土史」では重継は四郎となっており（助七郎の記述はない）、記述が明確でない。

### 筆者の考え方

そこで、筆者は重継が平子重経の子であり、重継こと助七郎が柿木村三浦の祖先であるとのことを仮定して、源久守関係の年表を調べてみると、もっと正確な年代が分かるのでは？と考えた。

年代が分かるものを並べてみると次のとおり。

元仁元年（1224）9・14 平子重経 亡（1代）

貞和3年（1347）10・2 平子重継 八幡宮をいまの地に遷座（6代）

永和3年（1377）8・19 平子貞重 正法寺に敷地寄進（9代）

2代は重継の兄の重資であり、その後に3・4・5代とあって6代目の重継になる。

大ざっぱに世代間の間隔を25年とすると、重継の時代は1250年を中心にその前後の鎌倉時代中期の建長年間（1249～56）、康元年間（1256～57）あたりに絞られるのではとも考えられる。ただし、この説は重継本人が柿木村にやってきたと仮定したことであり、この一族を養うに到底足らない山里の大井谷に来たとは、実際には考えにくい。

そこで、「仁保の郷土史」を参考に、重継の係累の者が柿木村にやってきたとして、考えられるのが元弘3年（1333）を中心としたあたりである。

鎌倉幕府の滅亡から、仁保荘の平子氏もあわただしく戦乱に巻き込まれていく。鎌倉時代後期周防・長門は北条一門が守護であったから幕府滅亡の後、後醍醐天皇の政権（建武の新政）になって北条氏に味方した平子氏は仁保荘を没収された。建武政権は平子氏が新政権に帰順を明らかにしたことにより建武元年（1334）仁保荘を平子氏に返したことになっている。しかし、現実には建武3年になっても代官の上総官内大輔が依然としていますわっていたという。

このあたりで重継の係累の一族が大井谷に生活の場を求めてやってきたことも考えられる。

更に「右見家系録 一大正7年一」によると三浦姓について次のように記されている。

「…三浦内膳正平義乗、周布氏の臣、文明元年、日脚八幡宮建立。大竹兵衛  
九郎、水正8年三隅家の下に井ノ村を支配す。 三浦千四郎、天文21年、吉見  
正綱一味。三浦助七郎、吉見領大井谷給人。三浦肥後守、同23年吉見の為中入  
茶臼山を固む。三浦越中守藤原清兼、永禄2年7月19日卒、杵東平等寺開基也。  
三浦孫右衛門、元和5年古田侯の地理案内者。三浦正道、浜田人、天明3、宣  
長の門に入る。三浦辰種、文化文政津和野害家。三浦補子、波佐三浦藤左エ門  
母、能善歌人。」

助七郎が誰かは別として、天文21年と23年の間に大井谷三浦の記述が出てる。

のことから推測すると、石見家系録の記述は年代順になっていることから、天文20年（1551）前後に津和野藩吉見侯の家臣三浦助七郎が大井谷を領地として治めていたことになる。なお、この考えは「源久寺誌」の第2とも一致する。

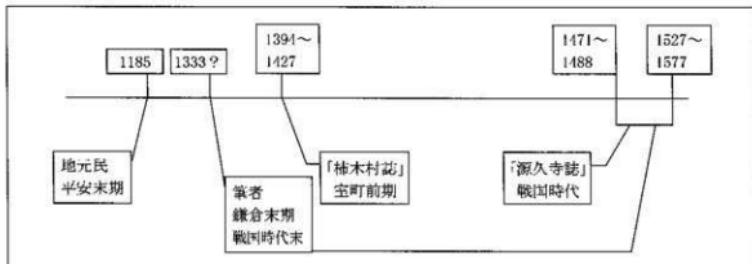
#### ＜結論として＞

地元の人のなかでは、三浦大介が平安時代末期の源平の合戦のころ戦いに敗れて大井谷に逃げ来て住み着いたとの話もある。

なお、柿木村の広報関係のパンフレットや立て看板等では「柿木村誌」をもとに「来村は今から600年前」としている。

いずれにしても、どの説も確証のもてるものはない。

表3-1



#### ③ 三浦氏の墓

##### ＜主屋（故三浦農男氏宅）の墓＞

現在、主屋（屋号）には子孫は住んでおらず屋敷跡があり、炊事場付近は多少崩れた桟木も残っている。大井谷の三浦氏がこの家を中心広がっていったということで、その墓所を三浦高嶺氏に案内していただいた。屋敷跡から20mほど離れた右側に上段に2列、下段に3列並んでおり、その数は30基余りである。下段の左端に累代の墓があり、裏に「兄妹合意に依って現在地に移転 昭和62年9月 三浦美實 之建」とある。

話によると、下の3段はここから100mほど離れた右手の丘の方にあったものを移したという。五輪塔は別として、判読できる墓では上段の延享3年（1744）が最も古い。

更に現在の水源地そばの「立ち山の平（ひら）」にも共同墓地があって、そこにも主屋の墓があるらしいとのことで、三浦清美氏に案内してもらった。水源地の左手の雑木林の中に墓石があった。野石が建ててあるだけものが多く、枯葉に埋もれてどの程度の規模の墓所か分からなかった。「この上の方も段になっていて、墓石があると思うが藪になっていてよく分からない」とのことである。

## &lt;三浦清美氏墓所右横の五輪塔&gt;

主屋の向かいの丘に共同墓地がある。このなかに五輪塔・宝鏡印塔が10基ばかりまとまっている。近くにあったものをここに持ってきたものもあるというが、いずれにせよ三浦氏の先祖であることに間違いあるまい。



写真3-2 五輪塔

## &lt;西山氏茶園下の墓&gt;

白谷の西山氏茶園の下の斜面に横1列に墓が並んでいる。安永8年（1779）のものが一番古く、大正7年（1918）のものまで16基ある。いずれも三浦の字が刻まれてあり、大井谷の三浦氏と関係あるものと思われる。大半が2段墓で、高さは60~80cmほどのものが多く、立派ではないが、中に美濃・加賀・但馬の名があり、興味深い。

## &lt;西山氏茶園上手共同墓地の墓&gt;

西山氏茶園の上手に地区の墓所がある。その右端に三浦姓の墓がまとまっている。笠つき3段墓で高さも110cmほどのものもある。下の神殿屋敷の神職に縁のあるものと思われる。判読できるのは明和8年（1771）が一番古く、茶園下の墓群と同年代のものである。

## ④ 村上氏

大井谷の村上姓は3戸であり、三浦姓に次ぐ。広く一般には、柿木村の村上氏は瀬戸内村上水軍の流れを引いているといわれる。

「日本名家・名門総覧 一新人物往来社一」によると、村上水軍は「本拠は伊予の国一宮・大山祇神社に奉仕する同国越智郡能島・来島と備後國御調郡因島・三島海賊衆として勘合貿易の警護衆になり活躍した。嚴島合戦では毛利軍を支援。秀吉の鎮圧令のため、周防国大島で滅亡した」としており村上氏は「村上水軍の後裔。中世以前より海士郡の因屋城を本拠とする。永禄年間、但馬の海賊が来襲したが、村上右京亮らは防戦し撃退した」とある。

また、「郷土石見No29 1992年 一石見郷土研究懇話会一」の「石見地方の苗字」によると村上姓は石見地方では14番目（528戸）に多い姓となっている。中でも日原（2位）、柿木（3位37戸）、匹見（4位）、津和野（7位）、六日市（15位）と高津川の中流から上流の地域に多く、益田、浜田、

江津、大田の4市ではいずれも20位までに入っていない。このことは村上水軍の流れをくむ一族が瀬戸内海から錦川伝いに山代口より、あるいは鹿野から山越えで吉賀地方に勢力を伸ばしてきたとも考えられる。

村内での村上姓の分布は、平成13年の電話帳によると、合計31戸のうち木部谷（7戸）、大井谷を含む白谷（4戸）、下須（14戸）、柿木（5戸）、桃谷（1戸）、福川（0戸）である。高津川本流沿いの特に下須地区が多く、白谷を合わせると柿木村の村上姓のはば半数となる。

では、この村上氏がいつごろ柿木村にやって来たか？ 確たる記録は残っていない。ただ、「六日市町誌第1巻」によると、同じ瀬戸内の豪族河野氏が六日市町・柿木村にやって来たのが正和4年（1315）とされており、一つの参考材料とはなろう。

河野一族の米村を伝える資料は次のとおり。

#### 初代 河野弥十郎通弘

予州高縄城主河野氏の末裔、弘安の頃予州を退去すという。防州に来り山口両屋形へ出入りし琴亭（厚東）に居する。後に、正和4年に高尻に来り浪人となる。吉見氏に懇意となり草履を送り、3人の男子の成長を楽しむ。山は荒地多しといえども、之を打ち開き田畠とし渡世をなす。長男は高尻に、次男弥七郎、三男助七郎は齊藤と改め、弥七郎は見迎村（柿木村）に住み、助七郎は大野原に住む。

とある。文永・弘安の役の防備のため瀬戸内海の有力者が移動を余儀なくされ、戦いが終わったあともその土地に住み着いたことも考えられる。

### （3）民家の屋号

大井谷はそれぞれの家に屋号があって、会話では屋号で呼ぶことが一般的である。それは三浦姓が多く、「三浦さん」と呼んでもどの三浦さんか区別がつかないからである。平成12年8月現在で、大井谷集落21軒の内訳は、三浦16、村上3、田村1、坂本1となっている。

屋号には、それぞれいわれがあって地形や自然条件からとったもの、職業や慣習からとったもの等さまざまである。

大井谷地区の場合は三浦一族の主従関係からつけられた、上（重）屋とか部屋といった屋号の他に樋の口や大谷といった、生業や地形に関係するものなどもある。

なお、今回の調査は聞き取りと、墓石を調べて分かる範囲で記したものである。十分なものではなく今後の精査が必要である。

\* ●は現在、人が住んでいない。

#### ＜東大井谷地区＞ 7軒

##### ○上の谷（たん）

村上一郎氏宅。元ヶ谷の源流部に位置していることから。「上の田」という説もある。地域で一番高い沂でここからは大井谷の全貌が見渡せる。もともとは、下大井谷に住んでいたが「土地を提供するから高止に住んでくれないだろうか」との話で現在地に移ったとのこと。水飲み場の「助はんどう」が表手にある。

### ●岡屋敷（おかのやしき）

村上一郎氏宅の向かって左手横にあった。故三浦吉丸氏宅。屋敷跡には現在榎の木が残っている。史跡「助はんどう」は、この三浦吉丸氏宅の手洗い場だった、という話もある。

### ○鍵の口

三浦嵩氏宅。水のあたり口、つまり樋がかかっていたその水取口付近に家があることから。

### ○隠居（いんきょ）

三浦高嶺氏宅。「隠居」とは家長がその地位を相続人に譲りのんびり暮らすことであり、三浦一族の先祖がそうして住んだ家ということであろう。ここは代々石工をしている。

### ○新屋（にいや）

三浦清美氏宅。「新屋」とは新しい家、新宅、分家という意味である。この家は隠居から分家したもの。故忠太氏は石工で技量が優れていたという。

### ○井垣（いがき）

三浦照夫氏宅。もとは「湯垣（ゆがき）」であったのがいつの間にか「井垣」に変わったといわれる。屋敷の上手が主屋で、主家の湯殿がそばにあったことから呼ばれるようになったらしい。

なお、井垣の右手に「新宅」と呼ばれていた家もあった。そこは故三浦茂義氏宅で屋敷跡は畑になっている。

### ●本家（ほんけ）

故三浦好藏氏宅。「本家」とは家元であり、分家からみて分かれた元の家にあたる。新屋（しんや）、前の部屋はこの本家から分家したのではないかとも言われる。家の横には大きな西条柿の木があったが、昭和25年ごろ切られて今はない。

「本家」は地番としても現在残っている。

### ○新屋（しんや）

三浦敏行氏宅。「しんや」も意味は「新屋（にいや）」と同じであり、おそらく三浦清美氏宅と区別するために「しんや」と呼ぶのであろう。

### ○新屋（しんや）の部屋

三浦幹男氏宅。新屋（しんや）から昭和時代に分家したもの。

### ●主屋（おもや）

故三浦農男氏宅。地域の人々は「重屋」とも書いている。もともと「おもや」とは分家に対する本家の意味があり「母屋」「主家」と書く。大井谷三浦一族の中心の家だった。屋号もそれにちなんだもの。

### ●主屋（おもや）の新宅

故三浦新吉氏宅。「新宅」とは新しく建てた家のことであり、主家の分家の意味。

### ●前の部屋

故三浦岩聰（いわさと）氏宅。「部屋」とは家督相続のできない次男以下の者が新しく起こして住んだ家であり、ここでは分家と同じ。主屋か重屋のどちらからか分家したものであろう。

### ●前の部屋の新宅

故三浦光義氏宅。前の部屋から更に分家したもの。

## <西大井谷地区> 8軒

### ○下(さ)がり

三浦和多里氏宅。昔、津和野藩亀井公の時代に五左エ門（五助とも）という狩りの名人がいた。彼が狙いを定めた獲物は、百発百中見逃すことなかった。このことを聞き及んだ殿様が技量と労をねぎらって下賜品として火縄銃を与えたという。以来、亀井の殿様は狩りのたびに五左エ門を従えたという。この時授かった「下賜」の「下(さがり)」が家の屋号となった。

### ○下(した)下がり

三浦満氏宅。下がりの下手にあることからついたもの。下がりの分家。

### ●下がりの本家

故三浦義雄氏宅。下がりと屋号のある家の本家のこと。屋敷跡のみ残る。

### ○大迫(おおさこ)の上

三浦敬貴氏宅。大迫は地名。「迫」とは谷の行き詰まりをいう。元ヶ谷の行き詰まりに家があることが屋号になった。

### ○大迫(おおさこ)の下

三浦徹紀氏宅。位置が上手にあるか下手にあるかによって、同じ屋号の「大迫」を分けたもの。

### ○大谷(おおだん)

三浦登氏宅。大井谷の本流である元ヶ谷のそばにあることが屋号となる。大谷(おおたに)がなまって「おおだん」となる。現在土蔵が残る。

### ○上溢(うえのえき)

三浦石子氏宅。下の溢に対して上手にあるために上溢と呼ばれる。

### ○溢

三浦輝夫氏宅。溢とは尾(山の稜線)に対するもので、本谷から左右に派生した小谷、又は一般的に谷を指している。上溢に対して下溢とも呼ぶ。

### ○向田(むかいだ)

三浦みつ子氏宅。田圃の地名が屋号となったもの。主屋からみて、向こうに見える田圃ということ。棚田と谷をはさんで向かいに旧津和野街道があり、この付近には墓が散在する。昔5~6軒の家があったという。

### ●岡の上

故三浦喜佐人氏宅。「岡」とは土地の小高い所の意味。「岡」は「丘」と同じ。現在は屋敷跡のみ残る。

### ●向屋敷(むかいやしき)

故三浦一豊氏宅。面と向かい合った屋敷の意味。どこの家と向かいあったかは不明。

殿様が上屋に行く前に一度立ち寄ったと言われ、殿を「迎える屋敷(迎え屋敷)」から向屋敷となつたともいわれる。又、花嫁が婚家に入る前に一度立ち寄った家ということから「迎える屋敷(迎え屋敷)」から向屋敷となつたとも言われる。

## &lt;下大井谷地区&gt; 6軒

## ●中屋敷

故村上辰善氏宅。位置的に大井谷集落の中ほどにあることからこの屋号となったとも、主屋から見て大井谷の中ほどになることから付いたとも言われる。

## ○中屋敷部屋

村上勇二氏宅。中屋敷の分家。昭和40年ごろ剣玉神社の下手の現在地に移る。

## ○内匠（たくみ）屋

三浦貞氏宅。先祖が宮大工をしていてことから屋号となったといわれる。昔は現在地の下手にあった。家の前に「休み岩」と呼ばれる大岩があったが、道路改修のために今は無い。地名として墓地付近の名前が残るのみ。

## ○堂元（どうもと）

村上操氏宅。井手ヶ原からここまで広い里道があり、ここで二手に分かれて、下屋敷～中屋敷～上の集落へと、津和野に行く道になる。その分歧点であるここに地蔵堂があったために「お堂の元」から堂元になったという説と、「銅でできた」地蔵様があったことから「銅」⇒「堂」になったという説がある。

## ●下屋敷（しもやしき）

故村上吉信氏宅。家は残っているが現在は無人。岡屋敷、向屋敷、中屋敷、下屋敷の4戸が大井谷の上から下にそれぞれの集落ごとにある。岡屋敷と向屋敷は三浦姓で、中屋敷と下屋敷は村上姓である。この4戸の家は何らかの関係があるのかもしれない。

## ○ふなが迫

三浦万寿雄氏宅。昔、井手ヶ原橋の手前にあったが万寿雄氏の代に現在地に移る。

## ○仲間（なかま）

田村正弘氏宅。昔、下須か横道あたりに住んでいたが半世紀前にこの地に移ったという。

## ○坂本米喜氏宅

屋号はない。米喜氏の代に坂本慶喜氏宅から分家する。

## ●坂本慶喜氏宅。

20年ぐらい前に六日市町に住居を移転する。

## ●鍛治屋敷

故三浦芳松氏宅。鍛治職人として代々続く。家業が屋号となったもの。

## (4) 神社と寺院

## ① 剣玉神社

下大井谷ループ橋の上手にある。津和野町森村の剣玉神社を村上氏が勧請したのが始まりとされる。最初は、元ヶ谷の「神の根」という所にあった。現地は谷のすぐ傍で、現在は屋敷跡も残っていない。人岩の元に南犬があり訪れた1月には赤い実をつけていた。おそらく植栽されたものであろう。

### <神社の移転>

ほこらが水害で流され井手ヶ原近くの滝元という所の竹藪に引っ掛かり、「中年の荒れ」と地元で言われている。そこを社にした。滝本山剣玉神社と呼ぶのはご神体が流されて着いた場所の地名による。

昭和38年の豪雪で舞殿が崩壊したため昭和43年に現在地に移す。

それまで大井谷は集会所がなく個人の家で会合をしていたが、集会所の役割も果たす神社を地域の中央に移転することで利便性をはかったもの。集会所が神社の隣につくられている。

昔は秋の大祭は9月29・30日と決まっていたが、現在は土・日をあてている。



写真3-3 剣玉神社

### <神社にまつわる話>

○ご神体が流れたところに大きなケヤキが5~6本あった。それを売って社を再建したともいわれる。また神社費は氏子から集めなくても、その残金で年間経費を賄うことができたという。更に現在地に移ってからも、社の修繕費として300円余りその金があったという。

○祭りはカラヒツ（神社の宝物が入っている箱）を子どもがかつぎ、カラヒツ料（かつぎ代）として小遣い程度のお金を子どもに渡していた。

○神輿は大人がかづぎ、大井谷中をまわっていた。途中頭屋が2軒あって、そこで休息し各家をまわる。昭和の10年ごろまで続いていた。38年の豪雪の時に舞殿が崩壊し道具類も壊れたため、焼却処分にした。

○神主は日原町左鎧の折元氏→田村浦治氏→三浦才造氏→三浦勇賢氏と現在に至っている。

### <神社が下にあったころの話>

○旅の六部（ろくぶ）が白谷にやってきて剣玉神社の宝剣を盗み、代わりに値打ちのない剣を置いていったといわれる。六部とは、廻国巡礼で座頭さんみたいな旅人をいう。

### <稻作申し>

○神社の境内では、稻作の吉凶を占う行事も行われていた。

当時古老だった村上源一氏、三浦時一氏が長老から聞いた話というのだから、明治の初めごろまで続いていた行事のようである。

まず、空にした2つの壺（水瓶）が用意され、上に石のふたをして土の中30cmほどの所に埋めて1年置く。春になって神職の祝詞のあと、掘り出して壺に溜まった水が多ければその年は豊作、少なければ不作になるという。この行事には氏子全員がかかわり、その後でお祓いもあったものと思われる。

三浦照夫氏が若い時、「境内に入って左側、滝の下の南天の根元にある」とのことを見聞き、掘ったところ壺のひとつが出てきた。埋め戻しておいたので、今でも掘れば出てくるはずであるとのこと。

#### <岩谷村誌「資料」より>

村誌1巻の資料（岩谷）には、剣玉神社として次のように紹介されている。

元大井谷字下森にあった。昭和43年9月に大井谷字橋詰に遷宮。

奉札 表 安政5戊午稔

奉再々建立八王子社神門

神主 三浦加賀正代

八月十八日

裏 寺社奉行 村出久兵衛

御代官 陶山正右エ門

大守 亀井隱岐守御時世也 惣氏子中 敬白

庄屋 下瀬定助 五人組 市藏

藏方 豊助 善次郎

肝煎 八左衛門 大工 当村 □藏

残役 留八 木挽 下須 留藏

#### ② 四源治大明神

「三浦和多里氏宅の右手10mほど登った小道のそばに鎮座する。高さ70~80cm、幅10~50cmほどの小さなお堂があり、中には高さ30cm弱の石がご神体として祭ってあった。

今から200~300年も昔、旅の山伏が、ここで行き倒れになって亡くなったという。山伏の亡きあと、さまざまな病気や災難が起こり、たまりかねたこの周りの人々がほこらをつくり、お祭りしたところおさまったという。以後、頭痛や腹痛など病に苦しんでいる人がここに祈願すると不思議と治ると伝えられている。現在も遠くは匹見町や六日市町等からお参りする人もいるという。特に決まつた祭日はないが、以前は時折日原町左證の神主で折元氏が来られてお祭りをしていた。

四源治の語源は不明だが、山伏の名前をとつつけたものかもしれない。

—三浦 才造（87歳） 2000・1・10—



写真3-4 四源治大明神

### ③ 西藏寺

津和野町遍説寺の末寺で真宗の東派に属する。現在は井手ヶ原にあるが、大井谷地区内で2度移転しており現在地に移る。

「吉賀記」によると、

「往古、高尻安蔵寺末大元院名跡なり。」

安蔵寺より西にあたるゆえしか言われる。横道鎮藏寺、奥の法藏寺いずれも高尻安蔵寺末寺…」

となっており、西藏寺の名前のいわれが安蔵寺の西に位置することによることが分かる。

### <最初の地>

現在寺屋敷という地名が残る。大井谷集落の一番高い所にあり、当時境内に植えてあった白椿が今も残る。2000年3月18日に現地を訪れた。真砂谷のすぐそばに直径が25cm程度の思っていたよりも小さいもので、白い苔が少しのぞいていた。開花は4月中旬から5月ごろだろう。上手は整地されて寺屋敷の石垣は確認できない。現在三浦徹紀氏の椎茸のホダ場として使われている。

### <2番目の地>

藤子橋から30mばかり上がった所に屋敷跡が残る。寺の本堂の跡は、梅の木が植えられている。道路に面した境内に高さ1.5mほどの境石が据えられている。当時の庫裡はトタン葺きで今も残っており、農業用の倉庫として使われている。裏手の杉林の中に、歴代住職の墓がある。



写真3-5 白椿

**岩谷村誌「資料」より**

村誌1巻の資料（岩谷）には、西藏守として次のように紹介されている。

開山 了西 寛永年中に開く
2世 善正
3世 善了
4世 俊礼
5世 俊了 享和2年住職 天保9年 没
6世 俊教 天保9年住職 慶応3年 引退 明治12年 没
7世 札寛 慶応3年住職 明治14年 没
8世 真徹 明治14年住職 昭和17年 没
9世 周喜 昭和17年住職 昭和21年 没
10世 智 昭和22年住職

当初は西本願寺の末寺で、仏光寺と呼ぶ。明和4年東本願寺派に移る。

大井谷境の西藏寺跡の裏手15mほど上った所に、歴代の住職の墓がある。

この墓石では現住職を14世としており、村誌1巻の記述と異なるので調べてみた。

墓所の様子は、奥の列が21基、中が3基、前が11基で合計36基の墓がある。（奥の列の更に奥にある2基を加えると38基）墓石に彫られた字をもとに開山から現在の住職までを並べると次のようになる。

開山 了西 寛永年中に開く
2世 善正
3世 善了 積玄心善了信上 小鉄が発見し後にヤタイからここに移された
4世 ?
5世 ?
6世 ?
7世 俊礼 亨和2戌年 積俊礼法師
8世 俊了 天保9戌年 没 積俊了法師
9世 ?
10世 俊教 明治12巳年7月30日没 62歳 積俊教法師
11世 札寛 明治14年11月29日 没 積撰妙證現位
12世 真徹 明治14年住職 昭和17年5月20日 没76歳 山口県玖珂郡瀬村大字藤生、竹島家より入る 西藏守 中興の業をなせる
13世 周喜 昭和21年11月19日 没 68歳 弘誓院義松齊積周喜法師

山口県玖珂郡瀬村 栗尾家より入寺  
14世 智 昭和22年住職 現在に至る

西山の先々代のお婆さんは西藏寺の10世俊教和尚の妻でした。  
大正5年7月28日没 法満院駅尼弘宣靜真大祐 89歳 俗名 ヨシヲ  
その関係で、私の家に西藏寺関係の仏典の類が残されています。『柿木村誌』  
では俊教和尚を6世としていますが、墓石を見るかぎり誤りではないかと思  
います。

—西山 忠雄（70歳） 2000・11・12—

#### ＜西藏寺その他の話＞

○また、過去帳によると、西藏寺の檀家で葬祭の対象者数は次のようになっている。

天保 5年	2人	天明 元年	1人
6年	4人	2年	0人
7年	9人	3年	2人
8年	26人	4年	1人
9年	4人	5年	1人

○明治11年は、檀家が55戸となっている。

○昭和56年には、柿木 20、下須 30、白谷 20の計70戸となっている。

○喚鐘は、明和8年（1771年）に石州法師源住人 松浦善六が寄進。作者は郡司七兵衛 藤原信尚である。

「ご本尊の弥勒菩薩が、安政3年の火災で焼失した時のことです。お寺にと  
って、本尊が無くなるということは絶対にあってはならないことで住職の責任  
です。

当時の住職の妻がたまたま横道の鎮蔵寺から嫁いでいました。彼女は鎮蔵寺  
に阿弥陀如来が2体安置されていることを思い出しました。内助の功を發揮し  
て、さっそく親元に駆けつけ頼みに頼んで1体をもらいうけ、ことなきをえま  
した。現在のご本尊はその時からのものです。

—西山 智（76歳） 2000・11・5—

#### ○お寺の変遷

最初	大井谷ヤタイの地に創建
天保2年3月	井出ヶ原670番地に移転
安政3年3月25日	全焼
	同年 同地に桁7間 柱4間の本堂、庫裡1棟を建立。（俊教の代）
昭和14年	本堂再建の計画

- 昭和27年 用地を西山茂氏が寄進  
 昭和28年9月5日 本堂上棟式  
 昭和29年3月18日 本堂庫裡造作半ばにして仮入仏する。



写真3-6 西藏寺

## ○四藏寺 「安藏寺 鎮藏寺 法藏寺 西藏寺」

○寺屋敷（てらやしき） 西藏寺は、昔ヤタイの所にあり、現在は白椿のみが残る。井手ヶ原に移り、更に現在地に再移転する。寺屋敷と呼ばれる周辺の谷の傍には椿と共に墓が点在するという。筆者が現地を調査したが、竹やぶに覆われて墓を見つけることはできなかった。

## ④ 琳聖寺

山口大内氏の命により、三浦氏によって建立される。現在の白谷、西山氏宅の裏山の高い丘の上の平坦地がそこである。のちに柿木に移り、栄泉寺と名前を変える。

現在は、栗園を登ってその上の平坦地に土台石と思われるものが残っている。付近には墓所が散在している。

## &lt;柿木村誌「資料」より&gt;

「村誌1巻」の資料（岩谷）には、琳聖寺として次のように紹介されている。

応仁文明のころ建立する。 大藏院とも呼ぶ。

三浦家の位牌が安置されていた。

栄泉寺の住職は次のとおり。

1世	開山水椿大和尚	2世	中興闇鶴大和尚
3世	源清大和尚	4世	白翁大和尚
5世	湛瑞大和尚	6世	萬拙大和尚
7世	玄旨大和尚	8世	本隆大和尚
9世	泰然大和尚	10世	孝荀大和尚
11世	嘿如大和尚	12世	放牛大和尚
13世	大之大和尚	14世	如月大和尚

15世 祖紋大和尚 万延元年12月全焼する。 廉応2年 車裏、3年  
本堂  
16世 黙省寂仙大和尚 17世 義道分明大和尚  
18世 天真仏眼大和尚 19世 天涯哲眼大和尚  
寺宝 半鐘 天和元年鋳造  
3世の代に実際に開山する。积迦像が本尊  
境内に初代村長佐々木祐介の墓がある。  
棟札に 当山守護神 八幡大菩薩 天照大神  
春日大明神 柿本人明神  
白山妙理大権現 素戔牛頭天皇  
嚴島大明神 日本国内大小神祇

これは、神仏混じりの証だとしている。

#### <琳聖寺跡探索>

曇りでいかにも雨が落ちてきそうな天候だったが、万瀬・永安と西山忠雄氏の3人で琳聖寺跡を訪ねた。(2000年11月12日)

西山氏宅の裏手の栗園を30mばかり登ると雑木林につきあたる。ここから更に急な斜面を20mばかり登った所が平地になっている。下の国道187号線から見ると、大きな杉が立っているのを目印にするとよい。奥行が20m、幅が広いところで10mぐらいだろうか。ひと日見ただけで屋敷跡だと分かる。向かって左側(三町谷)の方が広く昔は石段があったという。

#### <三浦姓の墓>

琳聖寺跡に向かって左下手に西山氏宅の茶畠がある。茶畠の下に10基ほどの墓がある。いずれも三浦姓のもので、江戸時代の文化・文政(今から190年ぐらい昔)のころのものである。墓は2段重ねで3尺弱のどこにでもあるようなものだが「加賀守」「美濃守」といった字が刻まれている。

#### <神殿屋敷跡>

神殿屋敷と呼ばれる跡地は万瀬氏が子どものころには池とほこらが残っていた。

「100年ぐらい前になるだろうか。私が子どものころ聞いた話では、ここは三浦友孝という神主が住んでいた。父親は菅之助。代々神主で白谷三島神社、小森神社の宮司を務める。友孝は白谷神樂を立ち上げ教えた人でもある。そこ のすぐ右下の田圃を蔵屋敷と呼んでいた。殿様に献上する米を収納していた倉があったものと思われる。

-万瀬 幸男(86歳)- 2000・12・7-

## ⑤ その他の

### 下下がり前の地蔵様

三浦満氏宅前に地蔵様1体が、また道を挟んで斜め前10mほどの道路沿いに地蔵2体が、いずれも高さが2mを超す大石の上に安置されている。ここは大井谷の全景が見渡せる場所である。

三浦満氏宅前の地蔵の裏に明治4亥年 三浦石左衛門 同八左衛門 同五左衛門 又左衛門とある。誰かの供養のために祭られたものであろう。この地蔵はしばらくの間現在安置してある下手の岩の上に3体並べてあったが、30年前三浦才造氏の勧めで現在地に戻したという。7月17日が地蔵のお祭り日にあたり60年ぐらい前まではこの岩の前で踊りなどをして賑わったとのこと。祭りは当番制で大井谷地区全城の人々が集まっていた。

また、道路沿いの地蔵2体のうち上側にある方は、三浦敦紀氏宅にあったものを氏が津和野に住居を移転したおり（豪雪のおりというので昭和38年ごろか）、ここに持ってきて安置したものである。もう1体は三浦高嶺氏宅の水のみ場にあったものだが、いつの時代からかここに安置されるようになった。

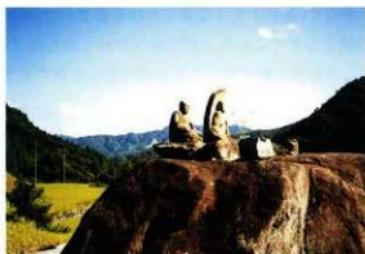


写真3-7 下下がりの地蔵

### 水天狗

中屋敷（故村上辰善氏宅）の上の山の中150mほどの所に大きな重なり岩がある。

東大井谷の三浦照夫氏宅前の道を登ると行き止まりの所から右に折れ、横の小さい道を進むと村上武史氏の造林地になる。造林地を過ぎるとすぐにあり「グーアインサー」と地元では呼んでいる。高さ7~8m、幅7~8mの巨大な团子状に重なった岩で、水の神様として信仰されていた。昔、座頭さんが各家で祈祷をした後、残された幣をこの岩まで持ってきて供えていた。ほこらもなく、特に決まった祭もなかった。この岩の付近には、他にも見上げるような巨岩があちこちに点在する。

## (5) 溪流と橋梁

大井谷の溪流は、大鹿山山系の引明ヶ迫と、青野山山系の向かい山の間に開けた集落の底部を流れおり普段の水量は少ない。架かる橋も、昔は丸太を切って渡した程度の小さいものが数か所ある程度だった。

### ① 大井谷川

大井谷地区の中央部の底を流れる大井谷川は現在のループ橋の辺りで2つの谷が合流する。上流の2つの谷は向かって右の方を元ヶ谷（大谷ともいう）、左の方を道ヶ谷と呼んでいる。ここから下流は大井谷川として井手ヶ原を通り高津川に合流する。

昭和40年ごろ以降河川改修が徐々に行われ、それまで生息していたヤマメなどの魚は次第に姿を消していった。

### ② 二つの橋

大井谷で名前のつくものは、助衛門橋、花田橋と藤十橋ぐらいである。これは大井谷川の谷幅が広いところでも10m前後しかなく、通行上大きな橋をかける必要がなかったことによると思われる。藤十橋については、地区の境としてそこから上方が大井谷という話もあるが、「柿木村誌」によると元西藏寺境内の境石を境としており、藤十橋より30mほど上った所の左手にある。

#### ○藤十橋

藤十郎橋ともいう。この橋を境に井手ヶ原と大井谷が分かれるとも言われる。橋の名前の由来は人名「藤十郎」によるもの。

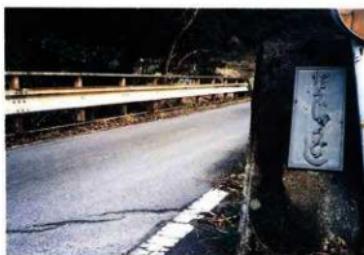


写真3-8 藤十橋

#### ○助衛門（右工門）橋

内匠屋の上。現在のループ橋が下から河原橋、花田橋（平成5年3月竣工）、雲海大橋（平成8年12月竣工）と順に円を描きながら上っていく。助衛門橋は現在の花田橋とほぼ同位置にあった。現在のループ橋の2番目の橋を花田橋と命名する時に助衛門橋の案も出たが、この辺りを花田ということから現在の花田橋となったという。

## (6) 史跡と伝承

大井谷全体の景観を創り出している棚田そのものが先人の残した史跡といえる。その他には、こうした棚田を開墾した三浦一族を中心とした生活に関わるものがわずかに残っている程度である。

また、伝承も固有の話は多くはないものの、厳しい地理的条件から生活の知恵的なものがいくつか伝えられている。

### ① 史 跡

#### ○助はんどう

村上一郎氏宅の左横上手にある。飢饉の時、水源地であったこの場所に石を削ってはんどう（水盤）を作り、地区的住民の飢えをしのいだ。苦しい時の互助精神は見習うべきものがある。作られた年代は江戸時代以前ではなかろうかとのこと。現在の大井谷のグループ「助はんどうの会」の名は、ここに由来する。

なお、次のような異説もある。

大井谷は、昔から水の豊かな地区である。少々の旱ばつでも谷水がなくなったと聞いたことがない。助はんどうと呼んでいる水源は、実は故三浦吉丸氏（現在は屋敷跡のみ残る）個人の手洗い場で、昔この水を飲んで飢えをしのいだと言うほどの水量もない。助はんどうとは、後の人があもしろおかしく命名したのではないか。また、助はんどうの「助」とは人の名前で「田助」又は「太助」である。田助（太助）が掘ったはんどうということから「助（たすけ）のはんどう」となった。



写真 3-9 助はんどう

#### ○白椿

寺屋敷と呼ばれる跡地の谷のすぐ傍にあり、5月ごろ白い見事な花を咲かせる。旧西藏寺境内の下手に植えてあったものが、天保2年（1831）に寺が移転した後も残ったもの。

「私が子どもの頃、ここは田圃になっていて、棚田が3枚ぐらいあったように記憶している。その中の町（まち）が寺の跡地と聞いていた。お寺の名ごりとして境石が立ててあったように思う。現在は林道建設時の残土で埋められ、シイタケのほだ場となっており、三浦徹紀氏が所有する。

—西山 智（76歳） 2000・11・5—

#### ○平重経の墓

遺骨は山口市仁保の源久寺に葬られている。大井谷にある墓は、明治時代初めに源久寺に行き了解を得て建立したもの。

※ 詳細は「(2) 各戸の系統」の項参照

#### ○蔵屋敷

津和野藩の殿様に納める年貢米の倉庫があった所。現在は田圃になっている。三浦一豊氏宅と三浦義美氏宅の間。元三浦新吉氏の屋敷のそばで、60cmほど高くして蔵が建っていた。三浦文一氏が畠だったものを田圃に切り替える。

#### ○鍛冶屋敷

昔、故三浦芳松氏（昭和2年まで）が住んでいた屋敷跡をいう。現在は杉林になっている。芳松氏宅は代々鍛冶職人で、鋤・鎌等の農業道具を主に作っていた。仕事場は家のそばの大岩で、5~6mもあるうかと思える。岩の下方がひさしのようになっていて、その下の大きな空間を利用して仕事場としていた。現在も岩の内側には炉の焼けこげ痕が残っている。大岩のそばを水が流れしており、鍛冶屋の仕事には好都合の場所である。

#### ○大井谷の境石

かつて西藏寺があった跡の境内にある。道路に面した2m弱の平長石である。石面には何も刻まれていない。井手ヶ原と大井谷の境界の石。

※ 詳細は「(1) 地名」の項参照。



写真3-10 境 石

## ○赤羽根の地蔵様

大井谷から津和野に抜ける街道沿いに、6体の地蔵様があった。昔、6地蔵は村境の街道沿いに安置され、旅の安全等を願ったもの。赤羽根の地蔵様は大井谷と福川、津和野の境付近で、峠を越えて少し下った所にある。現在3体残っており、そのうち1体は頭がなく、代わりに石が乗せてある。

物々交換だった昔は大井谷から津和野までワラジや干柿を持って行き、塩と交換してきた。塩が重いので、「スロを転がして帰った」という話もある。

## ○棚田の石積み

急傾斜に開けた大井谷は、田圃の全てが棚田となっており、見事な景観をかもし出している。三浦敏行氏の祖父の話によると、石積のほとんどは地域の住民の「ゆい」によって作られたものという。敏行氏宅の田圃も、もとはカヤが生えた雑草地だったのを開墾したこと。しかし、中には村上一郎氏宅の裏手の右手一番上の田圃のように、津和野の城を作った専門の石工が築いたもの伝えられているものも残っている。他に「上の田」と呼ばれる所、大谷の「門田」と呼ばれる所もそうであり、他の石積と異なり大きな石が見事に組まれ、整然とした並びの石積みであるのが素人目にも分かる。



写真3-11 上の田 石積

## ② 伝 承

## ○狐に化かされた話

昔、中屋敷（屋号）に用があつて、娘がふなが迫（屋号）から歩いて出かけたそな。夕方暗闇の迫るころ、細い道をとことこ歩いて行った。まもなく、谷尻のあたりまでやって来たと思った。どこからともなくほんやりとした灯りが見える。

「中屋敷の灯りだわ」

娘は近いような遠いようなその灯りをめざして歩いた。しかし、いくら歩いてもその灯りにはたどりつけなかった。

「おかしいわ。確かにあそこに見えるのに」

「本当なら10分程もかからないのに…」

あせりと不安が交錯するなかで、かれこれ1~2時間も歩いたろうか。娘はどうとう疲れ果てて、その場にへたりこんでしまった。と、しばらくして耳元でワイワイ、ガヤガヤ声がする。

「あんた、いったいどうしたんかね。こんな田圃のなかに座り込んで」

「着物がイギだらけじゃあなあかね」

「顔が丸っ背よ！」

言われて、ようやくわれに返って自分の姿を見ると、着物はあちこちが破れ、履いていたぞうりはなくなっている。まわりに集まつた近所の人たちが小声で交わしている。

「狐に化かされたもんじやのう」

村上 香（73歳） 2000・1・29

#### ○ゆうれいが…

大迫（屋号）の下の大谷に橋がかかっている。あの橋の下手に渡辺小屋とも市川小屋とも呼ばれていたあら小屋があった。この小屋は日本全国各地を渡り歩く木挽きが住んでおった。何でも市川という木挽きは親方格で、昔の大迫の家を建てた時の木道具は彼が全部そろえたとか。

この小屋に間屋敷（屋号）のおじいさんが隠居で下りてきて住んどった。昭和10年ごろの話。

夜になると「ザーザー」陣子を手で擦るような音がする。行くと音は止み、しばらくして前の谷の濁で「ボチャーン！」と何かが飛び込んだような音がする。不思議に思つておじいさんが出て確かめるが、人影はどこにも見当たらぬ。何度も確かめてもその正体は分からぬ。

いつの間にやら「あそこにはゆうれいができる」と言われるようになったげな。

三浦 照夫（72歳） 2000・3・19

※ こうした類の話は、寺屋敷の近くもある。

#### ○嫁入りに地蔵様

かれこれ昭和20年代まで続いていた嫁（娘）入りの時の本当にあった話。

大井谷では、結婚する娘さんの嫁ぎ先に地蔵様を置いて行く慣習があった。

娘さんが嫁ぐ前に、地区の若者たちは近くにある地蔵様（特にどこの地蔵様と決まってはない）を担いで「ワッショイ、ワッショイ！」の掛け声とともに嫁ぎ先である娘さんの家の間に運ぶのである。娘さんの家の者はそれを持っていて、若者たちが床の間に据えるとさっそくどぶろく酒とご馳走をふるまって礼を言う。盛り上がりれば地蔵様を1体だけではなく、2体も3体も荒縄を巻き付けて運びこむ時もあるのだから大変である。何が大変かって？ それは、後でこの地蔵様を元に戻すのは全部お嬢さんの家の仕事になるのである。

若者たちは地蔵様とあわせて、おから（豆腐のかす）に食紅をつけ鯛の形にしたものを、足付き膳に載せたものと、半切り桶（2～3斗入り）に酒ビン1～2本を入れたものと、3点セットで運ぶ。

この慣習は、地域の人々が心から結婚式を祝い「地蔵様のようにしっかりと腰を据えて欲しい。」との願いから。また「地蔵様にこれからこの家をしっかり守って欲しい。室内安全・無病息災を願います。」といった願いもあるのだろう。

なお、地蔵様を担ぐ時に歌った長もち歌の一節は次のとおり。

#～ (\*。^\*) これのおせどの人福徳、枝も栄えて葉も茂る…。

村上 香（73歳） 2000・1・29

三浦 貞（68歳） 2000・2・26

三浦 敬賀（85歳） 2000・8・5

\* こうした類の話は、村内のほかの地区でもある。

### ○崩れる炭窯の石積み

昭和の初めのごろの話。

そのころ、家庭や工場の燃料等に使われる炭を焼く炭焼き業が盛んに行われていた。

ここ大井谷地区でも、播州から炭焼き職人がやってきて住み着いていた。播州の職人はそれまでの石だけで積み上げる窯作りを改め、赤土の粘土を使い、木ワクを作つて石の間に詰めていく方法を紹介した。粘土は石のように重なく、大きさや形も調整できて仕上がりもきれいである。この方法により容易に窯ができるようになり、燃料用・原料用としての炭の需要の拡大とあいまって以後炭焼き業は急速に広まっていった。

その播州職人に小鉄という人がいた。小鉄が大井谷ヤタイの丘の上にある寺屋敷の近くで炭を焼いていたところ。

ある日昼寝をしていたら、夢のなかにお坊さんがでてきて、墓を指してなにか言いたそうにしているが何か分からぬ。夢からさめてふと見ると、今日もまた積んでおいた炭窯の石積みが崩れているではないか。崩れては積み、崩れては積み今までに何度繰り返してきたろうか。高さが2m近くもあるうか。立派な窯の石積みがわけもなくすぐに崩れてしまう。

小鉄は、この時、はたと思い当たることに気づいた。「先程の夢にでてきたお墓が、あそこにあるのかもしれない」西蔵寺は当時、守屋敷から下の麓に移転して間がなかった。さっそく小鉄は住職にこのことを報告にあがつた。「ううーん。そういうばひとつ、お坊様の墓がたらんと思うとった」あわてて崩れた所を掘ってよく見ると、丸い墓が出てきたではないか。ねんごろに供養をして下の西蔵寺に据えたところ、炭窯の石積みはそれ以後崩れることなく立派な窯が出来上がったといふ。

村上 香（73歳） 2000・1・29

※ このような話は私も聞いたことがあります。

「石積みが崩れる」とか「夢枕にでてきた」とかは話をおもしろくおかしくするためには脚色されたもので、炭焼師が仕事をしていて偶然見つけた墓石を井手ヶ原に移して安置した、ということでしょう。

墓石の移転は2度あって、最初は天保年間に井手ヶ原にお寺を移した時、そしてもう一度は林道をつけた10年ぐらい前です。この崩れた石積みの話はおそらく、今から70~80年も昔の話ではないかと思います。

西山 智（76歳） 2000・11・5

#### ○三輪様

終戦後間もない頃ですから、今から50年も前にもなりましょうか。

私は5月になると、決まったように日がかかるようになって見えなくなりよりました。

目えないと言っても遠くは見えるんです。足元周りが見えないので、米をぐるにもかどまの火も思うように炊けませんでした。

困った私はそのころ「よく当たる」との評判を聞いて、ワラをもすがる思いで津和野の○○教にみてもらいに行きました。

「お宅のせど（表）に五輪様（塔）があるでしょう。雨に打たれてお顔がずぶ濡れになっておられます。お墓に移してあげなさい」

家に帰って見ると、言われたとおり池の傍に五輪様の相輪の一部がなくなつて三輪になったものが放置されています。よく見ると母屋の杉がけのひさしが丁度真上にあり、雨が降れば零がこれにかかるのです。さっそく栄泉寺様を呼んで供養したあと、三輪様を家の墓に移しました。

不思議なもので、それ以後日が見えなくなることはありませんでした。よく聞きますとこの三輪様は昔、大井谷で田圃を開拓する人が亡くなり、他に埋葬するところがなくここに埋められたのだということです。

田村 ハル子（72歳） 2000・2・26

#### ○冷たい話

昔の話です。昔は今のように自動車もなければ自転車さえもありませんでした。柿木の方に用事に出かけ、歩いて帰ります。夕方日が暮れるころ井手ヶ原の赤谷尻のあたりにさしかかると、急に背筋が冷たくなってきます。（今思うと赤谷から谷水が出てくるからかも知れません）背中に何かが取りついたような「ゾー」とする冷たさは言葉に言い表わすことができません。誰となく「ゆうれいが…」とささやくようになりました。

現在水のタンクが据えてあり、道路がカーブになっているあたりがそうです。

三浦 良子（65歳） 2000・8・5

## ○相撲

昔、剣玉神社の秋祭りはにぎやかで、露店が並び神楽をはじめ地芝居や相撲などもありました。相撲は近隣の若者が集まり、勝負に勝った者は、1銭玉のつかみ取りが褒美として出たこともありました。

三浦 敬貴（85歳） 2000・8・5

## ○嫁入りの時に持たせる

嫁に行く時に餅つき用の臼を持たせることがありました。

「私のお爺さんの姉さんが六日市に嫁入りする時、内匠屋（屋号）のお婆さんに言われて臼を持たせたところ、落ち着いたといわれます。それまで朝倉、藏木と結婚に2度失敗していたので余程の思いがあったのでしょう。お尻の座りがいい（嫁ぎ先で居心地がいい）と言ふことでしょうね」

田村 春子（72歳） 2000・8・9

## ○基平淵

昔、今のループ橋の近くの剣玉神社の前の大谷川に基平淵と呼ばれる、幅3m、長さ5m、深さが大人の首の丈ほどの淵があった。その淵について子どもの頃、ひいばあさんからよく言われていたもんです。

「あそこは行つたらいけん。昔、基平という人が魚を釣りに行って死んだ。あそこには谷の主のエンコウがおるけえ」

またこうも言って恐ろかしました。

「あそこにスクモを流すと、福川亀田のカサマの淵（十郎淵のことか？）に流れ出る。谷の底に穴があって、福川までつながっているそうな」

そうは言つても子どもの好奇心から出掛けで釣り竿をたれるが、一度として釣れたためしがありません。淵のそばには大きな岩があって全体がコケにおおわれています。

故村上實直氏が言うには、

「昭和36～37年ごろでした。大谷の砂防工事で基平淵を埋めたとき、足の腰脛ぐらいもある太い鉛<sup>鉛</sup>がでてきました。捕まえようとしたがとうとう逃がしてしまいました」

しばらくして、奇妙なことに實直氏の黒々とあった髪の毛が抜け落ちて瞬く間にハゲに変わったといいます。ひょっとして淵の主のたたりかも…？

三浦 照夫（73歳） 2001・2・11

## 2 大井谷の生業

### (1) 産業の概要

大井谷川を挟んで、田圃が階段状に山あいをぬうように開かれている。こうした自然条件の中で棚田を利用しての稲作、山林資源を利用しての炭焼きや紙漉き等が主な生業だった。

「吉賀記」によると、津和野藩主吉見弘信の時代の正長年間（1428～29）に日原町柳村と大井谷で紙漉きをおこなった、とある。

「…正長年中三浦家はじめて紙漉きだす。誠に庵紙にして厚く、紙子のごとし。弘信これを賞したまい、所の郷士となしたまふ。天文年中まで吉見家累代ねんごろにしたまうところとなり…。」

更に「吉賀記」では、

「大井谷西藏寺妻防州山代三浦より來たり、紙を漉き始めるという。即ち西藏寺を最初ともいえり。」

とあり、2つの説を紹介している。いずれにしても大井谷の紙漉きは有名で「吉賀七名物」のひとつとしている。

一方稲作は「万手鑑」によると「明治4年の耕地反別は26町7反、総石高155石、家戸数が30、人数が116人」とある。古くから山の斜面を開拓して棚田での栽培が今日まで続いている。

また、大正時代から昭和30年代後半まで、炭焼きも地場産業として盛んだった。

#### <田圃の数>

「子どもが1人生まれたら、今ある田圃だけではとても家族を養うことは出来ません。子どもが食べる分を開拓して田圃にしなくてはなりません。こうして子どもが生まれたびに、田圃の数が増えています。」

—田村 春子（72歳）2000・8・9—

石積みによる田圃の大半は、こうして農開期に地域の人々によって徐々に開拓され広がっていったものと思われる。言い伝えによると芸州（広島県）辺りからやってきた石工職人が築いたものもあるらしい。事実大井谷の一番上の田圃（岡の上）や大谷の前の門出等の石積みは素人の積み方とは異なる見事なことがすぐに分かる。

### (2) 昔の稲作 ~40~50年前までの稲作~

明治時代ころから昭和20年代ごろまで行われていた稲作の様子は次のとおりである。大井谷の稲作も柿木の他地域の農作物と大きな違いは見られないものの③籾つくり、⑥苗作り、⑦苗植え、⑧脱穀等で棚田ゆえの特徴もみられる。

[春]

## ①荒起こし

男が牛を使って耕で起こしていく。農作業の始まり。

その際、石垣の崩れなどがあれば随時修繕しておく。

牛の堆肥を田圃にまで荒起こしをすることもあった。

3月終わりから4月初め。節句をめどにしていた。

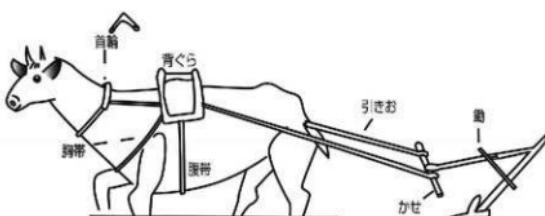


図3-3 荒起こし  
引きおには飼やまぐわをつけて仕事をする。

図3-3 荒起こし

## ②くれ返し

荒起こしをしたものを、更に細かく碎くために再度ひっくり返す。

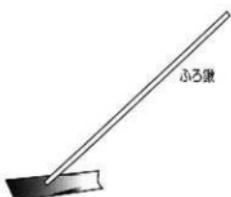


図3-4 畦つくり

## ③畦つくり

水をあてる。前年度のものを崩して改めて「あがた」と呼ばれるあぜを作り直す。それぞれの田圃ごとにする。赤土を山から持って帰り、足で团子状にねる。これを「こなす」と呼んでいた。家族全員で行っていたが、女性にはとてもつらいものだった。

4月初め。

## &lt;あがた&gt;

大井谷では、くれ返しの後で水があたってない状態の時「あがた」と呼ぶ荒畦をつくる。これは地盤が悪くモグラなどによる害もあって、水もちを良くするために使うもの。

「こなす→ねぐ→つける」の繰り返しで畦を作っていく。長靴のない時代だったので、だれもが素足のまま柄杓で水を打ちながらの作業はつらく、「その晩は足が燃えて寝られなかった」という。この作業を「水畠め」といい、昭和37~38年ごろまで続けられていた。

本畦は代かきのあとに他の平坦地と同じようにつくる。

#### ④荒がき

水をあてて土を水に馴染ませる。

〈水戸口の修理〉

尻水戸を10把ぐらいのワラを使い修理する。

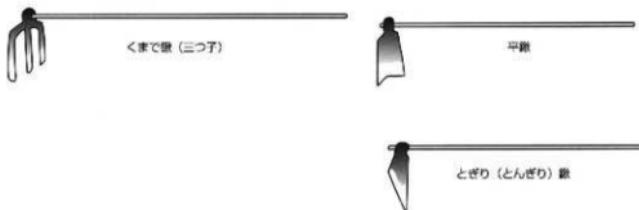


図3-5 鎌の種類

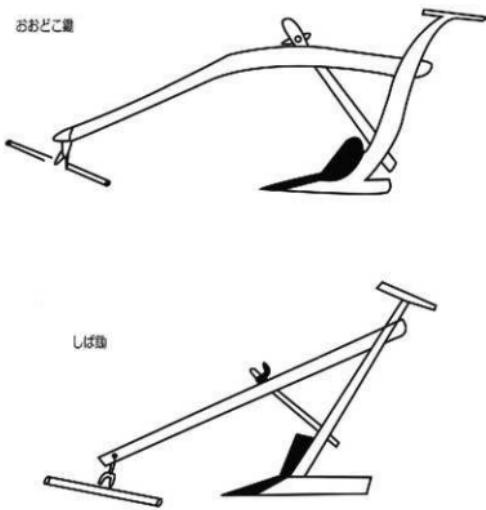


図3-6 鎌の種類

まず前年度のものを掘りあげ、ワラを2つ折りにし、土のなかに敷きこむ。次に土で固めて水路の形をつくる。しっかりと踏み付けて土が流れないように地固めてして出来上がり。

2反6畝(25~26町)の田圃で2日かかっていた。

現在はU字溝やヒューム管が取って代わりつつある。

馬ぐわで荒がきをしたあとに山からヒタキ(山の芝草)を刈ってきて、田圃に入れることがあった。

その場合、鋤でもう1度鋤きかえしてヒタキを土になじませる。荒がき馬ぐわは齒が長く出来ている。ヒタキは1度に14~15把ぐらいを負いにこ(背負い)で運んでいた。田圃に運んだヒタキは押し切りで小さく切りきぎみ、すきこみやすいようにしていた。生石灰も入れたこともあった。

生石灰は当時数少ない肥料の中のひとつ。

鋤を入れてすきこむことを「もくり(もくそ)」と呼んだ。

5月初め~中旬。

### ⑥ 本代かき

荒がきの時よりも少し短い歯のついたまぐわで更に土を細かく碎く。

えぶりをさして圃場を平らにする。

最後にいつ植えてもいいように男が仕上げの畦なりをする。

#### 〈田圃耕起の行程〉

荒起こしから代かきまでの行程は、平坦地の作業よりも手間をかける。3月の初旬ごろから6月中旬までほぼ次のような手順で行われる。

荒起こし → くれ返し → 荒がき → 木(もく)そ → 代かき  
(木あて)

#### 〈木(もく)そ〉

「荒がきがすむと、山からヒタキを運んで田のなかに入れます。これはだいごえ(牛の堆肥)とともに稲の肥料のためと、もうひとつの役割をもっていました。

それは、鋤ですかこむことによって芝が底にまわり水漏れを防ぐ役割をするのです。



図3-7 荒かきまぐわ

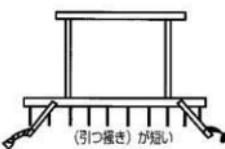


図3-8 しきかきまぐわ

## ⑥ 苗作り

4月の中～下旬にかけて初まきをする。塩水選で良質の粉を選び、1～2週間水に浸しておく。苗床が出来しだい粉を蒔く。昭和時代になると蒔いたあと保温のため油紙（保温折衷苗代）をかぶせる家もあった。

芽が出て12～13cm程度（3～5葉）に伸びると苗代の苗を本田に植えるために取り上げる。田植えの前日、又は当日の早朝、苗を苗床から取り、手で握れるほどの大きさにまとめて縛る。ひとつの中場で1反5畝ぐらい植える苗を作っていた。

同じ柿木村でも平場では、1つの町（圃場）に自分田圃の苗全部を作っていた。

※ 昭和20～30年代の稲の品種

農林44号（早稲） 新コマデ（ナンブウ）

亀治（晩稲） 近畿33号（中生）

稲は現在よりも長い丈のものが作られていた。これは、ぞうり・むしろ等に稻ワラを利用するのに便利だった。

## ⑦ 苗植え

網1本で植え付ける、木製の田車で線を入れる等の方法がある。

（田植え） 一般的に女の仕事。

代かきから苗植えまで男も女も裸足で田に入っていた。そのため、指に松笠のような逆目がおき指の爪も割れていた。

布で作った袋を指にかぶせることもあった。

「1日に1反8畝を4人で植えました。日暮になってしまっても植えるまでは田圃にいました。1本芯網を入れて、あとは目見当で植えていました。

—田村 春子（72歳） 2000・8・9—」

5月中旬～6月一杯。

### <大井谷の苗植>

植え方の一つに、1本のしゅろ繩を中央の一番長い所に張りそれを目安にして、後向きに植えていく方法がある。（村内では一般的に、繩は2～3本引いて直角を見ながら植えていたが町が小さいためにそれができなかった）

繩は等間隔に目印に赤・白玉を付けたり赤ヒモで縛り、植える目安とした。



写真3-12 田植え網

その他、田植え車やけた等を使うこともあった。



写真3-13 とんぼ



写真3-14 けた

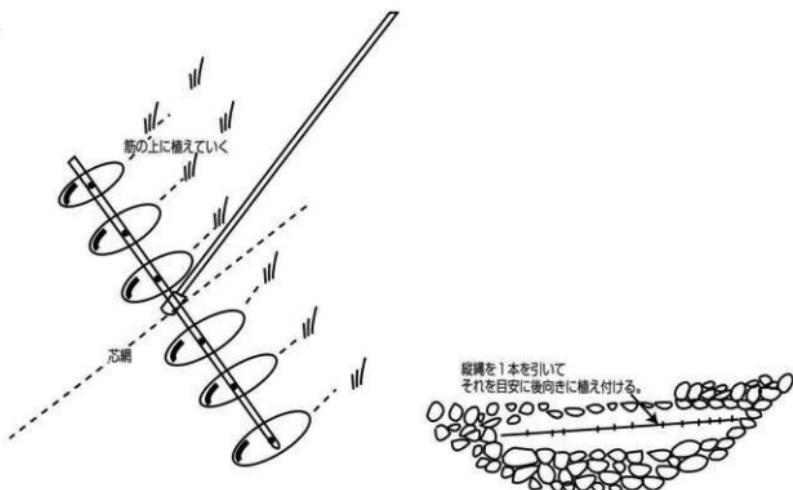


図3-9 田植え車

図3-10 田植え綱

[夏]

#### ⑧ 生育管理

田の草取り。最初が6月末から8月末までに全部で3回程度が普通、4回する家もあった。手取りで田圃を這うようにして取っていたという。あぜには大豆を植えていた。

水管理も大事な仕事。モグラやカニがあけた穴をつぶし、水が均等にいき渡っていることを確か



図3-11 鎌の種類



写真3-15 宮本式脱穀機

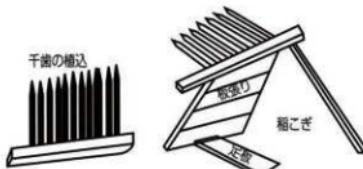


図3-12 千歯こぎ

めるために、朝夕「水まわり」をしていた。

プラスチックのあざなみを使うようになってから、毎日水まわりをする事はなくなつた。殺虫剤や殺菌剤はなかったので使わなかつたが、イモチ病対策に風呂の灰を撒いたこともあった。

### [秋]

#### ⑨ 稲刈

家族総出で刈り取る。5反歩を平均3人で、鎌で刈るのに10日かかっていた。刈り取った稲は、はぜに架けて2~3週間天日干しをする。

#### ⑩ 脱穀

昭和20年の前半までは足踏み式の脱穀機械で穀を収穫するのが主流。1町が小さいために干しあがった稲束を家に運んで脱穀していた。

それ以前はカネコギ千歯が使われていた。

昭和30年代に入り、発動機を使いベルトで動力を送ってする脱穀機械（佐藤式や宮本式の脱穀機械が主流）が広く普及し格段の省力化となる。1日に1反程度脱穀する。日中に稲束を家に運び、夕方から脱穀することも多かった。

脱穀や白ひきを家の土間でしていたため、現在よりも内庭の広い家が多かった。

#### ⑪ 白ひき

とう白、ほだ白、土白、などがある。

白ひきをしたあと、「とうみ」でもみがらをおろしていた。

昭和30年代になって地区で1~2軒（三浦初太氏他）が動力の白ひき機械を購入し、各家を回ってひいていた。

俵やカマスに入れて保存する。

収穫がほぼ終わると10月の祭まで牛のヒタキ（冬の牛舎用）を刈りに山に出掛けている。

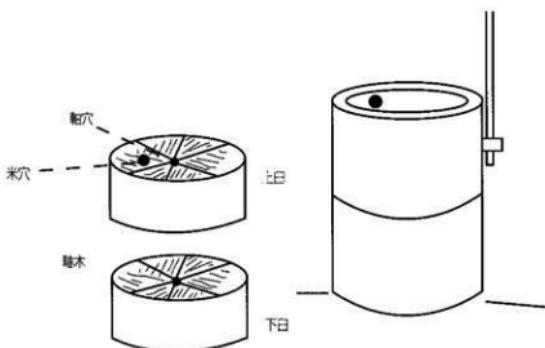


図3-13 石臼

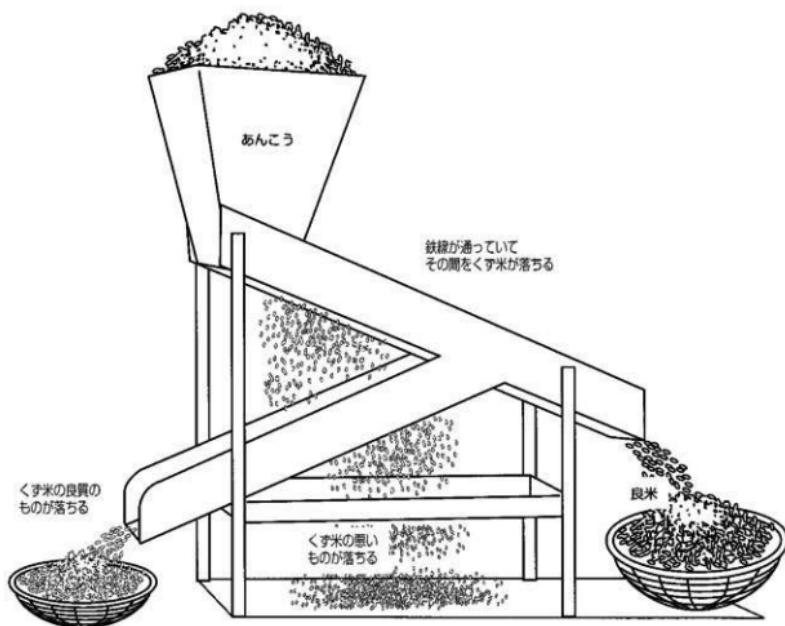


図3-14 まんごく

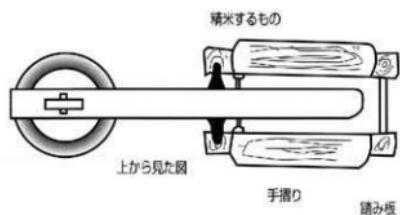


図 3-15　だいがら（平面）

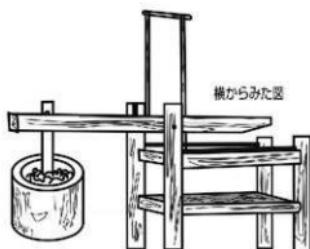


図 3-16　だいから（立面）

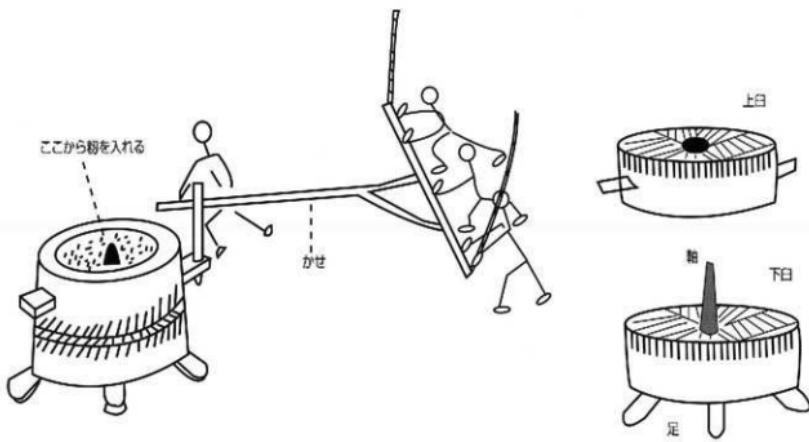


図 3-17　ほた（だ）白ひき

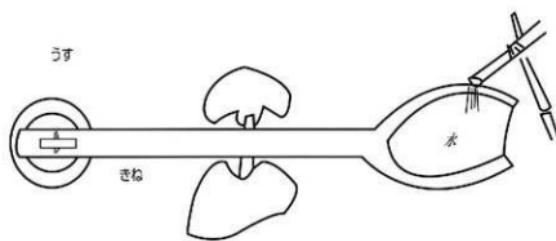


図3-18 そうず（平面）

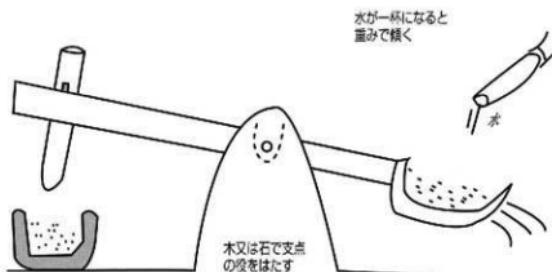


図3-19 そうず（立面）

## ⑫ 精 米

「そうず」と呼ばれる水車で1回に2~3升を精米していた。  
台がらでもしていた。足踏みの台がらは、子供のお手伝いのひとつでもあった。  
そうずは、てこの力点（台がらでは足で踏むところ）を水車の力で上下させるもの。  
夕方仕掛けにおいて朝取りにいき、再び仕掛けで夕方取りにいく。  
米にぬかがもぶれて、メリケン粉みたいになった。

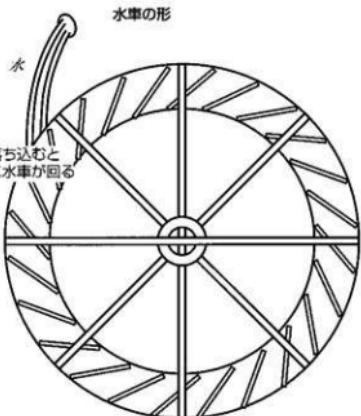
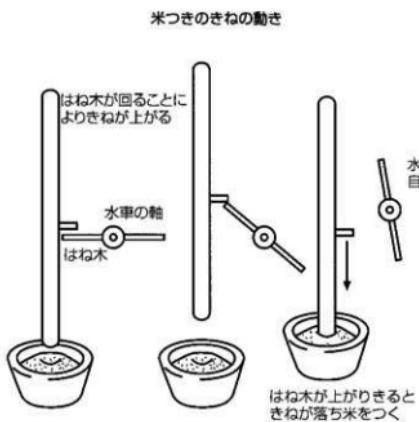
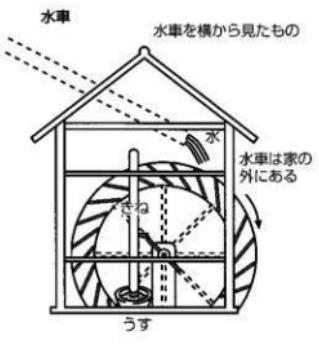


図3-20 水車

## [冬]

特別な農作業はないが、米俵を編む家もあった。

## &lt;道具をもとにした収穫の手順&gt;

- |              |                                      |
|--------------|--------------------------------------|
| i 千齒こき       | 稲穂をもぎ取る                              |
| ii もみおろし     | もみをごみと選り分ける                          |
| iii とう白（ほだ白） | 白ひき                                  |
| iv とうみ       | 玄米とかすを分ける                            |
| v 台がら（そうず）   | 精米する                                 |
| vi 万ごく       | 米粒とぬかを分ける                            |
| vii ぬかおろし    | 更にぬかを選別する。精米の量が少ない時は万ごくを通さずぬかおろしですます |

## (3) 稲作の移り変わり

山間で自然条件が悪いために、平坦地よりも農業機械の導入が困難である。また、大型の機械が使えず作業能率が上がらない原因にもなっている。

## &lt;耕作機械&gt;

- ①牛の時代 明治以前から続いていており、小回りがきく大井谷では好都合であった。
- ②昭和30年代ごろ テーラーが入ってきた。テーラーに傭をつけて耕作する。
- ③耕耘機の時代 テーラーとほぼ同じ時代に入り、労働の軽減に大いに役立つ。機械の値段が高いため、共同購入することもあった。
- ④トラクターの時代 昭和50年代に入って、小型（15馬力前後）のトラクターが入り、個人で楽に仕事が出来るようになる。現在の主流。

## &lt;稲こぎ機械&gt;

- ①千齒 江戸時代以前からあった。
- ②足踏み千齒機 昭和10年代を中心に昭和30年前半ごろまでは細々と使っている家もあった。
- ③脱穀機の時代 昭和20年代初頭からしだいに広まり、昭和30年代中ごろに最も普及した。動力部と脱穀部分が分かれしており、ベルトでつないでいた。  
家の土間が広くしてあり、ハゼで干した稲束を背負ってかつごこむ。作業は夕方まで続き、夜を徹して脱穀が行われていた。  
動力を使うことにより格段に作業能率があがるようになった。
- ④自脱機の時代 昭和30年初頭ごろから広まってきた。動力部と脱穀部が一体となった機械となる。機械が重く、棒を通して2人でかつぐのがとてもしんどい仕事だった。自脱機を田圃に運んで稲をこいでいた。
- ⑤ハーベスターの時代 昭和45～46年ごろから広まってきた。

一つの機械ではぜに干してある稻束を脱穀し、あわせて稻わらも小さく切って処分するようになる。

\*乾燥機が出回るようになり、はぜ干しから機械乾燥に移る。

#### ⑥コンバインの時代

昭和55~56年ごろから広まってきた。現在は主流。

一つの機械で稻の刈り取りもあわせてできるようになる。

### (4) 耕作面積の移り変わり

米余り現象から稻作の減反政策がすすめられ、特に山間地の棚田は小さい田圃で機械化が導入しにくい等の理由から「作りにくい田圃」としてしだいに休耕田が増えといった。

昭和30年代と現在を比較して話をうかがった。

#### <三浦 登 (63歳) 氏宅の場合>

- 昔 -

○耕作反別が8反ぐらいあった。

「椿原 (地名)」では1反5畝で田圃の数は33。

「口が谷 (地名)」では8畝で田圃の数が5。

- 現在 -

○耕作反別は3反2畝で田圃の数は16。

#### <村上武史 (72歳) 氏宅の場合>

- 昔 -

○耕作反別が9反ぐらいあった。

総計で田圃の数が60ぐらい。

「大ゴウレ (地名)」では田圃の数は20。

「引き上げ迫 (地名)」では田圃の数は6。

「古屋敷 (地名)」が一番大きく1つの田圃が6畝あった。

- 現在 -

○耕作反別は6反。田圃の数は30。

この他三浦貞子氏宅では、6反ぐらいが3反弱に。三浦敏行氏宅では、4反5畝が1反7畝にと、どこの家庭でも半分から3分の2ぐらいに耕作面積が減っている。

### (5) 稲作に関わるその他のこと

#### ① 稲作といい

代播きや田植えは近所や親戚の人が5~10人集まり共同で作業していた。いわゆる手間返しの形で「いい」とか「ゆい」とか呼ばれるものである。手間返しの順番はクジで決めていた。棚田で町(1区画)の面積が小さい大井谷では、3頭の牛が入っての代かきで1日5反余り、10人程度の植え手で2反5畝程度がせいぜい1日の仕事だった。

田植えは水のあたり具合により6月10日ぐらいから水取口で上手の方から順に植えていった。1

人が1日に植えるのは平均で3畝ぐらいだった。厳しい労働のために食事の回数も多く、朝6時ごろ自分の家で食事をとったあと、いい（ゆい）で伺った家で9時ごろ、12時ごろ、1時ごろの3回よばれ、自宅に戻って夕食をとるといった具合だった。1日に合計5回もとったということは、それほど重労働であったことを物語っている。また、田植えに来て戴く家も3度の食事の準備が大変であったらしい。

### ② 稲作と水管理

竹製の樋、栗木製の樋、杉木製の樋などがあった。竹製の樋は丸い竹の中の節をくりぬいて作るものや、半分に割って節をとって樋とした。また、栗木製や杉木製のものはU字状にくりぬいたり板を張り合わせたりして樋とした。杉で作られたものはやわらかくて長持ちはしなかった。

樋のないところは赤土で踏みつけて溝を作る場合もあった。現在はビニールパイプに取って代わられている。

下大井谷は概ね水は豊かで問題はないが、東・西大井谷の丘の辺り（大谷川周辺）になると水不足もあった。水ごいの祈祷も行われていたという。

### ③ 錆・鋤・くわ

大井谷にも鍛冶屋敷の名前が残っており、農作業の道具を地元で製造していた時代もあった。昭和時代になってからは、主に津和野との交流が盛んだったため、生活用品は主に津和野で買っていた。農具にしても、津和野の「雪野」「大谷屋」の金物店で買うことが多かった。

### ④ 石積みの修繕とぎしむしり

石積みは古くなったり、風水害などで崩れたり痛んだりしてくる。その修繕はそれぞれの家庭で行なった。また、積み石の間に生える草をとるのも大変な作業だった。5～7月ごろに生えるアザミを取りのに力を發揮したのが「アザミ取り」と呼ばれる大井谷特有の草取り道具。

しかし、現在では除草剤や草刈機械に取って代わられほとんど使われていない。

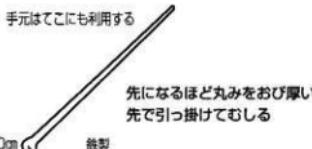


図3-21 アザミ取り

### ⑤ ヒタキとり

ヒタキとは山に生えるススキや熊笹などの雑草の干したものを使う。それぞれの家（または地域共有のものもあった。）にはヒタキ山といって栗やクヌギ等の落葉樹が点々とあるような日当たりの良い場所があった。ヒタキの刈り取りは家族総出で行っていた。9月になると稻刈りが始まるまでヒタキ山に行き、およそ1か月間刈っていた。大井谷では場所はタシ・道谷・口ヶ谷。

刈り取った芝草はツグロ（三角錐の形）にして山に置いて乾かす。1つのツグロに15～20把の芝草をまとめる。かわいたら40～50把を背負って持ち帰り、ヒタキ小屋に積んでおいて順次牛に踏ませ堆肥として使う。山から下ろすときには、近所の人を雇うこともあった。1日に3～4回が限度のヒタキかるいの作業はつらく夜遅くまで働いた。

## ⑥ 稲作用水としての池平の堤

昔、池平という所に堤があった。ここは元ヶ谷の一番奥に上がった所で左側にあり、大鹿山を少し向こうに行つた所である。大干ばつの時でもここには水を一杯たたえた7~8畝ほどの大きさの堤があった。大井谷の人々はこの堤の縁を掘切り、水を抜いて干ばつをのりきったという。今も堤があつたあたりは平らになって当時の様子を垣間見ることができる。

## ⑦ 天気の予測

西の方向が晴れていれば翌日は好天。北風が吹けば翌日は好天。南風に変わると翌日は雨。

三日月が受け皿の形で下3分の1程度、かすみがかかっていると翌日は雨。

大井谷の方から正面の長崎山をながめて、朝雲が一直線にたなびいていると晴れること間違いないし。その雲が乱れていると雨が降る。

## (6) 現在の稲作

昭和30年代に入って、農業機械の導入や化学肥料や農薬の使用などにより稲作は農作が統くようになった。昭和45年ごろからしだいに米余り現象が始まり、政府による減反政策が行われるようになる。以来30年間、稲作は減反を強いられる一方で、安くてうまい安全な米を追い求めてきた。

こうした情況にあって、今までともすれば敬遠されてきた山間地の棚田が見なおされるようになる。

昨今ではここ大井谷でも、町が小さく急傾斜のため機械化が困難な棚田ではあるが、小型機械を中心に戸トクター、田植機、コンバイン、乾燥機、Eヒキ機等が導入されている。

米に対する考え方も化学肥料や農薬を使ったものから、健康に配慮した有機農業に変わってきた。平成10年4月に助はんどうの会が発足し、都会の人をまきこんだオーナー制度や棚田トラスト制度の取組みも数年前から始まっている。

### [春]

- i 荒起こし トラクターまたは耕耘機で行う。くれ返しはしない。
- ii 畦つくり 畦なみを入れてその周りに土を寄せてつくる。土だけで畦を作るのはしだいに減っている。
- iii 荒がき トラクターまたは耕耘機で行う。
- iv 木代かき トラクターまたは耕耘機で行う。
- v 苗作り 育苗機で芽だしをして、育苗箱で3~5葉になるごろまでビニール等で保温して育てる。成苗を育苗センターで購入する家もある。
- vi 苗植え 2~4条植えの田植え機で行う。乗用の田植え機も使われている。

### [夏]

- vii 生育管理 水管理、肥料管理、病害虫管理、雑草管理等がある。減反で面積が少なくなったということもあり、いずれも上・日等を利用しての作業が多い。

## [秋]

- viii 船刈 小型（2条刈）のコンバインか、船刈機で行う。船刈機の場合、はぜ乾しをしてハーベスターで粉を収穫する。最近有機農業が言われるようになり、はぜ乾しが見なおされている。  
中には棚田のオーナー制度をとり入れ、都会の人たちとの連携をはかり昔ながらの農法で栽培されている田圃もある。
- ix 白ひき 機械を自家用で持っている人も、他の農家に頼む人もいる。
- x 精米 自家用で精米機を持っている人も、他の農家に頼む人もいる。

## [冬]

特別な農作業はしない。日曜などにトラクターで荒起こしをする程度。

## (7) 畑地の利用

一般的には用水の引けるところは田圃として利用されていた。紙の原料としてのみつまたやこうぞは山すそを切り開いて焼畑で栽培された。大根やかぼちゃ、きゅうりなどは宅地の周辺の小さな菜園で自家用としての栽培が主だった。

## ① みつまた・こうぞ

焼畑にダイコンや白菜を作り終わった後で苗木を植える。春には除草。2~3年目から伐採出来るようになる。最初の年は株をほとんど切り取る。次の年はそこから新芽が出てそれを切り取っていた。みつまた・こうぞの栽培は昭和30年代初めまで盛んだったが次第に衰退し今はほとんどない。

- i 木の切り取り。 11~12月 山で切りとり家に背負って帰る。  
蒸しあげるため薪の準備をする。
- ii 蒸し器で蒸す。 12~1月 1釜で2~3時間かかる。多い家では、1晩に12釜も蒸したこともある。
- iii 皮をはぐ。 1月 男女を問わず近所が寄り合いで夜通しに行う。  
寒い冬の辛い仕事だった。
- iv はいだ皮を乾燥させる。 1月 ハゼわくをつくり、洗濯物を干すように3~4日間で干しあげる。
- v 鬼皮を落とす。 1月 1晩水に浸したものを皮へぎ機（包丁のようなもの）で落とす。皮の表面をこさいで落とす。
- vi 荷づくり。 規格にあわせて乾燥したものを荷造りする。1束が5貫目。  
1月末が取引の終わり。

「正月の4日ごろから蒸して皮へぎ。最初の釜は3~4時間ぐらいで炊き上がる。2回目からは2時間ぐらいで蒸せた。夜通しの作業も再々だった。…ハイにして出荷していた。私の家では300貫目ぐらい出荷。冬中火鉢で火をおこしてそぐっていた。」

—三浦 登（63歳） 2000・8・27—

大井谷は柿木村で最初に紙漉きが始まったとされる。明治時代の半ばぐらいまでは、文書用だけでなく、紙子と呼ばれるこよりにした紙を作り、それを織って下着（「てくり」と呼んでいた）などに加工していたといわれる。

「実際に子供のころに祖父が着ていたの見たことがあり、『山に行ってもゴミが付かないし丈夫だ』と言っていた。当時は紙漉き舟も残っていた。」

大正時代になって、一般に上質の紙が出来るようになると『しらそ』にして、農協等に出荷するようになる。秋口になると、みつまた畑から切り出したものを、蒸しなべて蒸上げ皮を剥ぐ。それを乾かしてから水に浸け『鬼皮（皮の茶色の部分）』を落とす。溝に浸けておいて、手でそぐる（すぐ）作業は冬場の寒い時期で重労働だった。  
—三浦 フミヨ（82歳） 2000・3・11—』

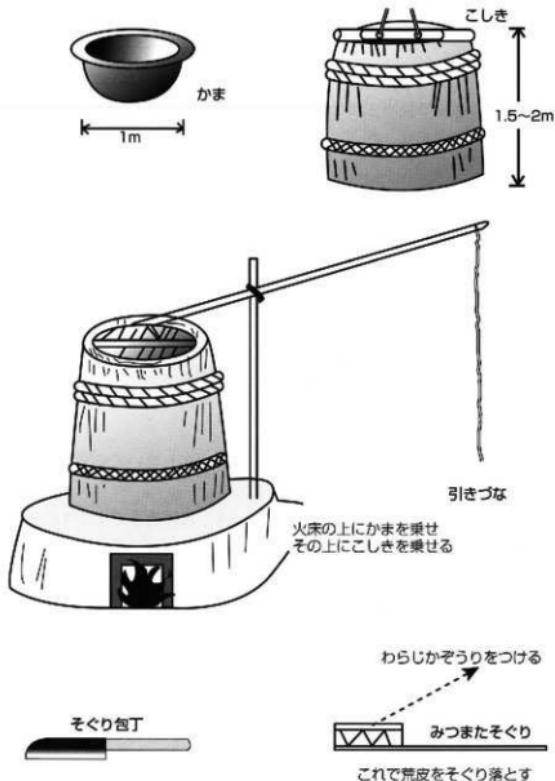


図3-22 みつまた製紙の道具

**② 麦**

稲刈りの後、10月の終わりごろに種まきをし、翌年の5月初旬に刈り入れた。脱穀はヨコロで叩いてすることもあった。足踏み千両も利用していた。

栽培品種は、はだか麦が多く、米と半々に混せて炊いて食べていた。小麦も作っており、醤油・メリケン粉等に加工して食べた。

「稻刈りが終わると、城の尾に小麦の種蒔きに出かける。肥料分が少ないほとりのみ肥やし（糞尿）をかけていた。翌年草取りをして刈取りは5月だった。そして、麦を刈ったあとはサツマイモを植えていた。

—村上 武史（72歳） 2000・8・27—

**③ きび**

6月初旬に種蒔きをして、10月末に収穫する。餅やだんごに加工して食べた。

**④ そば**

8月中旬に種蒔きをして、11月初めに収穫する。山の焼畑でみつまた、こうぞの木の下に植えていた。

**⑤ だいこん・白菜**

盆を壇にして、比較的なだらかな山の斜面の雑木を伐採し、焼き払って開墾する。化学肥料のなかった時代は大井谷でも焼畑農業が行われていた。ダイコンや白菜を蒔いて育てた後はみつまた、こうぞを植えていた。焼畑農業のため「昔は山火事がよくあった」とのことである。自家用として栽培。

**⑥ こんにゃく**

こんにゃくは2年程度で手ごろなこんにゃくいもができる。こんにゃくいもは秋に植え次の年は大きいものだけを取り、残りの小さなものは次の年まで待つ。

春に畑を耕しておき、草やゴミを広げておくと、6月初めごろに芽を出す。6月終わりごろにもう一度草取りをして、10月ごろ大きいイモだけを掘りあげる。

「イモは買いにくる業者に300~400貫日ぐらい売っていた。

—三浦 登（63歳） 2000・8・27—

「今年は猪が荒らして、40kgしか収穫できませんでした。いつもなら300~400kgぐらいとれます。昔は亀ヶ谷の方まで開墾して作ったものです。下さがりのおばあさんはイモからこんにゃくを作つて売つてもいました。

—三浦みつ子（79歳） 2000・11・4—

**⑦ あずき・大豆・その他**

あずき等の豆類も自家用として家の周りの畑や田圃の畦等で栽培された。その他じゃがいも、にんじん、ごぼう、かぼちゃ、きゅうり等も自家用として栽培された。

### <野菜種子の値段>

昭和11年に柿木村農会が各地区に取りまとめを依頼した通知文で、当時の野菜の種子の値段のおよそが分かるので紹介する。

柿農発第86号

昭和11年7月31日

柿木村農会

各区農会長 各農事実行組合長 各小組長 殿

蔬菜種子到着に関する件

秋蒔き蔬菜種子到着いたし候間、本年より本村産業組合購買部において左記  
値段を以って優良種子売り相成り候条、その旨御伝達の上努めて優良品種を購  
入せらるるよう御斡旋下され度、この段御依頼候也。

記

純白首宮重大根	1合	12銭	5勺	6銭
聖護院大根	5勺	8銭	1袋	5銭
山東菜	1袋	3銭		
結球白菜	1袋	5銭		
聖護院大かぶ	1袋	3銭		
雪白体菜	1袋	3銭		

## (8) 大井谷の農事暦

表3-2 大井谷地区的農事暦

月	穀類	大井谷の農事暦			
		稻	麦	穀類・いも類	山仕事
1					
2					
3	荒起し			馬鈴薯植え 甘藷苗つくり	炭焼き 造林 椎茸植菌 林地苗植え
4	苗代種苗き				
5	田植え	麦刈り		大豆蒔き	
6				馬鈴薯掘り	
7	草取り			小豆蒔き	植林下刈り
8				そば蒔き 白菜蒔き 大根蒔き	
9	稲刈り				ひたき刈り
10	脱穀	麦蒔き		甘藷掘り	炭焼き 椎茸原木切 こうぞ・みつまた切 薪切
11	白挽・調製			大根白菜収穫	こうぞ・みつまた調製
12		中打ち			

- \* 基本的には昔も今も農事暦は変わらないものの、農機具の変遷により多少のずれが出てくる。上記の表は大正～昭和30年代ごろまでを基本にしたもの。
- \* 草取りは1番草（積て20日ぐらい）、2番草（1番草から20日ぐらいたって）、3番草（2番草から20日ぐらいたって）と3回程度とっていた。
- \* 麦は水利が悪く、大井谷では部分的にしか栽培されなかった。
- \* 畿麥は、第二次大戦前に数軒がしていた程度。
- \* そばは、自家用に栽培していた程度。
- \* 稲は昭和30年前後から始まり、一時全村に広まったが全盛期は昭和年代ごろまでで、以後次第に、先細りとなっている。大井谷では春に出る春子が中心だった。
- \* 戦時中、サツマイモや馬鈴薯は米とともに政府に対して拠出の対象だった。
- \* こうぞやみつまたは外の表皮をはぎ白皮にして出荷した。

### 3 大井谷の生活

#### (1) 衣 生 活

明治から大正、昭和初期にかけての普段着として、男は腰ぎりにサルバカマ（もも引き）、下着はふんどし。女は腰ぎりに下着はジハン（襦袢のこと）、エプロンをかけていた。

山仕事などに出かける時は、手に手甲、足首に脚絆<sup>けはん</sup>、ぞうりやわらじを履いて出かけた。雨具としては、わら蓑、しろう蓑、こうら蓑などをつけ竹の皮で編んだサンバチ笠や編み笠等をかぶつた。

第二次大戦後、男はなっぽ服やシャツ、下着はさる股。女は作業着にもんべが一般的になる。もんべは現在のように足先がゴムひもで締めてなかった。下着はズロースがはかれるようになる。腕には腕抜き、頭には麦わら帽子をかぶるようになる。

※ 脚絆…布で作った足に巻くもの。はばきとはこうらやわらで作ったもの。



写真 3-16 蓑

#### (2) 食 生 活

食器は一人一人の箱膳で、箸や茶碗などは4～5日に1回洗う程度。毎日の食事の後、茶を茶碗に入れ洗ってから飲んでいた。椀や皿は第2次大戦ごろまでは、木製のものが主体。湯のみのこと

を、茶くみとよんでいた。炊飯用のは釜が始めたのは昭和になってから。それまではなべで煮炊きをしていました。

主食は明治、大正、昭和の時代を通じて米飯が主体だった。ただし第二次大戦中は食糧難で、大根飯、かぼちゃ飯やサツマイモ飯などを食べた時代もある。炭は明治時代から既にあって、経済状況により米との混入割合が変わった。

食事回数は5回のことが多く、朝飯（6時ごろ）、小ビルジャ（10時ごろ）、昼飯（12時ごろ）、昼からジャ（3時ごろ）、夕飯（7時ごろ）だった。小ビルジャと昼からジャは茶づけに漬物程度の軽いものだった。

食料の調達は自家菜園よりのものが主体で、大戦前後から、江崎や益田から1ヶ月に3~4回程度海産物の行商人がやってきた。品物はいわし、塩さば、昆布、いりこ等で現金の他に米で支払うこと多かった。

弁当は、竹製のマグモノや柳ごうりが使われていた。アルミ製の弁当になったのは、大正時代の末のことである。

### ① 普段の食事

○ご飯（麦飯） ○漬物（タクアン、白菜等）

○煮しめ（季節のもので大根、白菜、かぼちゃ、なす、じゃがいも、たまねぎ等）

○味噌汁（自家製の味噌で季節のものを具として使う）

こうした基本的なメニューにときおり、行商で岡見（益田市）から売ってくる塩さばが加わることもあった。朝食はやや粗末で、夕食は少し豪勢だった。

### ②ハレの食事

普段の食事は質素だったが、祭りや正月には出来る限りのご馳走を用意してお客様をもてなし家族でも味わった。

○まんさくの刺身 ○ちらし寿司（角寿司も） ○いもや紫蘇のてんぶら

○酢にんじん ○きんぴらごぼう ○豆腐のあげ ○吸い物

○さつまいものきんとん ○さつまいものてんぶら ○里芋いもの煮ごみ

○こんにゃくの煮物 ○さんとうと呼ぶ酢の物 等

### <口とりと呼ぶ大きめな皿に盛る>

○ようかん ○かまぼこ ○こんぶ ○まんじゅう ○みかんやリンゴ がつくこともあった。

### <ご馳走>

「普段の食事は季節の野菜を入れた煮しめと漬物、それに自家製の味噌を使った味噌汁程度が普通でした。ご馳走が出るのは、地域の秋祭り・正月・お盆といった季節の節日にある行事の時です。このような時には、親戚を呼んでご馳走をだしてもなします。」

○寿司 ○カマボコ ○ようかん ○てんぶら ○きんぴらごぼう ○揚げ豆腐

○こんぶ巻 ○卵焼き ○魚（さば・いわしの他シイラのさしみ刺身等もあった）

—三浦万寿雄（85歳） 2000・8・9—

### ＜泥落し＞

「6月28日から30日前後でした。男は朝早く牛の草を刈り終え、えさをやって後は休みました。女人の方はかしわ団子を作ります。昼からは柿木に映画を見に出かけたりもしたものです。歩いて約1時間。自転車で出ることもありました。

—三浦 登（63歳） 2000・8・27—

### ③ ケの食事

葬式などの食事は地味で、魚の刺身など生物を出すことは控えた。

○うどん ○こんにゃくの刺身 ○ひじきの煮物 ○人参、ごぼうやダイコン等の酢の物

### ＜口とりと呼ぶ大きめな皿に盛る＞

○かまぼこ ○こんぶ ○まんじゅう ○コンニャクや揚げ豆腐 ○みかんやリンゴ がつくことわざがあった。

### ④ その他食事に関するもの

#### ＜飲み物＞

各家庭には谷から飲み水を引いていた。谷のそばにある家は池などの水を貯める所に直接引き込む。谷から離れた場所にある家は、竹に穴をくったり、2つに割ったりして桶を作って水を引いた。竹の他に木を削って桶を作ることわざがあった。こうした水の取り入れ方は、場所によっては簡易水道が引かれる昭和の半ばまで続いていた。

水はそのまま飲み水として使われたり、煮炊きや牛馬の飼料などにも使われた。お茶は自家製の番茶でユルイ（いろり）にかけて沸かしたり、七輪で沸かしたりしていた。

#### ＜赤飯・餅・だんご＞

赤飯（おこわ）をする家はほとんどなかった。誕生日などで、小豆を入れた小豆飯を時々することわざがあった。

餅は正月餅を節季（年の暮れ）に搗いていた。近所の親しい婦人が手伝いにきて、夕方から深夜になるまで搗いた。1～2斗搗き終わると、ナマスと出来立ての塗りこ餅を食べて帰っていた。正月の餅がなくなると、また1～2臼について3月ごろまで食べていた。種類は、餅米だけの一般的なものから、うるちのクズ米を混ぜたあらかね餅、ヨモギを入れたヨモギ餅、きびを入れたきび餅、餅の中にあんを入れたあんこ餅やあんを餅の表面に塗った塗りこ餅などがあった。

だんごは、6月の末の泥落しに作る柏だんごが一般的。柏だんごは、お盆にもよく作られ夏の田舎のおやつといった感じ。餅米の粉を水で練ってだんごにし、その中にあんを入れて柏の葉でくるんで、蒸し器で蒸すとできあがり。

## &lt;味噌・醤油・酒&gt;

麦を蒸してこうじと混ぜ合わせ、むしろの上に広げ覆いをかぶせて温度を保ち発酵させる。1週間ぐらいでいい匂いがしてくる。蒸した大豆を混ぜて、おけに入れ1年間ぐらい暗い所に寝かせておく。汁が沸き上がると混ぜる。1年経ったら絞って瓶詰めにして醤油のできあがり。

味噌も作業は醤油とはほぼ同じ。材料は麦でも米でもよく、それにこうじと大豆を混ぜて餅つきのうすでつく。その時塩を入れておく。練りあがったらはんどうに入れて2~3か月もすると出来上がり。自家用に製造していた。

酒も基本的には米をこうじと混ぜて発酵させ自家用に製造していた。秋口から冬にかけて仕込み、床下などの冷暗所に保存してどぶろくとして飲用した。

## &lt;こんにゃく・とうふ&gt;

こんにゃくは焼煙で作られたこんにゃく玉を、豆腐は田の畦で作られた大豆をいずれも自家用に加工製造していた。各家庭には製造するための石臼や木製の臼があった。

## (3) 住生活

## ① 居間

昭和初期までは居間は食事室と兼用の家が多くた。暖房用と食事の煮炊き用にいろいろが掘ってあり、板の間に座布団を敷くか、ござが敷いてあった。いろいろは、次第に掘りごたつに代わっていく。

いろいろはゆるいとも言われ、台所の中央にあって自在かぎがかけられ、鉄瓶にお茶や煮物がのっていた。また、わて座には普通戸棚があつて、食事の食器類の他、置き薬、日用生活用品などが入っていた。燃料は主として木炭が利用された。ゆるいの周りの座席は、横座に戸主が、キジリには若い嫁が、というように決まっていた。

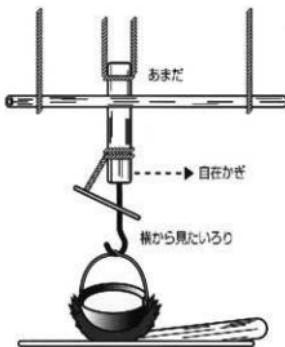


図3-23 いろり（正面）

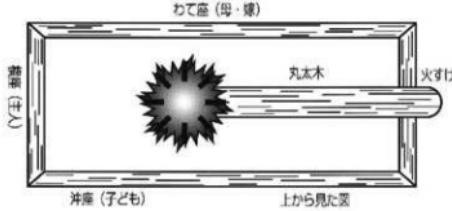


図3-24 いろり（平面）

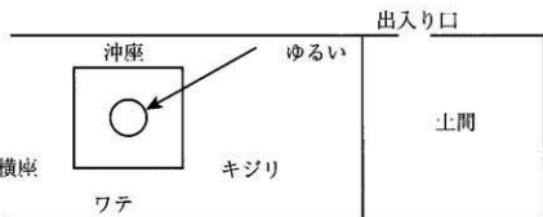


図3-25 板の間といろり

大正の末期までは、いろりを中心とした板の間での生活が家庭での中心であり、食事、団欒、時には寝床としても使われていた。天井は張ってない家が多く、火を焚いたり炭を入れておいたりしているために煙やススで屋根裏がこげ茶色になっている家が一般的だった。

昭和になって、いろりで炊事や食事をする習慣から土間にクズが作られるようになって次第にいろりはなくなった。また昭和の時代になるとコタツに炭を入れて暖をとる方法が一般的となる。

## ② 家の見取り図

動力の農機具が入り、農作業が居住用の家屋と別の作業棟で行われるようになるまでは居住用の棟の土間で農作業が行われていた。土間は広く作られ、農作物の取り込みが出来るようになっていた。三浦みつ子氏宅は、今から70~80年も前のものであり、当時の農家の一般的な見取りになっているので紹介する。

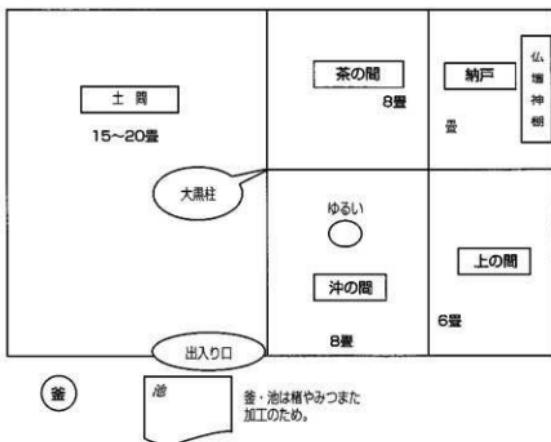


図3-26 農家の間取①

大工の三浦敬貴氏（85歳）によると60～70年前に作っていた、一般的な家の作りは次のようなものだった。部屋の呼び名はちがうが言っていることは同じ。

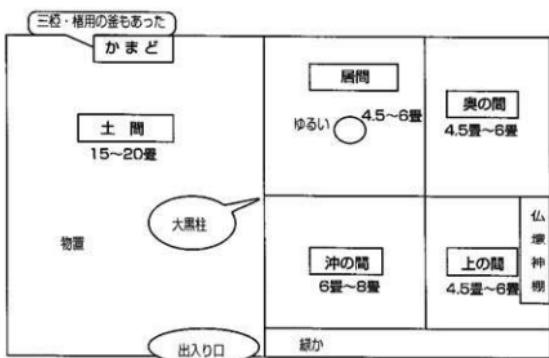


図3-27 農家の間取②

\* 火災予防もあって風呂は別に風呂小屋を作るか、露天の風呂もあった。  
牛小屋は、家の位置どりにより母屋の右又は左側に併設していた。

### ① 一日の生活

明治・大正から昭和30年代初めごろまでの一日の生活は次のとおり。

#### [春]

ワサビの出荷。前の日にワサビ谷から取ってきておいたワサビの葉と根を取ってきれいにして農協や市等に出す。コンニャク畑の畑打ち。自家菜園のきゅうり・なす・かぼちゃ等の種蒔き。田圃の準備。なかでも咲作りが大変な作業だった。みつまたの畑打ち（耕す）。福川との境あたりの亀ヶ谷まで行く。今も畑跡には、当時のみつまたが残っている。

#### [夏]

田圃の草取り、畦刈り、水まわり。コンニャク畑の草抜き。自家菜園の草抜き。  
牛のえさにする草は毎日のように刈り取っていた。

#### [秋]

稲の刈り取り、出荷。鎌で稲を刈り、ハゼを作り、センバで脱穀と大変な作業。ヒタキ（茅などの山草）おろし。春先に刈ってノウ（円錐状にまとめておいたもの）にしてあるものを、田圃に広げる。みつまた切り。みつまたを山から切って下ろし、蒸して皮を加工して出荷する。この作業は

冬まで続く。9月にはワサビの植え付けもある。

### [冬]

みつまたの皮剥ぎ。「しらそ」にして出荷。むしろを打つ（作る）。炭焼き用のスゴ（カヤであんだ炭を入れる袋）編み。わらぞうり作り。

年中の仕事として、男は炭焼きや山の手入れをしたりで、女はその手伝いをしていた。また、大井谷は牛飼いが熱心で、どこの家も牛を大事にしていた。これは狭い農地と関係があるものと思われる。

### ② 農繁期の生活

明治・大正から昭和30年代初めごろまでの生活は次のとおり。

農作業の忙しい時季は2回ある。まず、田植えの時季の5～6月であり、次が収穫の10月ごろ。小・中学校も昭和30年代には5月の下旬から6月にかけて1週間程度の農繁期休みがあったほどである。

i 起床 夜明けとともに起きていた。時間で4時半～5時ごろ。

起きると牛の草を準備してから朝食。朝食がすむとすぐに外で仕事にかかる。春は田圃で稻の苗を植え付ける。秋はヒタキ刈りなど。

小昼→田植え時季には10時ごろご飯と漬物程度の食事をしていた。

ii 昼食 12時ごろで今と変わらない。

昼から茶・3時ごろ「小昼」と同じ食事。食事後は日が暮れるまで外で仕事。

iii 夜 夕食が8～9時ごろになることもあった。稻こぎなどの時には夕食後更に仕事をして夜更けから夜明けになることもあった。

特別に用のない時は概ね9～10時ぐらいには寝ていた。

### ③ 農閑期の生活

明治・大正から昭和30年代初めごろまでの生活は次のとおり。

秋が終わり、冬から初春にかけては、比較的ゆったりした時期を迎える。この時季には男は、炭焼きをしたり、昭和30～40年代には山麓方面に出稼ぎに出たりしていた。

i 起床 夜明けとともに起きるのが一般的。6時前後か？ 起きたら牛の草の準備、そして水廻りといった仕事をすませて朝食。

ii 昼 昼食 12時ごろで今と変わらない。

冬季で外仕事が出来ないときは、家の内でわら仕事をする。

iii 夜 夕暮が早いので6～7時には夕食をとるのが一般的。「ようなべ」と言って綿ない、すごやむしろ、ぞうり等を夜おそくまで作る家庭もあった。

主婦の仕事として、「ぼろ洗濯」といって古着物を縫ったり、解いて新しく衣類を作ったりもした。

## &lt;朝倉村誌より&gt;

近隣の六日市町の「朝倉村誌」に生活用品が一般に使われ始めた年代が記されてあったので紹介しておく。

- |                                     |                |
|-------------------------------------|----------------|
| ・雨傘及び猫下駄 明治20年ごろ                    | ・こうもり傘 明治30年ごろ |
| ・帽子 明治35年ごろ                         | ・靴 明治40年ごろ     |
| ・綿製の紋つき袴 大正元年ごろ                     | ・トンビ 大正3年ごろ    |
| ・はばきの代わりに巻き脚絆 大正6年ごろ                | ・柱時計 明治40年ごろ   |
| ・懐中時計 大正5年ごろ                        | ・自転車 明治41年ごろ   |
| ・瓦ぶきの屋根は明治30年ごろ学校舎等で初めて採用 (民家は茅葺ふき) |                |

## &lt;蔬菜及び果実の販売価&gt;

各地区組長宛に出された昭和15年の価格表。戦時下にあって、物価高騰をふせぐために小売価格を示したもの。手書きのガリ版印刷で配布されており、村が物価の動向を見ながら示したものと思われる。

表3-3 蔬菜及び果実の販売額(昭和15年)

種別	品種	単位	期間	小売価格
柿	富有・次郎 葉隠・其の他	100匁 同		20銭 13銭
栗		同		15銭
じゃがいも		同	7月より10月迄 其の他の月	4銭5厘 6銭
たまねぎ		同	6月より8月迄 其の他の月	5銭 7銭
さつまいも		同	10月より翌年3月迄 其の他の月	4銭 6銭
きゅうり		同	7月より10月迄 其の他の月	7銭 12銭
かぼちゃ		同	7月より11月迄 其の他の月	5銭 7銭
なす		同	7月より10月迄 其の他の月	6銭 12銭
トマト		同	7月より10月迄 其の他の月	7銭 15銭
だいこん		同	10月より翌年2月迄 其の他の月	2銭5厘 4銭
かぶ		同		4銭
にんじん		同		7銭
ごぼう		同		7銭
ねぎ		同		6銭
さといも		同	9月より翌年4月迄 其の他の月	6銭 9銭
れんこん		同		12銭
きやべつ		同	6月より翌年2月迄 其の他の月	5銭 6銭
けっきゅうはくさい		同		5銭
きょうな		同		3銭
つけな類		同		3銭
ほうれん草		同	11月より翌年3月迄 其の他の月	7銭 10銭
みつば	切みつば 根みつば	同		40銭 7銭

## 4 大井谷の社会

### (1) 親子関係

親のほうをカナ親、子のほうをカナ子と呼ぶ。カナ親には近所の子どもや親戚の子ども等が相談相手になるような頼りがいのある人になってもらった。

こうした親子関係をもつと、子分（カナ子）になった方は、一生の務めとして盆・正月には必ず親分（カナ親）の家に酒・もち等の贈り物を持って伺うことになる。親分は子分をもてなし、土産を持たせて帰らせる。中には3～4人の子の親分をしていた者もいた。

### (2) 講

天神講があったが、昭和20年代ごろまでに廃れた。

頼母子講も普請頼母子のように大きな額のものから、着物頼母子や負債の返済に充てる等まとまとったお金のかかる時に講がつくられていたが昭和の終わりごろまで廃れた。民間の金融組織で無尽講のことを言う。人を募ったり、お金の受け取り、寄り合い場所の提供などたりする人を親と言い、おおむね資金が早急に必要な者が親となることが多かった。

#### ＜頼母子講の仕組み＞

一般的に行なわれていたのは「さし頼母子」である。さし頼母子の場合は、仮に6人で総額600円とすると自分が出したのを含めて

1番に取った者は 600円

2番に取った者は 608円 (1番の利子8円が加わる)

3番に取った者は 613円 (1番の利子8円と2番の利子5円が加わる)

早く現金が欲しい者同士が「利子をいくら支払うから」ということで札（さし）に書き、一番高い額を提示した者が1番くじを引きあてる。仮に5分と書いた者が「親」になった場合、その者は最後まで8円を余計に持って集まる。2回目の時も同じように札で取る者を決める。仮に5分と書いた者がとった場合、それ以後はその者は5円を余計に持てることになる。さし頼母子も毎月行なわれるものから半年に1回といったものまであった。

### (3) 虫祈祷等

「水稻などが病害虫の被害にあわないように」との願いから神主を招いて祈祷を行っている。現在は7月の初め（第1日曜）に神社の総代4～5名が集まってするだけの簡素なものになった。昭和30年代までは、白井（桟谷）の愛宕神社から神輿を借り受けて田圃のまわりを練って歩いたこともある。

同様に雨乞いも行われていた。鐘を叩き調子をとって、大きな数珠をみんなで練って念佛をとなっていた。数珠は最近まであったが、今は行方不明。

「祈祷師として覚えているのは、水崎のお婆さん、亀田の斎藤福治さんの奥さん、左鎧折元の宮司さん、三浦才造さんなどだった。今はすべてお亡くな

りになっている。

—三浦万寿雄（85歳） 2000・8・9—

#### (4) 置き薬

富山から薬売りがやって来て、置き薬を販売していた。戎屋、才田屋と言った薬屋が1年に1回、秋から冬にかけて定宿をとり1軒1軒訪問する。風邪薬、円薬、消毒薬など簡単な家庭薬として重宝した。子供にとっては薬屋が置いていく紙風船や双六がとても楽しみだった。現在も細々と続いている。

#### (5) 婚姻

仲人をたてた結婚が一般的だった。明治時代から大正・昭和時代の初めごろまでは、結婚式当日まで相手の顔を1度も見たことがないといったこともあった。本人よりも家柄・社会的な地位などが重視される時代だった。第二次大戦前後から昭和の末ごろまでに少しづつ変わっていった。まず仲人が紹介した見合いから始まる。よければ2人の交際が始まり、話が決まれば結納の儀式が行われる。結婚式は一般的に地域の氏神様に報告し、もらい受けの家で行われた。結婚年齢も15~16歳からと若かった。生涯で出産する子どもも昭和10~20年代には5~6人は普通で、10人を超えることも珍しくなかった。

##### i 配偶者を決める

本人の意向もさることながら、親が承諾することが条件だった。親が見つけた相手も多かった。

##### ii 仲人を頼む

地域の有力者がなることが多かった。困った時の相談相手として以後付き合いが続けられる。

##### iii 結納

仲人が婿の家から結納用品一式を預かり嫁の家に向いて渡す。

##### iv 結婚式・披露宴

もらいうける婿の家で三三九度の杯から始まる。謡が入る。大縁の契りの杯を終えた後、親子の契りの杯、親戚の杯も酌み交わされる。披露宴は2日に分けて行われることもあった。

##### v 顔見せ

披露宴が終わってひと段落してから、夫婦と一緒に地域の家をまわって「よろしくお願ひします」の挨拶と式のお礼を言う。

#### (6) 葬式

葬式のことを新亡<sup>しんろう</sup>と呼ぶ。新亡には親戚・縁者を始め地域の者が集まる。

「どうも様子がおかしい」という危篤事態になると身近な親戚と隣家の者が集まり、最後を看取る。亡くなるとそこに居合わせた家人が講組の組長に連絡し組長から地域に沙汰がある。地域の者は、昼夜に關係なくすぐに亡くなった人の家に集まる。簡単な経合が置かれ、附子と水、花等が備

えられ予め連絡しておいたお寺の僧侶がまくら枕経をあげる。その後、組長を中心に葬儀の日取り等の大まかなことを決める。仏滅・友引を避けることが多かった。なお、深夜などの場合は日取り、役割分担等は翌日にまわす。

#### ＜死直後の動き＞

- 親戚・縁者、地域への沙汰。
- 死体を上の間または奥の間に移し、北枕に寝かせる。
- 死後硬直がおきる前に合掌させ、簡単な見縊いをする。
- 神棚に半紙を貼り、死体の前に経台等をおき簡単な仏前をつくる。
- 枕経をあげる。

葬儀の人よその日程が決まると、講組のものはいったん帰る。家族の者、近親者が集まり白の柄で死の装束を纏う。肩衣・長着、襦袢・帯・腰巻・足袋などである。

湯かんといって死体をぬるま湯でふき、身丈度を整えて寝かせる。葬式の前日は通夜になる。僧侶の読経に合わせて、講組の者、近親者がお経をあげる。終わるとお茶と簡単な菓子程度のものが出されて、しばらく故人をしのんで話す。講組の者が帰った後は、近親者が一晩中線香をたいて死者の守りをする。これを「夜とぎ」と呼んだ。

#### ＜葬儀までの動き＞

- 講組の婦人は、葬儀当日の料理の準備をする。
- 男は帳場・坪打ち・祭壇づくり・婦人の手伝い・お寺係り等、役を決めて動く。
- 火葬の場合は燃やす木の準備も行う。

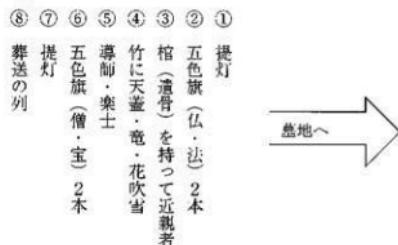
- 通夜は、講組はまとまって行動し、長居をせずに帰宅する。

葬儀には、白米1～2升と香代、それに供え物等を持参する。花輪や果物籠等が供えられるようになったのは、昭和30年代以降のことである。葬儀に先立ち死者を納棺する。その際に、頭陀袋に生前本人が大事にしていた小物や、近親者の爪や髪の毛を切って入れる。また、三途の川を渡るために、1文銭を入れたりもした。棺は土葬の場合は縦形のものが使われる。近隣の大工さんに頼んで作ってもらっていた。

読経が終わり棺に先立って棺を扭いで3回、左回りをしてから家を出て墓地へ向かう。

土葬で行われる野辺の送りは、提灯を先頭に竹に結わえ家を出て鐵旗を逆ねる。僧侶のリン（ワシコ）に合わせて太鼓、鉢を「チン・ドン・シャン」と鳴らしながら墓地まで送る。墓地に着くと読経のあと予め掘ってあった土に棺が埋められる。この際故人の後継者が最初で、近親の者から順に土をかけて行く。鍵は「不幸が続かないように」とのことから、手渡しではなくいったん置いて次のものが使うようにした。

## &lt;野辺の送りの列&gt;



参列者はこの後斎を戴いて帰る。講組の者は、葬儀の後始末をしてから精進落としの斎につく。斎は質素な精進料理で、魚の代わりにこんにゃくや豆腐が使われることが多かった。食事が終わると、講組の代表を中心に念仏をあげる。このときは僧侶は居らず、組の長老が鐘を打ちそれに合わせて地域の者は念仏を唱え、最後に焼香して帰る。

土葬の風習は昭和30年代中ごろまで続いていたが、六日市に火葬場が出来てから次第になくなつた。

一方、病死等の場合は地元で火葬も行われていた。鍛冶屋敷の裏手の山を右に約30分ぐらい登った所の温ヶ淵で平坦地（平柳山の裏側、大鹿山山系）にあった。三浦登氏の記憶によると、昭和30年代の初め頃、山師で九州の方から大芦谷に来ていた人の奥さんが亡くなり、墓地がなかったので火葬にしたのが最後ではなかろうかとのこと。

火葬の仕方は、木炭4俵程度を下に敷きその上に棺を乗せる。棺の周りにマキを積んで、更にその周りを藁で囲いをして炎が外に出ないようにしておく。（木炭を下に置くのはマキが燃えたあと炭火で焼くため。）一晩焼いて次の日に骨を捨う。

## &lt;葬儀当日&gt;

- 婦人は調理。接待。男は帳場、会場の設営など。
  - 僧侶により死者に戒名がつく。
  - 葬送の儀式と野辺の送り。
- 葬儀の翌日に、お世話をになった檀家のお寺にお礼参りにあがる。以後忌明けの四十九日までの7日毎に、寺に参り四十九日の法事は自宅で行われた。法事には講組、親戚等が招待された。

## 5 大井谷の交通

### (1) 人の移動

明治・大正時代は、徒歩による移動が主であり、とりわけ大井谷のような急峻な山道の多い集落は他の手段はなかった。年寄りや病人等は若者が背負って移動した。自転車が始めたのは第二次大戦前後からである。昭和30年代からバイクが始め、昭和40年代になると、各家庭に自家用の自動車が普及する。

#### ＜移動と灯明＞

人間の夜間の移動には明かりを必要とする。電池の普及する昭和の中ごろ以前は灯明が使われていた。

- ・松の木を小さく削って束ね、たいまつとして使う。
  - ・杉の皮を叩いてそれを芯にして周りをワラで束ねて使う。
  - ・竹を叩いて細かくしてそれを芯にして周りをワラで束ねて使う。
- 等があった。「こうした灯明が5本あれば津和野まで行って帰った」と言われる。

### (2) 物の運搬

野菜などの運搬は、竹製のテゾウケ（てみ）かざるに入れて運ぶ。量のかさむヒタキや堆肥などは、トンヌス（とりのす）で担いで運ぶ。糞尿は木製のタゴと呼ばれる桶に入れて天秤で担いだ。米俵などの重いものはシャリキ（大八車のこと）を柿木村ではシャリキと呼んでいた。シャリキは「車力」で本米、大八車に乗せて運搬する人を指すが、柿木村では車そのものを呼んでいた）に乗せて運んだ。シャリキは昭和の初期までは車輪も木製で外枠に鉄の輪が巻かれたものであった。

第二次大戦前後からゴム製の車輪が使われはじめたが、昭和30年代に入るとシャリキは次第になくなかった。シャリキを小さくしたねこ車（1輪車）はシャリキと同じように使われるが、昭和初期は木製であった。鉄製になった現在でも土木関係や家庭の菜園などでよく利用されている。

山仕事で炭焼きが盛んだった昭和30年代までは負いニコと呼ばれる木製の背負いが使われ、頑強な男性は3俵から4俵背負って山を降りる者もいた。

木材などの運搬は木馬（キンマともキュウマとも呼ぶ）で行った。横幅2m前後の道があれば枕木（横木）を置いてソリ状の木馬に4~7本前後の木材が運ばれる。第二次大戦前後からは、架線をひき空中に吊り上げて運ぶようになった。架線の利用により山奥で道のない所からでも木材が出せるようになる。

(聴取りの記述部分の敬称は略させて頂いた。)

永安 恵治

## 第4章 棚田の石垣



## はじめに

鳥根県鹿足郡に属する大井谷村は、明治4年（1871）の津和野藩の資料『萬手鑑』によると、当時の総高は155石で反別26町7反となり、1反当たり5斗8升強の上地生産性を示していた。また家数は30戸となり、1戸当たり3石1斗・8町9反の労働生産性を示し、人数は116人で1戸当たり3.8人強の家族構成であった。更に牛18頭となり2戸で1頭を保有し、米蔵は集落内で1棟所在していた。

明治8年（1875）の柿木村役場資料では、大井谷村は東隣の白須山村と合併し白谷村となり、明治22年（1889）の町村制施行に伴い、柿木村の誕生とともに大字白谷となった。現在大字の基本的構成は耕地字では白谷上・白谷下・井手ヶ原・大井谷の4地区となり、山林字では大字白谷に統一される。

平成12年（2000）の『2000年世界農林業センサス』によると、大井谷地区での総農家数は12戸で、販売農家数は9戸で自給的農家数は3戸となっている。第2種兼業農家9戸の内で、農業主世帯主は3戸のみである。世帯員数は合計39人で、14歳以下は2人、15~44歳は10人、45~54歳は4人、55~64歳は9人、65歳以上は14人となり、若年労働者と老齢者とが大勢を占めている。1戸平均の家族数は3.2人強で、夫婦2人と子供1人か老人1人を合わせた家族構成となっている。

販売農家の内で基幹的農業従事者数は7人で男4人・女3人となり、64歳以下は男女各1人のみとなり高齢化が顕著である。農業労働力保有状態別農家数を見ると、専従者数は4人で、65歳以上では2人、女子のみは1人となり、専従者なしは3人で農業の存続には相半ばの状況である。また農業後継者有無別農家数で、同居農業後継者がいる者は男2人のみで、他出後継者のいる者は1人となり、他出後継者のいない者は6人となり、戦後期の举家離村に從って存続の危機は禁じえない。

販売農家の内で農産物販売金額1位の部門別農家数を見ると、稲作が8戸で果樹類が1戸となり、総農家の経営耕地を見ると合計8haとなり、田が7haで樹園地が1haの状況である。借入耕地は合計3haがあり、田が1haで樹園地2haとなっている。農家1戸当たりの平均水田面積は5.8haで、明治初年から3ha強が減少している。また農家保有の畜産数も全く消えうせ、動力機械に替わった。

平成7年（1995）のセンサスによると、歩行型動力耕耘機が14台、農用トラクターが4台、動力防除機が11台、動力田植機が9台、バインダーが9台、コンバインが5台、米麦用乾燥機が4台となっている。保有山林面積規模別農家数は10戸で、うち5ha未満が2戸で5ha以上が8戸となり、農家林家のみの保有山林面積は87haで、人工林面積は38haとなっている。明治期以来の耕地面積の減少分と草肥採集用の腰林が山林に帰り、他は集落内の共有林野や薪炭の生産用の野山であった。

こうした地域特性から農業や林業の生産は、地元農家の苛酷な労働力の投入にのみ存立できない。古来子孫が出来ると棚田の一枚一枚を増やし、更に灌溉用水の確保のためには林野の管理をなし、犠牛の飼育や和紙の生産等の作業が付加された。耕地や屋敷の安定のためには、地山の土石の利用しか方法はなく、傾斜地に石積みの法面を幾重にも削り出していった。今回の調査で大井谷地区的

棚田枚数は630枚強を数え、明治初年の地籍図等では、1, 200枚を超える棚田・畑地・屋敷が存在していた。これらの法面の石積みの実態を実地調査により極め、石垣の基本構造と築造年代を正確に位置付け、更には石見国西部の棚田現存地区の実態を探り、石垣文化の地域性を浮彫りしたい。

棚田石垣の構造調査は、前述の1章の調査結果を参考して頂きたいが、ここでは基本的な項目について見てみたい。柿木村税務課所蔵の明治27年（1894）作成の『大字白谷土地台帳』と、広島大学付属中央図書館所蔵の『地租改正関連資料』の内で『石見国鹿足郡白谷村図』等を基本資料とした。まず土地台帳の各筆の状況を調査台帳に書き写し、白谷村の地籍図に基づいて実地調査を展開した。

小字地名は棚田地域特有の分散表記がなされ、その結果地番毎に地名が異なり、総じて郡村宅地・田・畑・原野・雜種地・墓地・山林の状況がわかる。ちなみにその状況を表4-1により見てみたい。

表4-1 島根県鹿足郡柿木村大字白谷地籍調査

地目 (分筆)	反 別					地 価 円 銭	地 租 円 銭	筆 数 筆
	町	反	畝	歩	合			
田	32	9	4	23	00	8,312.973	207.858	850
(畑)			6	04	00	3.583	—	—
(墓地)					70	—	—	—
畑	49	4	9	21	03	2,537.554	63.471	1,210
(墓地)		1	9	00	09	—	—	—
郡村宅地	2	5	1	00	00	398.430	9.968	103
(墓地)					64	—	—	—
山林	622	0	7	26	00	371.657	9.289	692
(墓地)		2	3	03	35	—	—	—
原野	2	1	3	23	00	1.464	0.020	185
雜種地			2	17	00	0.029	—	3
墓地		3	6	11	45	—	—	33
合計	749	5	5	01	48	11,622.107	290.606	3,076
(畑)			6	04	00	3.583	—	—
(墓地)		4	2	04	78	—	—	—

調査資料 島根県鹿足郡柿木村所蔵：『大字白谷土地台帳』 明治27年（1894）12月

台帳表記 耕地：田（常田・荒地）／畑（常畑・伐替畑・荒地） 宅地 山林：竹藪／草山／雜木山

墓地 雜種地 宮有地 耕地字地番：1~1,160 山林字地番：1,161~2,053

明治27年（1894）の地目分布を見ると、耕地字では畑が田の1.4倍の筆数を示し、面積では1.5倍となっている。基本的には畑地の開発が先行し、山間からの渓流灌漑が完成すると、徐々に水田化して行き、比較的の平坦で湧水の所在地に宅地が点在していた。畑地は伐替畑から常畑へと転換しており、耕作放棄地は荒地となっていた。水田は常田が大勢を示すものの、荒地もかなり存在しつつ畑地に転用されていた。開発の関係か墓地も宅地・田・畑・山林に分散し、各家で管理がなされた。

山林では用材確保の目的の雜木山と、草肥利用のための草山が大勢を占めており、かなりの部分

は共有林野であった。建築用材としては栗材や檜材が、生活用材としては杉材をはじめとして種々の木材が利用された。竹藪も農業や建築用材に利用され、井手の覧やはぜ干しの竿に、屋根葺きの用材や生活用の竹材に加工された。更に特産の和紙の製造や、手内職等のための資材にもなった。

樹木を取り除けば地山が現れ天然の石材が採掘でき、また、表土を剥せば肥沃な山土が採集できる。こうして明治初期にはかなりの棚田が造成され、水田と畑地や宅地や護岸は石積みと化していった。

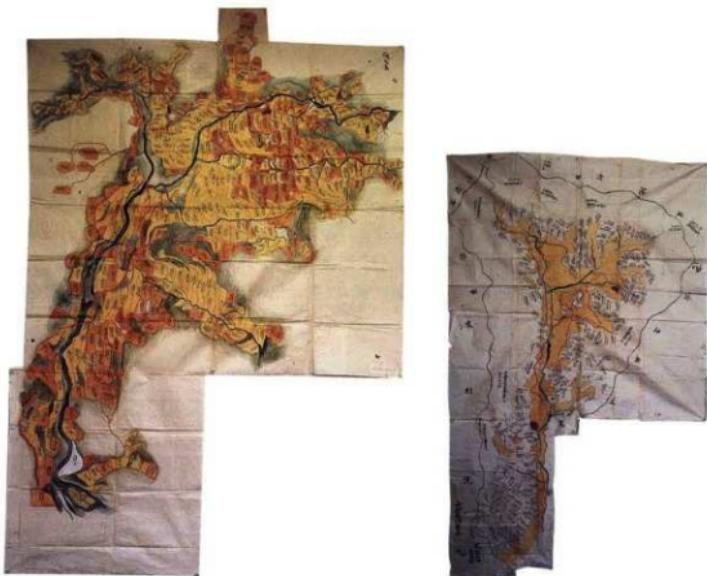


写真4-1 大井谷の地籍図（広島大学中央図書館所蔵）  
(左 耕地図：1,965×1,360 (mm)、右 山林図：1,505×925 (mm))

# 1 大井谷地区の石垣

## (1) 地形と地質

大井谷川は地区北部の大鹿山北麓の海拔660mから発し、南東流し海拔160mの白谷にて吉賀川本流に合流する。河川総延長は4.2kmで流域面積は8.0km<sup>2</sup>となり、平地の面積は0.1km<sup>2</sup>で1%強のみでほとんどが山地となっている。上流域は周辺部から井手をなす溪流が集まり、大きな河谷平地が展開するため「大井谷」の語源となる。河谷部は標高差500mを一気に流れ落ち急流となることから、下流域では両岸に段丘を形成し「井手ヶ原」となり、吉賀川との合流地点では沖積低地となっている。

地質構造は概ね火成岩類で中生代白亜紀後期に、東北—西南方向の中国山地の構造線に沿い粘り強い流紋岩マグマが噴出した。北東部の匹見方面から日原を通って、西南部の山口県阿武郡一帯に分布し、柿木村の中央部で北部匹見層群と南部阿武層群に分かれ、大井谷地区一帯は匹見層群に属す。所によつては斑レイ岩や石英閃綠岩が点在し、花崗閃綠岩や花崗岩類が露出し、そのほとんどが新生代古第三紀の貫入岩類である。ちなみに柿木村周辺地域の地質系統は、古生代から中生代への堆積岩類や変成岩類で、中生代から新生代に至る火山岩類で、概ね白山火山帯に属している。大井谷地区の 기본岩帶は中生代白亜紀の流紋岩類に属する匹見層群で、新生代古第三紀の貫入岩類も点在している。

表4-2 柿木村地域の地質系統 (出典:『柿木村誌』第1巻 1986年)

地質年代 単位:100万年				柿木村周辺地域の主要地質構造 地層・岩帶	
新生代	第四期	完新世	2	火山岩類	角閃石安山岩: 白山火山脈 青野山火山群: 鳥ノ子山 三原山火山群: 盛太ヶ嶽 (氷河期の開始)
		更新世		貫入岩類	石英閃綠岩・閃綠玢岩 大井谷岩帶
	新第三紀		65	貫入岩類	閃雲花崗斑岩①・花崗斑岩② ①大井谷-折橋-法師山 ②大井谷西方山稜域 唐人屋西方山稜域 鳥根-山口県境域 塩基性脈岩類・酸性脈岩類
	古第三紀			火山岩類	流紋岩類 匹見層群: 下須・白谷・柿木・ 福川・木部谷・大野原 阿武層群: 福川・杣谷 (基底花崗岩類の形成)
中生代	白亜紀	後期	75	貫入岩類・ 粘板岩類	関門層群・硯石続 杣谷石: 黒淵
				凝灰岩類	飯ヶ岳層 ・砂岩類
	ジュラ紀		100		
	三疊紀				
古生代	二疊紀		225		
			570		

## (2) 石垣の工法

大井谷地区の地質構造は、中生代白亜紀後期の匹見層群に属し、流紋岩類を基本岩帶としている。火山岩類の粘性をとどめるマグマは、比較的珪酸を多く含み酸性を示し、基底部の花崗岩類のマグマとほぼ同じ鉱物組成となっている。金属元素としてアルミニウムや鉄分が多く、風化物質は赤みを帯びた細粒質土壤となり、島根県では一般に「赤目」と呼ばれる。採掘された砂鉄はタタラ製鉄に利用され、大井谷地区でも古くは稼動していた。中国山地の和鉄生産のほとんどは、これらの基本岩帶に集中し、更に基底部の花崗岩類の風化層も利用されていた。この「真砂」と呼ばれる風化土壌は磁鐵鉱を含むため、「玉鋼」の生産には主要物質となっている。当地には真砂は存在せず、もっぱら赤目で、粘性土壌でミネラル分を多く含むため、肥沃土壌になり易く、耕土には格好の褐色森林土となっている。

新生代古第三紀の貫入岩類の石英閃綠岩や閃綠玢岩も、大井谷地区の岩帶を形成し所々に岩塊を残し、流紋岩類と共に石積みの主要石材となっている。背後の地山や河川の河床に存在する物を「野石」と称し、自然石や生石とも言い簡便な利用ができる。また集落の背後には「石場」と呼ばれる採石場があり、切石や樵石と呼ばれる「割石」を産出する。採集及び採掘した石材は石積みの作業場の「石場」に運び、石材の材質により「野石積み」や「割石積み」を行う。石材には火成岩類が最も良く、流紋岩類は組織構成において風化され難く、石工による削出しや、ハツリの加工も比較的簡便である。野石積みの際には、風化前の角物の野角や野板を、風化後の丸物の丸丸やゴロタや瓜坊を、長物の牛蒡石を使用する。流紋岩類は角物が主流で長物も含め、石組を施すと狂いが少なく耐久性も高い。

石垣の石積みの方法には、基本的には野石で築造した「野面積み」と、削石で築造した「打込接ぎ」と「切込接ぎ」がある。野面積みは野丸や野角等の野石のみの工法で、切石や樵石等の削石を一切使用しないのが原則である。また長物の牛蒡石を使用した「牛蒡積み」は、從来の野面積みを基本とした発展形態である。古墳の内部主体の石組や葺石から発生し、古代からの建造物の基礎や築地等に使用された。中世には元寇の防壁を始め、港湾や河川の護岸に使用され、城郭や耕地の法面等はほとんどこの工法で築造された。山麓部や河床部には捨石工法が使用され、野面積みは定着していった。

古代から中世に至り畿内より優良な石工集団が出現し、一般に「黒獣者」と呼ばれ石積みの現場に黒獣を持って来た事による。また、近江国守吉大社に奉仕した現地石工を「穴太衆」と称し、織豊時代以降全国にその技術は拡散していった。これらの石工集団は鎌倉末期に、博多湾岸に元寇防壁の築造に集められた「石築地役」を基本としている。古代以来の伊派・大蔵派・橋派の石工三派たちは、彫物を主体とした石工であったが、古墳時代からの石築地も手掛け、技術水準は全国的に飛躍した。

「穴太積み」は直石の主石の長径を水平に積み上げ、接合部に間石や詰石を施し「目地石」で合わせる工法で、布地を重ね合わせるように積み上げるために「布積み」という。また、法面背後に強度を増し構造物の安定のために、「中込石」や「裏込石」とよばれる端石を大量に入れる。近世に入ると目地石を省略する「穴太崩し」が主流となり、谷状の落しを掛ける「谷積み」が考案された。更に使用石材も小型化し、徐々に割石や雜石も使用され、乱積きや乱積みへと経済性に基づく

く法面構造となった。

近世初期に石工の使用する道具類の改良とともに、玄翁やハツリを使用して打込接ぎや切込接ぎが可能となった。古墳時代より堆積岩類の軟質石材から、硬質石材の火成岩類への利用が可能となり、打込接ぎは完成し、更に目地の間隙をなくし、石材同士の相場を密着させる切込接ぎが登場する。島根県西部では中世末期に漸く石積みの構造物が導入され、近世初期から正式に石垣の法面が築造され、匹見層群や阿武層群等の流紋岩類の分布地域は、屋敷築地や耕地法面をほとんど被覆していく。

棚田に見られる石垣の法面の構造は、広島県山県郡太田川流域において、殊に山県流石組と称賛されている。それに従事した石工たちを「山県者」と称し、近世中期以降広く中国地方西部を席巻した。

まず地山を整地し基盤を造成し、法面底部に一列に敷石や枕石を並べ、巨岩や大石を根占石（根石）を据え付ける。上部は中積の葺石と目地石とで積上げ、更に頂部に天端石や笠石を置き水準を取り、水田面と畦畔の安定を図っている。本来伝統的な穴太積みの布積みであったが、やがては改良型の穴太崩しの谷積みとなり、目地石が省略され合理的な構造となり、石材の総量も経済的に抑制した。

石垣の法面の中積部を「大場」と言い、石工の作業の大きな見せ場となり、基盤の根占石や畦畔部の天端石や笠石を「役場」と言われ、石工の作業の中で最も重要な役割を示す。また法面の左右両端に築かれる「礎石」や、法面の中央部に置かれる「要石」も役場となり、石工の作業も芸術性を帯びる。野面積みを初め打込接ぎや切込接ぎでも、こうした基本構造を踏襲し石垣の法面は見事に完成する。

棚田本体の構造は地山の傾斜面上に、栗石を用いた中込石を一面に敷詰め、上部からの水抜きが可能になるようとする。その上に造成の際に剥ぎ取った地山の土砂を盛土し、かなりの回数で版築し固める。更に粘土質の山土と樹枝や苔類等の、いわゆる「櫛」に使用する資材で、数回の版築を行う。西中国山地一帯では「ハガネを入れる」と言い、灌漑用水の漏水も一切許さない堅固な水田の基礎を作り上げる。最後に良質な腐植土を含む山土を均等に敷き詰め、柵場の水準に従い耕土層を一定にする。溝田では深く乾田では浅くし、また灌漑用水の水筋にも考慮し棚田はその全容を現す。

野面積みは基本的には種々雑多な石材を使用するため、目地や相場の不統一な「乱層積み」となる。石材の形状を整えた布積みや谷積みは、一見目地が無い「整層積み」となり法面構造も美観をとどめる。また割石積みでは野面積みが最も簡便に築造でき乱層積みとなるが、打込接ぎや切込接ぎでは石材の形状を整えた整層積みも可能となる。目地石は野面積みでは使用され、打込接ぎでの乱層積みは使用が見られず、切込接ぎでの乱層積みは使用される。むしろ葺石の目地や石材の相場の状況では、打込接ぎや切込接ぎでの整層積みは目地が見られ、乱層積みは主石と間石や詰石の区別がつかない。

近世初期に考察された「間知積み」は、石目の通る花崗岩類の特性を生かし、豊臣秀吉の太閤検地により「間知辨」が定められ、その形状に似せて「間知石」が大量生産された。表面の長辺と短辺の比で形式が決まり、それに基づいてひかえが取られ地山に差し込まれる。長辺を水平にして積み上げる布積みや、一方の角部を落し込む谷積みも合理的な法面工法となった。谷積みでは一方向

に傾ける「片寄積み」や、石組の上下で反転させる「矢苦積み」や「網代積み」も、法面構造に美観を湛えている。

整層積みの間地積みでは、法面頂部には天端石を置くが、谷積みの場合は三角天端・五角天端・夫婦天端・子持天端等を置く。布積みも谷積みも頂部に笠石を置き、水準を整えて美観を醸し出す。

こうした工法は近世末期に考案された物で、更に本来の積石のみの「空積み」や、目地を粘土等で接着する「練積み」にも漸く使用された。こうして石垣の基本構造は完成し、農民の創造した棚田は「日本のピラミッド」として威厳を現し、延々と続く石組の行列は「日本の万里長城」ともたとえられた。

大井谷地区の石垣は概ね江戸時代初期に、広島県山県郡方面から伝えられた工法が基礎となった。中世吉賀地方では漸く山城の主郭の基壇に石組が施され、津和野の三本松城に移った吉見氏も石垣の工法は持ち得なかった。やはり豊富な石材と優良な石工を持つ吉川氏は、大内氏との抗争で京風な石組を取り入れ、毛利氏の勢力拡大に従っての所領獲得等で、基本的には穴太積みの工法を入手していた。更に因幡国鳥取の吉川氏の石造技術に触発された亀井氏が、鹿野から津和野に入封し高津川一円は一躍石垣文化が開花し、大井谷は津和野藩の蔵入地としてゆるぎない生産を開始した。



上の田の石垣



棚田の牛耕



石垣と畜道

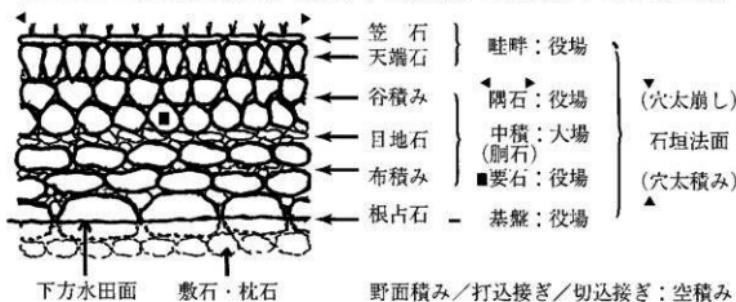


棚田の足場

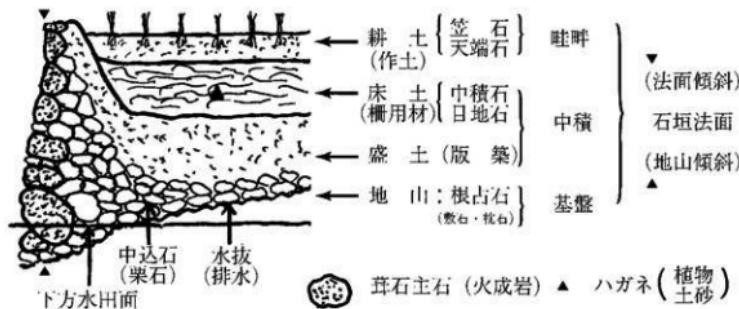
写真4-2 大井谷地区の石垣

## 法面の構造：立面図

調査地域：広島県山県郡太田川流域／山県流石組・山県者石工・穴太積み工法



## 法面の構造：断面図



## 石組の方法：石材

角物：風化前



野角

丸物：侵食後



野丸

長物：牛蒡石



牛蒡積みに使用

図4-1 棚田の石組の構造（出典 佐々木卓也(2001)：「棚田の法面の構造」『青潤』628号／原図 佐々木卓也：1999年）

## 石組の方法：工法

野石積み：石材には角物・丸物を使用し積み上げ、牛蒡石も使用する。



野面積み：乱層積み

乱積み



野面積み：整層積み

布積み



野面積み：整層積み

谷積み

割石積み：石組工法には布積みや谷積みを施し、目地と相場を合わせる。



野面積み：乱層積み

目地石：乱層積み有



打込接ぎ：乱層積み

目地石：乱層積み無



切込接ぎ：乱層積み

目地石：乱層積み有

間知積み：間知石を使用し整層積みを施し、法面を成型して仕上げる。



布積み



谷積み

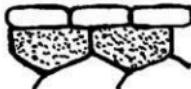


間知石

天端仕上：打込接ぎ・切込接ぎ・間知積みの天端仕上げに使用される。



三角天端



五角天端



夫婦天端・子持天端

注：近世末期に畦畔や築地の水平を保つために考案され石工に委ねられた。

図4-2 梶田の石組の方法 (原岡 佐々木卓也：1999年)

### (3) 石垣の編年

島根県西部の旧石見国美濃郡及び鹿足郡では、中世末期の益田氏や吉見氏により、社寺の勧請や創建が相次いだ。益田氏関連では染羽天石勝神社・浜八幡宮や、勝達寺・妙義寺・万福寺・医光寺等が、吉見氏関連では弥栄神社・鷲原八幡宮・永明寺等があった。益出氏では七尾城や三宅御土居を基本に、吉見氏では一本松城（後の三本松城）を中心とし、近世初頭に至り城下町の整備が行われた。

中世城郭は本丸の基壇部に若干の石組が施され、織豊期のような緻密な工法は見られず、社寺の基壇や庭園の石組等のように、簡素な物が大半を占めていた。有名な雪舟の作庭した石庭も平地の粗石で、築山の法面は捨石か植栽で固定されていた。当地方の最も古い工法は鷲原八幡宮の本殿の基壇で、永禄11年（1568）に吉見正頼により再建されたころのものである。また永仁3年（1295）に吉見順時の築城と伝える一本松城=三本松城は、慶長6年（1601）に坂崎直盛が改築したとされ、現在の石組はその当時の物であろう。更に永明寺は安永8年（1779）に再建されたが、山門下の築地石垣は江戸初期の遺構をとどめており、坂崎氏から龟井氏への移行期に築造された物と思われる。津和野城下から南西の石州街道に至る町筋には、その当時の武家屋敷の築地の石垣が現存している。

津和野藩領と浜田藩領とが拮抗する高津川流域には、五ヶ所村に石見大森銀山代官所の支配が及び、江戸初期より各藩領では下池=農地の開墾に努めていた。大井谷地区の開墾も津和野藩主の龟井氏の基で行われ、上の田の棚田法面は明らかに城郭や寺社の石組であり、藩の抱える有力な石工職人の技術が見られる。戦国時代末期より畿内勢力により穴太積みの工法が伝えられ、津和野三本松城の造営により絶頂期を迎え、旧米の乱積み工法は完全に影をひそめていった。安芸国の西北部からは山県者と呼ばれる石工職人が移り住み、「石つき之もの共」の代表的石組の立石と牛蒡石での布積みも導入していたものと思われる。中世末期に益田氏や吉見氏や大内氏等は、石組工法も作庭のみの簡素なもので、吉川氏の絶大なる影響を受けた坂崎氏や龟井氏により、漸く石垣の法面が造られた。

鳥取久松山城主の吉川広家は周防国岩国城主となり、西隣の鹿野城主の龟井政矩は常に吉川氏の影響を受け続け、名城の鹿野城の造営に当たった石工をそっくり津和野に移した。石工の中には本来の黒鉄衆と共に、南蛮文化を伝えた渡来人もいたという。これら職人たちは中国山地特有の火成岩の加工を専門とし、流紋岩類や安山岩類を半ば白山に扱っていた。益田氏は毛利氏と共に萩城下へ転封と共に本拠を長門国須佐に移し、萩の長屋敷の築地には花崗岩類により堅固な石組を造営した。江戸時代の石見国西部はさながら石組の競演が見られ、寺社や屋敷の築地から漸く棚田の法面までもが石垣に変更されていった。日原町内の幕府直轄領の諸村も、大森代官所からは有能な石工が移入し、吉賀川と津和野川や石州街道の町並みの改修に当たり、更に寺社の再建や勧請が相次いで行われた。

江戸末期に津和野邑押にある笠ヶ谷鉱山の銅山師堀家では、屋敷の築地に地山の閃綠岩類を用い、切込接ぎで見事に寺勾配の法面を作り上げた。大森銀山からの支配権が及んだことから、鉱山経営の面で幕府との接触が保たれた。多数の鉱山労働者により採掘され、採掘された鉱石は銅鉱と雜鉱に区分され、牛馬や車力で運び出されていた。採掘や運搬には鋼鉄製の石工道具が必要で、良質な

和鉄産地を周囲に持つことから、タタラや鍛冶職人の影響を受けていた。元来は石彫りを専門とし採石も経験した職人が当たり、後に鍛冶の能力を習得した有力な石工に師事した職人が育っていった。

明治時代には打込接ぎや切込接ぎも普通に行われ、道具も石工の手により種々雑多な加工を施し、伝統的な石組の四十八手が認められていた。山間農民もそれらの技術を見様見真似で習得し、自家で野面積みなら他家に手を借りなくてもでき、石垣築造の伝統技術は基盤整備の常套手段となつた。



野面積みの法面



蛇口のある法面



地山の隅出し



丸出し隅石



角出し隅石

写真 4-3 棚田石垣と法面構造



津和野町：鷺原八幡宮本殿築地



津和野町：鷺原八幡宮本殿築地



津和野町：津和野三本松城跡



津和野町：津和野三本松城跡



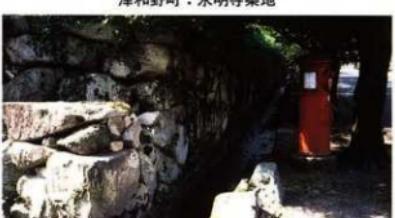
津和野町：津和野三本松城跡



津和野町：永明寺築地



津和野町：津和野城下侍屋敷築地



津和野町：津和野城下侍屋敷築地

写真4-4① 石垣の変遷：1 (基本調査：平成12年（2000）～13年（2001）)



津和野町：財間酒造場築地



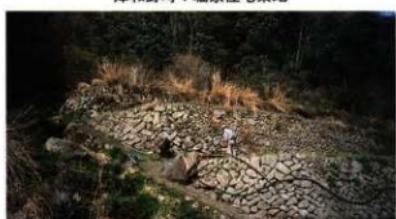
津和野町：弥栄神社築地



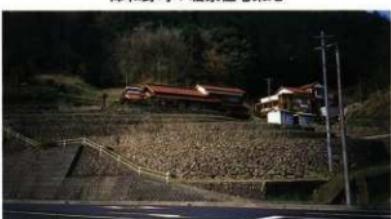
津和野町：堀家住宅築地



津和野町：堀家住宅築地



日原町：左鎌地区江戸後期棚田



日原町：左鎌地区明治後期棚田



柿木村：福川地区山麓法面



柿木村：福川地区民家築地

写真4-4② 石垣の変遷：2（基本調査：平成12年（2000）～13年（2001））

#### (4) 石工の技術

鳥根県鹿足郡の吉賀川に沿う地域は、中世末期より益田方面から高津川を通り、やがて南部地域の錦川を下り岩国に至る要衝の地であった。やがて津和野城下と安芸国廿日市の間に、津和野街道が開設され、瀬戸内との交流がますます盛んとなった。大井谷地区では室町中期に周防国古敷郡仁保郷から三浦氏が入り、また村上氏や西山氏も他領から入り、白須山村の齊藤氏等も同じ系譜であろう。

三浦氏は大内氏に関わる土木工事の技術を持ち、村上氏や西山氏や齊藤氏は益田氏や吉見氏等の、安芸国の毛利氏や吉川氏等の影響を受け続けていた。吉見氏は鎌倉幕府から能登国より石見国へと入封し、元寇に対する沿岸護持のため石見・長門国境に近い木部郷に定着した。博多津に集結した石築地役の石組技術を導入させ、益田氏との競合で基本的石組を残した。やがて津和野郷に移入し鷲原八幡宮や一本松城（三本松城）等を築造し、後の坂崎氏や亀井氏の時代にその技術は継承された。

江戸時代には安芸国山県郡一帯で修練された、穴太積みに基づいた石組の技術が導入され、吉賀川流域は山県流の技術の洗礼を受けた。布積みから谷積みへと改良がなされ、野石積みから割石積みへと進歩し、江戸末期には農村では野面積みが定番となった。この技術革新は石工の道具類の改良によりもたらされ、タタラや鍛冶の技術が革新されて、石工の作業場はさながら鍛冶屋の状況を示した。

#### ①三浦高嶺氏（昭和11年生）：白谷 大井谷

大井谷地区で現在も石工の仕事をしている氏は、祖父母の時代から當々と技術を受け継いで来たと語る。祖父は山口県から養子として入り、夫婦共に棚田の石積みをもっぱらにしていた。当時の石工のみで、明治中期から大正初年の石積みのほとんどを占めていた。父は生れながら祖父の後を継ぎ、下須の下ヶ原の村上氏に弟子入りし、約1年半の年季奉公の後に大井谷に帰り、大正末期から昭和初期にかけて石積みを行った。

当時父が直接指導を受けた師匠の村上氏は、広島県山県郡加計町の栗柄氏から養子に迎えられた。また同じく原手にいた栗柄氏も加計町出身で、両氏は2人で石取=採石や築前=石組を担っていた。津和野町の堀工務店（現丸百货店）の先代も同郷の系譜を持っている。父は昭和初年に柿木村役場から第一等石工の認定を受け、認定証は木札に焼印を押したもので、石工道具の精錬に用いる輪の使用が認められた。現在もその他の道具類と共に、当時の状況をとどめ納屋の中に大切に保存されている。石工の仕事は役場土木課にあった復興組合からの要請で、村内で5~10人がその職をまつとうした。高嶺氏には姉2人の他に弟2人があり、今は姉・弟の2人のみとなり、弟は石工として村外地域で仕事に従事している。また父方の叔父も石工の仕事を担い、現在も大井谷地区に住み從事している。

採石場=丁場での石取の作業は「床掘り」と称し、ツルハシ・ジョレン・カナテコ・ガラモフコ・チェーン（石回し）等の道具類を使用する。また発破をかけたり箭を入れたり、巨岩の採石も頻繁に行っていた。ちなみに柿木村の採石場は高津川に沿って、下須地区の法師湖西岸・白谷地区的鳥ヶ原東岸、大野原地区の月瀬西岸の3か所で、匹見層群に属する流紋岩類を主体としている。福

川地区の「弁慶石」は石積みには不都合と言われ、白谷地区の杉山の石材を津和野三本松城へ献上したという。

築前=石組の作業は石材の石目を読み、石場=現場でゲンノウ・ハリマシ・ノミ・ハツリ・テコ・ビシャン等の道具を用いていた。野面積みではただ目地を合わせるのみで簡単であるが、打込接ぎでは石材の面と尻を取り積上げにはドウガイの詰石を入れる。尻の下場は水平にし上場は斜めにし、逆方向の逆石は極力避ける事が望ましい。切込接ぎの石組はほとんどが間知石を使用し、面の縦横と尻の控えの寸法は、 $12/15/18$ か $8/10/12$ の二つとなり、谷積みのほとんどは片倒組か矢掛組で仕上げている。六日市町の村上酒造跡の築地は布積みの好例で、額縁状の面取りを施した「江戸切り」となっている。

#### ② 永安重男氏（大正5年生）：福川 平野

父は水田農業と炭焼きをしており、自ら窯を築いて生産していた。17歳の時に六日市町田丸の山谷重太郎氏（父方の伯母の嫁家）に3年間弟子入りし石工の仕事を覚えた。師匠の家系は広島県山県郡の出身で、吉賀地域に移住し石工の仕事を開始して弟子が3人いた。重男氏は後に日原町豊の内田元次氏（重太郎氏の長男の養家）のもとで1年間石工普請の技術を学んだ。

昭和11（1936）年に福川地区で水害が発生し、復旧工事や河川護岸の修復工事にあたった。当初は雑割石による野面積みや乱積みが人勢を占め、昭和に入り割石による谷積みが導入され、戦後は間知石の採掘が前述の採石場で行われた。昭和30年代には空積みの堤防天端は練り積みに改良され福川川に沿う中原堤防はその代表例である。その後重男氏はT務店を開業し、津和野・日原・六日市・阿東等にも仕事を広げた。

#### ③ 斎藤光旦氏（大正14年生）：白谷 井手ケ原

福川伊豆原の斎藤家で生まれ、昭和16年に山口県光市の海軍工廠に入り、千葉の鉄道に入隊、終戦と一緒に帰郷し福川在住の石工で愛媛県出身の馬越秋夫氏に師事、間知石の石積み工法を学んだ。また馬越氏の父からは石割の技術を学んだ。同じ弟子の三浦久人氏、中村令氏と共に福川や椎谷地区の護岸、砂防、林道工事に従事した。その後白谷井手ケ原の斎藤家の養子となった。当時白谷地区では、日原町豊の内田元治氏のもとで技術を習得した斎藤正春氏が石工職人をたばねており、一緒に仕事をすることで学ぶことが多かった。

手がけた石積み工事の中には、福川三ノ瀬城址下の護岸、伊豆原上の堤防、白谷沖河内の護岸工事、上白谷の斎藤武文氏宅の石垣等がある。

#### ④ 斎藤兵美氏（大正14年生）：福川 伊豆原

下須法師済の村上家に生まれ、父は村長を歴任した。福川伊豆原の斎藤家に養子に行き、戦時中は九州に勤員されたが、復員後に柿木の村上悟氏から技術を習得した。雑石積みで栗木・伊豆原・龟田、三ノ瀬等の護岸工事にあたり、後には間知積みや練積みへと転向していった。

以上の石工の他に福川地区では笠間久八氏がおり、伊豆原の小笠原家の畠地法面と、IH柿木村の役場築地や龟田の護岸等の工事に当たった。平野谷の羽野家の水田法面、福川公民館前の築地石垣、

福川の三井家・鳥羽家石垣を始め、柿木村の元玉川旅館付近の旧大橋橋台も旧来の工法を良くとどめる。

#### ⑤ 石工の技術と仕事

石工の仕事は道具の調達から始まり、津和野町の大谷金物店で良く購入されていた。石工の仕事が入り金が入れば鉄鑿の数が増え、地金は広島県山県郡内から購入していた。年季奉公が終われば師匠から玄翁1丁が貰え、正月には玄翁を洗い床の間に祭った。師匠も弟子もよく肘が曲がり痛みが増すと鍼灸院に通い、石を叩いた時に起こるトビノコ＝融解鉄粉が体に良く刺さった。更に昼休みには手押輪をおこし、ゲンノウ・ハリマワシ・ハツリ・ノミ・オノコ・トビヤ等の鍛造を行った。石垣普請は年中行われるため、輪おこしは冬季に暖が取れるこの時期に集中する。三浦高嶽氏も地元での空積みの作業は冬場に行い、他の請負仕事はかなり遠方に出かけていたという。田畠は家族に任せせるが畑作のみの状況で、男手の入る田仕事を出来ず、奥方は近在の土建会社に通いながら工事に精を出していた。

道具の革新は三浦氏の入植した室町初期には、鳥根県出雲地域にある米待石等の加工し易い砂岩質であったため、簡素なノミで仕上げた石塔類であった。江戸時代に入ると鋼鉄製の石工道具の改良で、硬質の火成岩類の加工が可能となっていた。運搬道具もモッコが主体であったが、明治末期にはネコ車が登場し、人井谷地区には昭和初年に導入され、更に戦後に動力付きのテーラーとなつた。

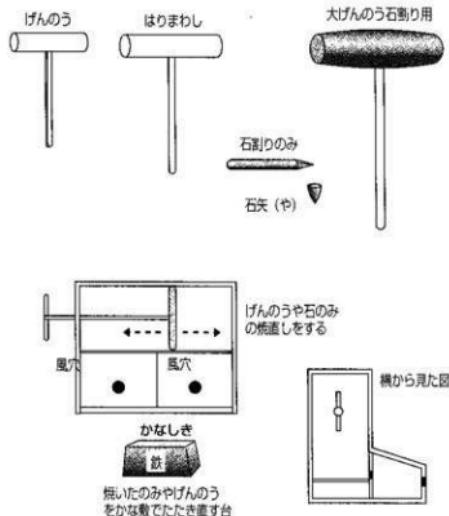
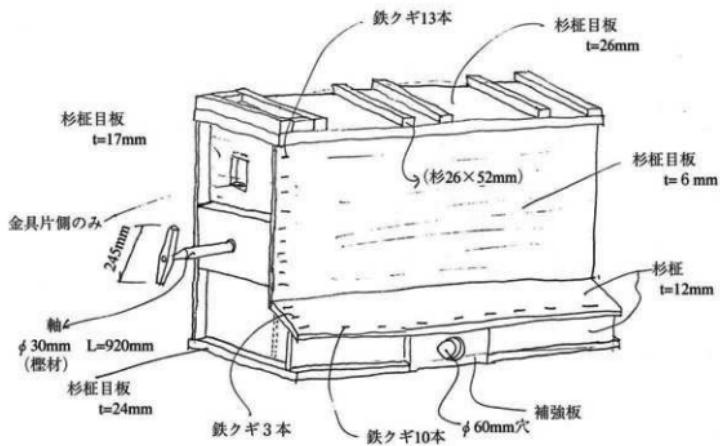


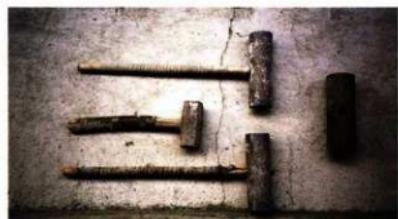
図4-3 石工の道具（原団 永安恵治：1999）



間口：1,215mm、奥行：308mm、高さ：670mm



写真4-5① 石工の道具：三浦高嶺氏裁手押縫（原図作成：三浦一美氏（平成13年10月））



ゲンノウ・ハリマワシ



ハツリ



テコ・ハツリ



ノミ・焼入道具



ノミ・トビヤ



ノミ・トビヤ



トビヤ（小：岩石用 大：岩盤用）



焼入道具（ノミ）

写真4-5② 石工の道具 (調査期間: 平成13年7月~10月 同行調査: 三浦一美氏)

## 2 大井谷地区的棚田

### (1) 棚田石垣の変遷

大井谷地区に三浦氏が入植したとされる室町初期には、中国山地一帯は一般に上坡工法であったものと思われる。最初に開かれた「枕ヶ坪」とは、棚田の開墾の際に予め柵を組むために、法面基部から若干の挖えを取り、杭を縦状に打ち込み、柵を立ち上げて土盛りを施したことによる。更に床土を叩き込み、耕土を背後に入れ、耕作可能な水田面を完成させて小規模な平地=坪となした。当時の山城や屋敷や社寺には、基盤の敷石や礎石等に石材が使用されただけで、築地の法面の構造はもっぱら土坡構造であったことによる。

初期の棚田の形状は小規模で手作業を主体として行われ、鍬類を使用して整地し圃場を造営していた。野面積みでは野石を用い角物と丸物により積み上げ、石垣の比高は最大人の背丈までであった。乱層積みでは捨石や雜行が混在して使用され、整層積みでは布積みを主体とする穴太積みが見られる。造成箇所はかつて畑作を行った開墾箇所で、傾斜の比較的緩やかな尾根伝いに展開していた。ほとんどが穴水灌漑で栽培される陣種で、更に裏作の麦類も導入され、表作で稻作が不向きの箇所は雜穀類が栽培された。

入植は大井谷川の下流から徐々に上流を目指し、さながら千枚田のような細かい圃場が連続していたものと思われる。江戸時代に入ると田舎等の人力による農具が改良され、比較的に圃場が拡大して近接する圃場が統合された。野面積みでは盛んに割石や椎石が使用され、法面もかなり強度が増し、併せて収量も増大していった。乱層積みでは穴太積みの改良型の谷積みが導入され、整層積みでは打込接ぎの初原型が登場した。棚田の法面では乱層積みが大勢を占め、反対に屋敷の榮地では整層積みが一般化していた。石垣の比高はほとんど変らず横方向に長く圃場が延び、田植や稲刈も近在の人たちによる共同作業となった。

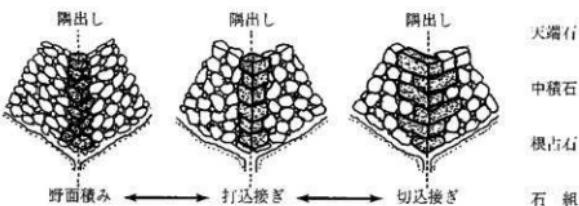
この頃から簡単な竪を使用し渓流から用水を引き入れ、またタカラ製鉄による鉄穴流しの跡地利用には、井手を利用して土砂の流し込みを行っていた。水道は合理的に敷設させることが必要で、表流水の処理には明渠の井手を掘り、傾斜地区では水田下部の地山に沿い、横穴暗渠（蛇口ともいう）を付けて流し落とした。大井谷地区の棚田はほとんどこの時期に築造されたもので、現在の圃場は江戸中期以降の石組となっている。中国山地における牛馬の飼育と田畠での使役が開始され、棚田の法面に付隨して畜道が取り付けられた。

江戸末期には津和野藩をはじめ藩政改革が起り、地下の水田の開墾も半ば公認され一躍面積が増加した。大井谷地区でも背後の山麓斜面や、渓流に沿う「溢」には棚田や畑地が造営された。それに伴い犁頭の導入と、農作業の効率を高めるために更に圃場が統合された。一般に「町倒し」と呼ばれる法面の比高も数枚の石組が高積みされ、人の背丈を越えるものも出現した。野面積みでは背後の石組を崩したために、葺石の攪乱や石材の改良が見られた。乱層積みでは新旧の石材の併用が現れ、整層積みでは打込接ぎの発展型として天端石や笠石の使用が見られた。高積みの法面では石組の日地の除草が困難となるために、中間部に牛蒡石を用いた足場石を等間隔に入れている。更に井手と畜道が整備され、明治時代以降は積極的に町倒しが行われていった。大井谷地区的高積み石垣は、ほとんどが明治期以降のものとみなされる。

現存する大半の石垣では、旧来の石材の攪乱と新旧の石組の混在が激しく、また、植栽の侵入によって中には崩壊寸前のものが見られる。これに対して戦後祭って「日地塗り」が行われ、粘土やモルタルにて完全に封印され、更に崩壊箇所や改修部分には、コンクリートと雑石を用い練積みの法面が登場した。こうして伝統的な空積みの石組は、風雪に耐え永らく大井谷地区の景観を造形したが、現実には現代風の法面構造になりつつある。このたびの基本調査によって明らかなことは、旧来の空積み工法での石垣は日地の除草と洗出しで持ちこたえ、更に将来にわたり200年後も美観をとどめることを提唱してみたい。

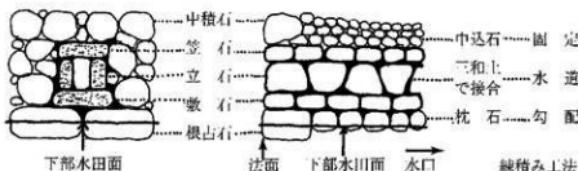
### 隅石の工法

隅丸積み：丸出し法 重箱積み：角出し法 算木積み：反出し法 工法



### 法面の施設

蛇口工法：立面／断面



足場工法：立面／断面

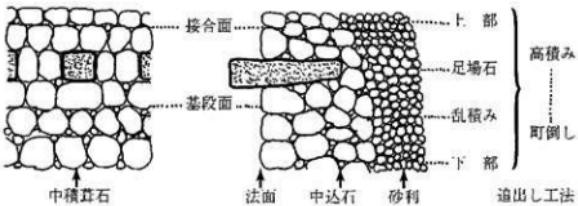


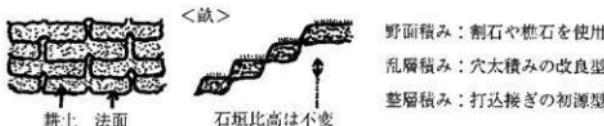
図4-4 隅石の工法と法面の施設（原岡 佐々木卓也：1999年）

## 棚田石垣の変遷

小規模棚田：手作業を主体として、鍬類を使用して整地し、圃場を造営する。



改良型棚田：田舎等の農具の改良により、比較的に圃場が拡大し収量が増す。



大規模棚田：家畜が導入され、犁類の使用が行なわれ、圃場が広く高くなる。



## 棚田石垣の改修

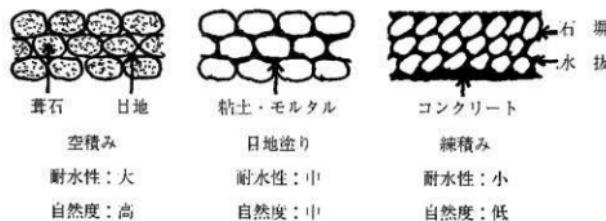


図4-5 棚田石垣の変遷（原図 佐々木卓也：1999年）

## (2) 石見西部の棚田

### ① 棚田景観の実地調査

柿木村大井谷地区以外に、石見地方西部に現存する棚田について、平成13年（2001）7月から10月にかけて総合調査を行った。対象地域は旧美濃郡と鹿足郡とし、各市町村の棚田担当部局と教育委員会の協力を受けた。柿木村教育委員会からは、教育次長と文化財審議会会长の三浦・美氏に同行して頂いた。

旧美濃郡とは現在の益田市・美都町・匹見町で、水系から見ると高津川本流の下流部と支流の匹見川流域に位置する。日本海沿岸から西中国山地脊梁部に至り、標高差も1,200mとなりかなりの急斜面となっている。気温や降水量の較差も海岸部平地と脊梁部山間では、特に夏季と冬季の一時期には著しい。鹿足郡とは現在の津和野町・日原町・柿木村・六日市町で、水系から見ると高津川上流部の吉賀川流域と支流の津和野川流域に位置する。流域のほとんどが源流から中流に至る山間地域で、脊梁部と約1,000mの標高差が生じ、気候環境も変化の激しい土地柄となり、流域平地部と山間支谷部の対比が明瞭である。

### ② 益田市の棚田景観

益田市域の棚田の現存地区には、中西地区・豊川地区・真砂地区・二条地区・北仙道地区・鎌手地区の6地区が挙げられる。中西地区に中垣内町の平原・梨ヶ平・下平・日ノ平の4地区があり、下平地区は日本の棚田百選に選定されている。豊川地区には柄山町の柄山と岩倉町の岩倉の2地区が、貞砂地区には波田町の原下・原上・久保満・先谷の4地区がある。二条地区には愛栄町に上金・中金の2地区が、北仙道地区には乙子町に乙子宮の1地区が、また鎌手地区には西平原町の上平原と土田町の郷の2地区がある。益田市域には合計15地区が現存しているが、調査時点での人口流出による耕作放棄や、従前の基盤整備が生じていた。その中でも棚田百選の選定地の下平地区は、地域全体での保全活動が望まれる。

中垣内地区の白岩神社を中心とした耕作放棄が顕著で、景観保全から見れば棚田オーナー制度等の導入も必要と思われる。また、その他の地区も景観整備の必要な箇所が見られ、柄山・岩倉の両地区は大谷温泉との提携が、真砂地区は大規模に棚田オーナー制度の展開が可能である。二条地区は山間の源流地域で既に基盤整備が行われているが、上金の見事な景観は可能な限り保全に努めて頂きたい。鎌手地区での棚田景観は市街地に近接し、市民農園や自習農場等の利用が可能で、山陰本線沿いの格好の地区である。

### ③ 美都町の棚田景観

美都町域の棚田の現存地区には、仙道地区に大字小原の観月・熊子の2地区が、山本地区に大字山本の大神楽の1地区が、都茂地区に大字都茂の大田又の1地区が挙げられる。大神楽地区は既に基盤整備が行われているが、ユズの栽培に転換した棚田は旧来の状況を示している。観月や熊子の2地区的棚田は中世の農村景観を残し、ぜひ山城とタカラ等の史跡を生かした保全施策を検討されたい。大田又地区は急斜面に展開する棚田で、中国山間の普遍的景観をとどめている。当町は合鴨

農法の先進地域で、平地の有機栽培がなされているが、今後は傾斜地農法への施策を検討し、農村博物館として位置付けしたい。

#### ④ 匹見町の棚田景観

匹見町域の棚田の現存地区には、大字匹見の広見地区、大字落合の矢尾地区、大字広瀬の小広瀬地区、大字石谷の内谷地区、大字澄川の土井原地区、大じ道川の半原地区の6地区が挙げられる。一番の圧巻は小広瀬地区的棚田で、現在は3戸の農家のみであるが、かつては1kmもの谷間の景観が存在したと聞く。雑草で覆われた放棄地も復田は可能で、溪流も豊富で農道の整備が急務となっている。広見地区は匹見町の源流地域を代表する棚田景観であるが、今は土砂崩れのため实地調査をやむなく中断した。矢尾・内谷・半原の各地区は、河川に沿う典型的な棚田景観で、交通の便も良く見学経路を整備したい。

澄川は中世の澄川氏発祥の地で、山城と社寺が附属の民家群と馴染み、背後の傾斜面の全てが棚田で覆われている。景観とともに地域の歴史が学べる格好の地区で、1ターン等の居住環境には最適であろう。広見地区には江戸末期と思われる水道に架かる石橋があり、道川地区には赤谷下に江戸時代の石垣築地を持つ民家がある。また澄川地区の十井原には、江戸初期とも思われる屋敷塀地が残り、石谷地区的内谷の棚田は、江戸中期から昭和初期までの石組の変遷が読み取れ、さながら地名のとおりの博物館ともなっている。

#### ⑤ 津和野町の棚田景観

津和野町域の棚田の現存地区には、大字森村の主水畠<sup>もいんじばたけ</sup>の1地区のみである。前述の城郭や社寺や邸宅には中世末期からの秀作があるが、戦後いち早く基盤整備が行われ、急速に棚田は改修の要き日をみせた。大字森村の主水畠は、津和野藩の家老の多胡真益が寛永検地において、櫛鉢状の津和野の町に自給自足のために、強制的に農民や下級侍を動員して開発させた。市街地東隣の傾斜地にあり、歴史的にも価値がある棚田で、文献にて畠地から水田への発展が辿れ、町内の各史跡とともに文化財として保存してみたい。

#### ⑥ 日原町の棚田景観

日原町域の棚田の現存地区には、大字左鏡の空畠・新畑・古屋敷・岳・左鏡の計5地区が挙げられる。山頂部から谷底部に至り空畠や古屋敷や岳の棚田が威容を見せ、新畑や左鏡の棚田は河川周辺の傾斜地を利用して見事な棚田を築き上げている。大井谷地区に近接する土地柄で、石組の共通性が確認できる。また日原町立民俗資料館には、紙漉をはじめ多数の民具類が集められ、農具類の収集では群を抜いている。

#### ⑦ 柿木村の棚田景観

大井谷地区以外の柿木村域には、かつて多数の棚田が存在した。木部谷川の流域や福川川流域の福川や桃谷には、山麓斜面や山間渓流にかなりの枚数の棚田があった。津和野街道に沿う折橋地区や白谷の杉山地区等には、山道や渓流に沿って耕作放棄地が存在しており、これらは復田も可能な地区もある。

## ⑧ 六日市町の棚田景観

六日市町域の棚田の現存地区は全くなく、既に全域にわたって基盤整備が完了している。高津川の源流に位置することと、盆地性の地勢から平地と山塊の境界が極めて明瞭で、ほとんどが平地水田となっている。

### <石見西部の現存棚田地区>

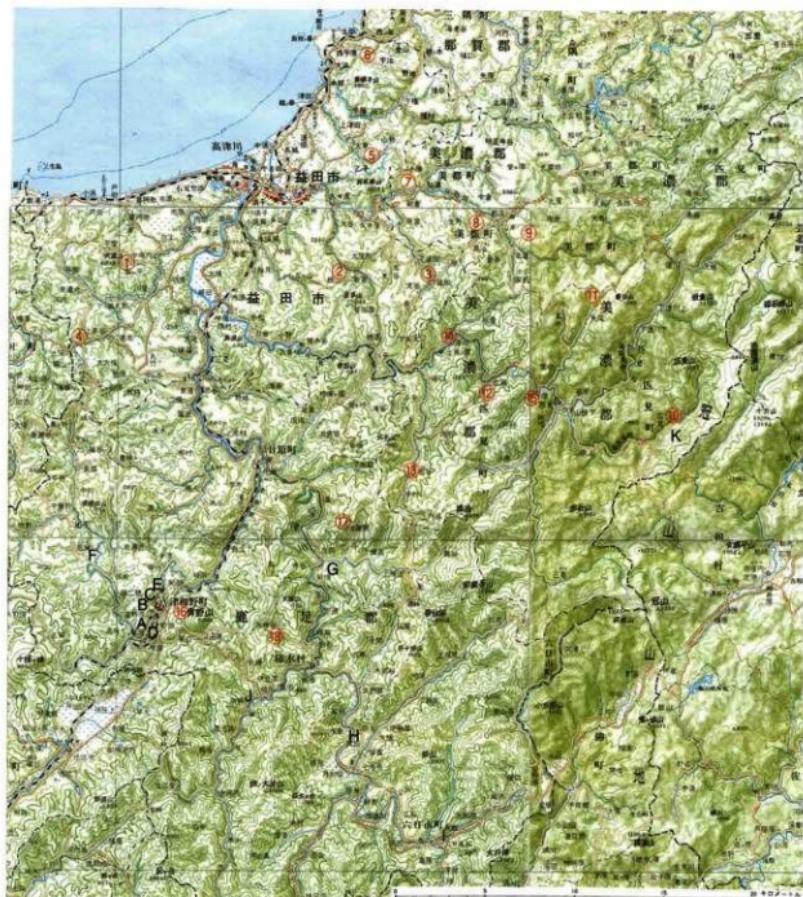
- 益田市 ①中西地区 中垣内町：平原・梨ヶ平・※下平・日の平  
②鴨川地区 榎山町：榎山  
岩倉町：岩倉  
③真砂地区 波出町：原上・原下・久保瀬・先谷  
④二条地区 愛栄町：上金・中金  
⑤北仙道地区 乙子町 乙子宮  
⑥鎌手地区 西平原町：上平原  
土田町：郷  
美都町 ⑦仙道地区 大字小原：觀月・熊子  
⑧山本地区 大字山本：大神榮  
⑨都茂地区 大字都茂：大田又  
匹見町 ⑩匹見地区 大字匹見：広見  
⑪落合地区 大字落合：矢尾  
⑫広瀬地区 大字広瀬：小広瀬  
⑬石谷地区 大字石谷：内谷  
⑭澄川地区 大字澄川：土井原  
⑮道川地区 大字道川：茅原  
津和野町 ⑯森村地区 大字森村：主水畑  
日原町 ⑰左證地区 大字左證：空畝・新畑・古屋敷・舟・左證  
柿木村 ⑱白谷地区 大字白谷：※大井谷  
六日市町 棚田現存地域なし

棚田構造：空積み石垣・一部土坡  
築造年代：江戸初期～明治初期  
使用石材：火成岩類・変成岩類  
土地利用：水田・畑地・果樹園

※日本の棚田百選

調査期間：平成13年（2001）7～10月

調査地域：図4-7参照



地点表記：前頁参照 掲載写真：写真4-6①～④ 使用地形図：1/200,000地勢図（見島・浜田・山口・広島）

- |            |            |         |                   |
|------------|------------|---------|-------------------|
| A 鶯原八幡宮    | B 津和野三本松城跡 | C 弥栄神社  | D 財閥酒造場・津和野城下侍屋敷跡 |
| E 永明寺      | F 堀家住宅     | G 左鏡石垣群 | H 田丸の高津川護岸        |
| I 六日市村上酒造跡 | J 福川石垣群    | K 広見の石橋 |                   |

図4-6 石見西部の梯田分布（調査期間：平成13年（2001）7月～10月）



益田市：中西地区・平原



益田市：中西地区・梨ヶ原



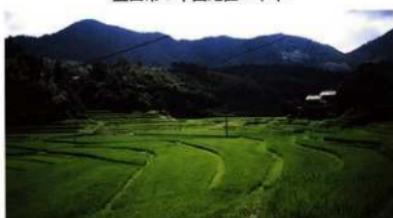
益田市：中西地区・下平



益田市：中西地区・下平



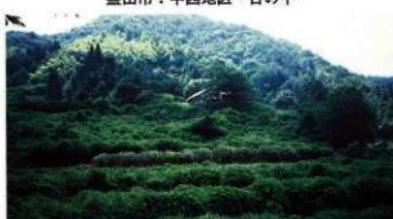
益田市：中西地区・白岩神社



益田市：中西地区・日の平



益田市：豊川地区・板山



益田市：豊川地区・岩倉

写真4－6① 石見西部の棚田景観：1（調査期間：平成13年（2001）7月～10月 同行調査：三浦一美氏）



益田市：真砂地区・原上



益田市：真砂地区・原下



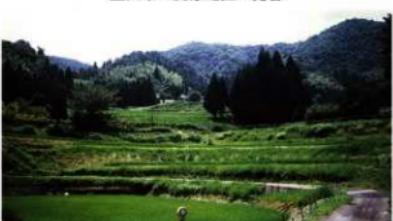
益田市：真砂地区・久保溝



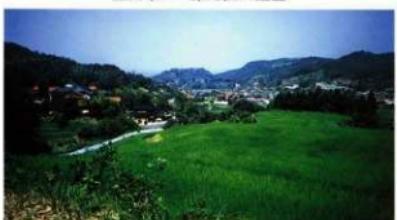
益田市：真砂地区・先谷



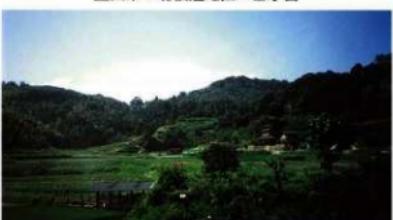
益田市：二条地区・上金



益田市：北仙道地区・乙子宮



益田市：鎌手地区・上平原



益田市：鎌手地区・郷

写真4-6② 石見西部の棚田景観：2（調査期間：平成13年（2001）7月～10月 同行調査：三浦一美氏）



美都町：仙道地区・銀月



美都町：仙道地区・熊子



美都町：山本地區・大神楽



美都町：都茂地区・大田又



匹見町：落合地区・矢尾



匹見町：広瀬地区・小広瀬



匹見町：石谷地区・内谷



匹見町：澄川地区・土井原

写真4-6③ 石見西部の棚田景観：3 (調査期間：平成13年（2001）7月～10月 同行調査：三浦一美氏)



匹見町：澄川地区・土井原の屋敷



匹見町：匹見地区・広見の石橋



津和野町：森村地区・主水畠



日厚：左鎌地区・空疋



六日市町：七日市地区・田丸の高津川護岸

左の写真は、田丸地区の高津川護岸の丸石を施した石造堤防で、江戸時代からの石組工法を伝えている。空積みで造営されているために、却って水勢に強く水生生物の生息に適し、周辺環境に考慮されている。

明治時代の地籍図に描かれた貴重な土木遺産である。



六日市町：六日市地区・村上酒造跡

京都の作庭師が、昭和33年（1958）から数年にわたり酒造会社の本宅の改装と共に池山回遊式の庭園を造営した。山口県錦町の石工が棟梁となり完成させた外壁基壇には、面取りした御影石で布積みが施され見事な切込接ぎの「江戸切り」で仕上げられている。

この工事には鹿児島の各地から石工仲間が参集し、数寄屋造りの建築美と融合した名物の庭となった。

写真4-6④ 石見西部の棚田景観：4（調査期間：平成13年（2001）7月～10月 同行調査：三浦一美氏）

## おわりに～棚田の保全に向けて～

最後に柿木村役場産業課資料に従って、大井谷地区の棚田保全に関する動きについて、平成8年度（1996）以降の状況を見ていきたい。

### 大井谷の棚田保全活動と助はんどうの会に関する動き

- 平成8年度 高知県柿原町視察  
平成9年4月27日 島根県知事棚田視察  
平成9年5月30日 島根大学調査団5名により平成8年度森林調査の報告会  
平成9年10月17日 各国大使館在京農務担当官視察  
平成10年1月26日 大井谷棚田保全検討会（柿木村、島根県関係機関：松江）  
平成10年2月21日 棚田地域振興座談会「棚田を考える会」  
平成10年3月27日 福岡県浮羽町視察  
平成10年4月9日 助はんどうの会発足  
平成10年4月14日 大井谷棚田地域振興検討会（柿木村、島根県等連絡調整会議）  
平成10年5月6日 棚田見学会（牛耕による代播き）  
平成10年5月10日 献穀田植式  
平成10年9月20日 献穀田刈穂式  
平成10年9月20日 第4回全国棚田サミット参加（新潟県安塚町）地元2名  
平成10年9月27日 第1回大井谷棚田まつり  
平成11年3月28日 助はんどうの会総会  
平成11年4月25日 大井谷棚田オーナー現地説明会及び区画抽選会  
平成11年5月16日 大井谷棚田春まつり（田植え）  
平成11年6月12日 助はんどうの会全体会（棚田フォーラムほか）  
平成11年6月19日 棚田地域を考えるフォーラム  
～6月20日 （講演会・交流会・パネルディスカッション）  
平成11年8月3日 大井谷地区「日本の棚田百選」認定書交付式出席  
平成11年9月19日 棚田オーナー収穫祭（お米コース：稻刈り）  
平成11年9月19日 第5回全国棚田サミット参加（三重県紀和町）地元2名  
平成11年9月26日 第2回大井谷棚田まつり  
平成11年10月10日 棚田オーナー収穫祭（お芋コース）  
平成11年10月30日 日本海テレビ「棚田再発見～いなかと都會を結ぶ米つくり～」放映  
平成11年12月18日 助はんどうの会全体会（棚田事業協議）  
平成11年1月 農文協「現代農業1月号：柿木村物語」で大井谷の取り組みが掲載  
平成12年2月10日 棚田オーナー制度、棚田トラスト制度募集開始

- 平成12年2月20日 「いきいきいわみまちづくりフォーラム」が開催され、大井谷の棚田でフィールドワークが行われる。(女性部が昼食提供)
- 平成12年3月11日 棚田地域先進地研修（兵庫県加美町）  
～3月12日 棚田地域先進地研修（兵庫県大塚町）
- 平成12年3月26日 助はんどうの会総会
- 平成12年4月14日 NHK広島「誰が棚田を守るのか」放映
- 平成12年4月23日 棚田オーナー現地説明会・区画抽選会
- 平成12年5月14日 大井谷棚田オーナー春まつり（田植え）
- 平成12年6月8日 広島ホームテレビ「地球派宣言コーナー棚田保全」放映
- 平成12年6月14日 棚田オーナー除草作業日
- 平成12年8月30日 NHKこじまね告知コーナー出演（棚田まつり宣伝、女性4名）
- 平成12年9月14日 第6回全国棚田サミット参加（福岡県浮羽町）地元女性7名
- 平成12年9月17日 大井谷棚田オーナー収穫祭
- 平成12年9月24日 第3回大井谷棚田まつり
- 平成12年10月 現代農業別冊「日本のグリーンツーリズムのすすめ」に大井谷棚田オーナー制度が掲載される
- 平成13年2月10日 日本海テレビ「中山間地で考える農業の未来～柿木村大井谷地区からの報告～」放送
- 平成13年2月10日 棚田オーナー制度、棚田トラスト制度募集開始
- 平成13年3月24日 棚田復田作業
- 平成13年3月25日 助はんどうの会総会
- 平成13年4月22日 棚田オーナー現地説明会及び抽選会
- 平成13年4月 助はんどうの会女性部有志による加工グループ「棚田工房」結成
- 平成13年5月19日 俳優柳生博氏大井谷見学
- 平成13年5月20日 棚田オーナー春まつり（田植え）、ARDドイツテレビ取材
- 平成13年5月25日 NHK「あの人には会いたいー棚田は人を結ぶー三浦輝夫」  
広島放送局より中国ネットで放送
- 平成13年6月15日 NHK「あの人には会いたいー棚田は人を結ぶー三浦輝夫」  
BS-1 全国ネットで再放送
- 平成13年6月17日 棚田オーナー除草作業及び交流会
- 平成13年8月31日 第7回全国棚田サミット（石川県輪島市）地元2名参加
- 平成13年9月16日 第4回大井谷棚田まつり、棚田オーナー収穫祭
- 平成13年11月10日 ルーラル県境フェスタで40名が大井谷で石臼豆腐つくり体験
- 平成14年1月16日 活力あるまちづくり総務大臣表彰産業経済部門で柿木村が表彰  
(大井谷地区の棚田保全と有機農業による村づくりが評価される)
- 平成14年1月24日 第9回しまね景観賞で大井谷の棚田が景観大賞を受賞
- 平成14年2月10日 棚田オーナー制度、棚田トラスト制度募集開始
- 平成14年2月22日 棚田地域先進地研修（長崎県波佐見町）

～2月23日 棚田地域先進地研修（佐賀県西有田町、相知町）  
平成14年2月28日 第10回美しい日本のむら景観コンテスト集落部門で全国土地改良事業団体連合  
会長賞を受賞  
平成14年3月31日 助はんどうの会総会



棚田オーナー 田植



棚田オーナー 田植



棚田オーナー 除草作業（作業説明）



柿木小学校オーナー 収穫



柿木小学校オーナー 収穫



棚田まつり かかしコンテスト表彰式



展望公園から棚田を望む



助はんどうの会 視察研修

## 参考文献

### 石垣全般に関する物

- 田淵実夫（1967）：『日本の石垣』朝日テレビニュース社出版部  
 田淵実夫（1975）：『ものと人間の文化史15・石垣』法政大学出版局  
 北垣聰一郎（1987）：『ものと人間の文化史58・石垣昔説』法政大学出版局  
 小山田了三（1991）：『ものと人間の文化史66・橋』法政大学出版局  
 山口祐造（1992）：『石橋は生きている』華書房  
 三浦正幸（1999）：『城の鑑賞基礎知識』至文堂

### 石垣研究の報告書

- 佐々木卓也（1997）：「日本の石垣文化と集落景観の展開」『歴史地理学会1997年度大会研究発表要旨（佐賀大学）』  
 石丸紀典・三浦正幸・佐々木卓也・上村信行・阿南晶子（1999）：「溪流整備のための石組み・石積み技法に関する研究」『キャンバス内砂防溪流整備とその評価に関する研究報告書』（財）広島県建設技術センター・広島大学  
 佐々木卓也（1999）：「棚田の石垣の歴史」『連続講座「棚田」講義録』棚田支援市民ネットワーカー  
 浮羽町石垣保存実行委員会（2000）：『うきはの石垣・浮羽町実行保存会報告書』  
 浮羽町教育委員会  
 佐々木卓也（2000）：「太田川上流域の石工社会－伝統的技術と石工社会の地域的展開－」  
 「棚田と私・個人会員・個人賛助会員の報告」全国棚田（千枚田）連絡協議会個人会員  
 「棚田と私」編集委員会  
 佐々木卓也（2001）：「棚田の石面の構造」『青淵・628号』渋沢青淵記念財団竜門社  
 佐々木卓也（2001）：「石垣構造を活かした外構整備」『積水ハウス株式会社環境推進部提出原稿（出版検討中）』

### 棚田研究に関する物

- 神田三亜男（1989）：「棚田の民俗」『広島民俗の研究』広島地域文化研究所  
 中島峰広（1999）：『日本の棚田・保全の取組み』古今書院  
 岐阜県恵那市教育委員会（1999）：『石積みの棚田・恵那市中野町坂折地区水出現況調査報告書』岐阜県恵那市教育委員会  
 ライフフィールド研究所（2000）：「[特集] 棚田の景観は何を語るか・輪島市白米、紀和町丸山の二つの千枚田を探る」『SOLAR CAT.39』OMソーラー協会

### 柿木村に関する物

- 柿木村誌編纂委員会（1986）：『柿木村誌・第1巻』柿木村

酒井奎美（1989）：『柿木村の民俗』柿木村教育委員会  
島根県教育委員会（1997）：『石見の城館跡・島根県中近世城館跡分布調査報告書・第1集』  
島根県教育委員会  
石塚尊俊（2000）：『山陰民俗一囗事典』松江今井書店

その他、益田市・美都町・匹見町・津和野町・日原町・柿木村・六日市町をはじめ、島根県教育委員会や島根県庁の担当部局、更に島根大学関係者の懇切なご協力を得た。ここに衷心より謝辞を述べたい。

佐々木卓也

# 大井谷の棚田

大井谷の棚田歴史研究部会研究調査報告書

2002年3月発行

発 行 柿木村教育委員会

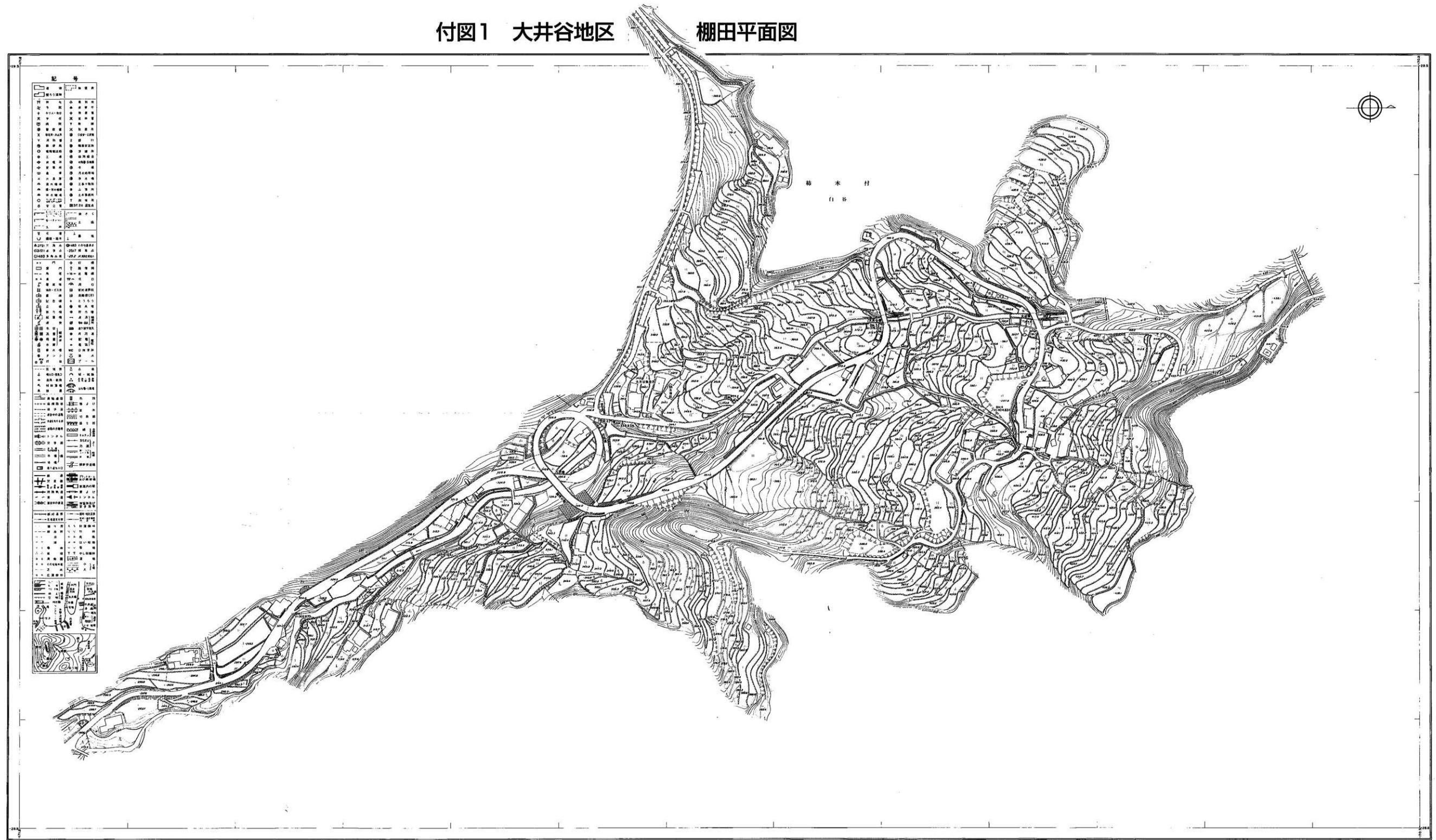
島根県鹿足郡柿木村大字柿木79

TEL 0856-79-2553

FAX 0856-79-2448

印 刷 株式会社 きょうせい

付図1 大井谷地区 棚田平面図



付図2 大井谷地区の利水・畜道のフローチャート

